日本書畫人名辭書

中

日本書畫人名辭書

中巻

杉原夷山
清水退軒 編纂

八畫

始興（畫）渡邊氏、通稱求馬、名は始興、初め狩野氏に畫を學び後光琳の門に入りて研究す又た狩野尚信の畫風を好み水墨淡彩を旨とし風韻溢るゝが如し應擧見て以て名手と稱す寶暦五年七月二十九日歿す年七十三

岡（畫）狩野氏、巨勢金岡の末流にして佛畫を畫くに妙なり永承年中の人なりといふ

侃齋（畫）石川氏、通稱龍助、越後の人、山水墨竹に巧なり寛政年間

房信（畫）富川氏繪草紙商を營む家道衰運に及びて浮世繪師となり吟雪と號し山本九左衞門と稱す江戸大傳馬町三丁目に住す明和年中の人

房信（畫）狩野氏、春笑（亮信）の三男なり孤鶴軒と號す享保年中

知愼 細井廣澤の名 **知新** 松浦松洞の名 **知文** 細井九皐の名 **知信** 狩野梅榮の名 **知久** 柳亭種彦の名 **知秋庵** 石川梧堂の別號 **知足軒** 釋梵芳の別號

往信（畫）狩野往信、通稱數馬眞説の男畫法を父に學ぶ

昔陽（畫）古屋氏、名は鬲、字は公款、通稱十二郎といふ肥後の人、教授を以て業とし江戸に住す傍ら畫圖を作る平生の言行頗る淳儒の風あり聲價一時に振ふ文化三年四月朔日歿す年七十三

油巖（畫）佐久間義和、字は子嵒、小字彦四郎、容軒、太白山人と號す仙臺侯に仕へて畫所となる元文元年二月十一日歿す年八十四

侍從（畫）芝侍從は佛畫師なり琳玄の子、父の畫風を傳へて佛像を畫くに巧なり南都に住し春日の繪所となる元和年中の人

奉時【畫】松本氏、字は周助、奉時道人と稱す浪花の人、常に蝦蟇を愛して其種類を蒐む其書くところ亦多くは蛙なり

奉松 氏名年代詳ならず佛像を書く

夜潮【畫】矢野氏、名は正敏、字は仲觀、夜潮は其號、物集女と稱す先哲の遺風を學びて能く人物花鳥を描けり文政十一年十二月十八日歿す年四十七

夜半亭 與謝蕪村の別號

卓齋【書】小林氏、通稱卓藏、別に大觀と號す京都の書家天保二年五月生る舊瀧口宮人小林佐兵衞少尉の二男、學を好み書法を貫名海屋に授かる

岷山【畫】水野氏、字は子淳、岷山は其號又た絅齋と號す尾張春日井郡新井の城主水野又太郎の後裔林太夫某の第三子なり資性弘量卓落小節に拘らず少にして學を好みまた能書の譽れあり初め留書となり右筆新番會府長に歴任し采色百五十石を賜はる普請奉行となり水事を治めし時貶せられて散官となる再び起されて原職に復し老いて小普請隊長となる時に年八十四享保十九年歿す年八十九

岷山【畫】岡氏 宋紫石の門に學ぶ安藝の人、文化年中

臥月【畫】佐武氏、中井藍江に學びて畫に巧なり天保年中

臥遊 原在中の別號

孟辰【畫】浦野氏、字は子星、青霞堂と號す紀伊の人なり畫を善くす

孟緯 梁川星巖の名

孟喬 建部凌岱の名

孟泉 谷口月窓の號

孟凞 北山寒巖の名

孟彪 高芙蓉の名

孟隣齋 狩野探雪の號

尚通【書】近衞氏、大證と號す後法興院關白政家の子なり明應二年三月二十八日關白となる時に右大臣正二位年二十二、同四年從一位に進み五年左大臣に陞り同六年六月關白を辭せり後太政大臣となり三宮に准ぜらる書を善くす其體飛鳥井家より出で別に一家を成せり古近衞流と稱すまた和歌に巧みなり天文十三年八月薨ず年七十三

尚信【畫】狩野氏、名は尚信初めの名は一信、主馬と稱し自適齋と號す孝信の仲子、守信の弟、父兄に就いて其畫法を極め遂に一格をなし名を世に馳す慶安三年四月七日歿す年四十四木挽町狩野氏開祖

尚貞【畫】青山氏、狩野常信の門人なり

尚濂【畫】祇園尚濂は南海の子、紀藩の儒官なり字は師援、鐵船と號す又た餐霞、百懶の號あり通稱孫三郎、父に學びて能く詩を能くし墨梅に巧なり寛政三年五月歿す年七十九

尚賢【書】原氏、字は子才東都の人儒家にして書を能くす

尚卜【畫】菅氏、蘭林龍と號す初め大岡春卜に學び後ち一家を成す大阪の畫家也文化三年歿す年七十八

尚古 尾形乾山の別號

尚榮【畫】片山氏、肥前の人、天保頃

尚春【畫】荒井氏、名は忠純江戸の人、天保年中

尚齋【書畫】小倉氏名は貞、字は

實採、彥右衛門と稱す長門の人、京都に出でゝ醫を業とし傍ら儒學を伊藤坦庵に學び又た畫を能くす元文二年歿す年六十一

尙山（畫）橘氏狩野派の淇家、文化年中

尙景（畫）片山氏、狩野尙信の門人、元祿年中

尙行 小川笠翁の名

尙友 石田玉山の名

尙賢 高山北淇の名

尙庵 原雙桂の別號

尙友齋 山下池亭の別號

征信（畫）狩野征信、數馬助と稱す了琢の次男、秀信の弟、或はいふ長信の子、昌信の弟なりと未だ其何れか信なるを知らず

芝軒（書）鳥山氏、名は輔寛、字は碩夫、通稱左太夫、芝軒は其號別に入齋又た鳥春の號あり攝津の人、京師に出でゝ專ら唐詩を講ず書法を善くし二手を兼ねて三跡の古風を好む時人洛陽の名筆と稱す正德五年五月十一日歿す年六十一

芝山（書畫）白川景酷玉蕉菴と號す書法に精通し傍ら畫を善くす又た一家をなして妙なり

芝山（書）服部元濟、字は君美、通稱眞藏、芝山は其號南郭の曾孫江戶に住す

芝山（畫）東方氏、通稱眞平加賀の人、安政年中

芝章（畫）原田氏、陸奥の人、松田雲章に畫を學びて能くす安政年中

芝樂亭（畫）櫻井氏、通稱大助、江戶の人、小說稗史の作者なり好みて畫を作る寛政年中

幸仁（畫）幸仁親王は後西院天皇の第三皇子なり出でゝ高松宮を繼ぐ寛文十年八月花町殿故第に移り兵部卿に任ぜらる同十二年五月改めて有栖川宮と稱す式部卿に遷り一品に進み牛車に乘りて宮中に出入することを許さる親王和歌及び書を能くし又た畫を好み狩野永納に學ぶ其畫く所にして世に傳ふるもの多し元祿十二年七月薨ず年四十四

幸緒（畫）衣川氏、字は白觀、浪花の人、幼にして折田氏に養はる伊勢龜山の藩主板倉氏に事へて氏を衣川と賜はる四十二歲にして病に罹り仕を辭して京師に移居し丹青を弄び倦めば即ち琵琶を彈ず書名一時に轟く且つ學和漢に涉りて該博と稱せらる寶曆三年四月十一日歿す年五十五

幸信（畫）狩野氏、常川また隨柳齋と號す甫信の長男木挽町狩野の族明和七年八月十九日歿す年五十四

幸守（畫）巨勢氏の末流にして畫を能くす南都一乘兩院の候人なるべしと巨勢氏の系圖を案ずるに此の人を脫せり今和州唐招提寺の什寶の行基菩薩の像あり絹本にして着色頗る名筆なり備中法眼幸守筆と記せり其裏面に延文二年六月奉修補之康正三丁丑年二月重奉修補之とあり以て其古畫たるを知る歿年等詳かならず

空海（畫）佐伯氏、讃州多度津郡の人、父を由公といふ母は阿刀氏の梵僧懷に入ると夢みて孕めり胎中にあること十二月にして生る幼にして舅氏朝散太夫阿刀大足に從ひて內典を學び弱冠の時出家して石

淵寺の勤操法師に依り薙染して博く經倫を綜ぶ德宗の貞元二十年に入唐して長安に抵り遍く諸刹に遊び名師を求む會々慧果阿闍梨に遇ふ慧果一見して之を喜び即ち爲めに灌頂して授くるに阿闍梨の位幷に諸の法具を以てし國に歸りて其敎を傳布せしむ又罽賓の般若三藏（罽賓は天竺の池の名なり般若三藏は此所より來て唐土に住す）付するに華嚴六波羅密經等の梵經を以てす大同元年歸國す弘仁帝詔して宮中に入り諸宗の碩師を會して佛法を論ぜしむ空海辯論精敏與に抗するものなし帝曰く義固に精しと雖も亦た證ありや否と空海即ち五藏三摩地觀（禪定の名）に入る俄に頂上に五佛の寶冠を湧出し五色の光明を放つ威容赫々たり帝乃ち禮を作す時に諸師皆な屈服す十三年大同上皇其道を悅びて灌頂の法を受く天長元年大に旱す帝勅して祈禱せしむ大に雨ふること三日或は寺中水なきに之を咒すれば則ち出づ今の龍泉寺是なり或は不動使者の法を修すれば則ち身に火焰を出だす或は想觀に入れば室內池となる或は手を以て空に書すれば字體顯現し或は筆を以て水に書けば墨痕滅せず其神異多く此に類す佛菩薩の像を彫刻するに至りては國中に遍滿す其數勝て計る可らず弘仁七年高野山に登りて金剛峯寺を創め大浮屠を建てゝ以て天下に福す承和二年三月二十一日毘盧の印を結び結跏趺坐寂然座に入る是より先七日諸弟子と彌勒の寶號を念ず是日に至りて氣絶す蓋し定を持して以て龍華を待つなり定後五旬身尙温にして鬚髮漸く長ず其徒乃ち之を剃り石壇を疊みて護藏す上勅して弔慰す空海平生の選述甚だ多し今に至るまで擧國誦習す延喜二十一年謚を賜ひて弘法大師と云ふ年六十二假名いろは四十七字の歌は大師の作る所なりと

空洞【書】桑原守雌、字は爲谿、空洞は其號又た以て通稱とす別に方外閑人の號あり平安の人年甫めて五歲好みて字を書す十二歲にして筆札の美貴紳の間に知らる二十五歲世事を謝し自ら禿して婚官せざるを示し唯だ讀書を以て事とす初め合田晴軒に從つて學び業成りて徒に授く餘暇益々筆札を研究す歷代諸家の論說を博覽し唐宋以降の墨池譜法、叢記を抄錄する前後數百卷又た周秦漢魏より唐宋元明に至るまで名人の眞跡遺墨を臨摹すること殆んど四十年藏儲の富比肩するものなかりしといふ禪を好み亦た老莊を喜ぶ晚年活潑無爲隱趣を以て娛みとす平生與に交る所、高遊外、金闌齋、張放蕩のみ延享元年五月六日歿す年七十二

空華【書】名は諦忍、字は空華尾州八事山に住す

空光【書】佛書に巧みなり承和年中

空中齋 本阿彌光甫の號

性一【書】林性一は明國福州の人其先は宋の虞齋先生の裔より出づ歸化して隱元禪師の法嗣となれり傍ら書を善くす寬文十一年五月二十五日歿す

性安【書】梅菴と號す啓書記の門人なり常州太田村講山寺に住す山水花鳥を能くす殊に山水に至りては殆んど周文に似たり年八十餘にして寂す

性信【書】親鸞上人の高弟にして嘉禎元年越中高岡超願寺を創開せし人なり其書ける自像は今該寺に藏す

と云ふ

性瑫 釋木庵の名 **性融** 釋逸然の名

延源〔畫〕沙門なり曾て勅を奉じて兩界の曼陀羅を圖し又た供養の圖十一面観世音の像三千三百三十三體を作れりといふ **延圓**〔畫〕大津三井寺の阿闍梨なり九條伊尹の孫書を能くするを以て世人呼んで繪阿闍梨といふ寬和年中の人 **延光** 青山佩絃齋の名

明堂〔畫〕名は宗宣、春米子と號す其書風致あり大德寺の長老にして碧玉菴に住す天保八年九月二十五日寂す年六十九 **明浦**〔畫〕宮鑑と號す伊勢の人能く墨梅を書き清奇にして遠く揚補之の風あり尋常書家の及ぶところにあらず **明兆**〔畫〕僧明兆、吉山と號す又た赤脚子、破草鞋、靈彩等の號あり淡路の人東福寺の大道禪師に學ぶ然れども天性書を好み往々誦經を廢す禪師深く之を戒む兆敢て從はず頻りに宋元の書法を研究し又た宅間の佛書法に倣ひ自ら超絶の筆法を得たり廣永中東福寺殿司となりて南明院に住す世因りて兆殿司と稱す時の將軍足利義持に愛せらる佛書は其最も能くする所なり方今東福寺に保存せる涅槃の圖は縱三丈九尺橫二丈六尺の巨幅にして應永十五年戊子六月日行年五十七歲破草鞋明兆筆の二十一字を欵せり永享三年八月二十日歿す年八十 **明實**〔畫〕藤原日文明實は長門守藤原共方の族弟なり叡山に上りて剃染受戒す毎日文殊九體を圖し供養すと云ふ寬治七年七月七日歿 **明啓**〔畫〕赤井文次郎と稱す明得水と號し加賀の人なり書法を佐々木志津馬に學び其風を善くせり著書若干皆書法の事に係れり **明子**〔畫〕藤原良房の女、文德天皇の皇后常に書を好みて草花を書くに巧なり昌泰三年五月崩ず年七十二 **明業**〔畫〕等身の佛像を畫けり **明順**〔畫〕佛畫師なり法橋に叙せらる **明靜** 藤原俊成難髮後の號 **明雲**〔畫〕明兆の門人なり應永年中 **明譽** 釋古澗の名 **明室**〔畫〕享德年間の人にして能く山水を書く **明極**〔畫〕名は楚俊、南禪寺に住すもと元の人、虎岩淨伏の法嗣なり元德中渡來し建長、建仁、南禪の諸寺に住す佛日燄慧禪師の號を賜ふ建武三年九月寂す年七十五詩及び書畫を以て世に名あり墨書殊に妙也 **明光** 桑山玉洲の號 **明霞** 片山北海の別號 **明心** 松永貞德の別號

岸駒〔畫〕本姓は佐伯、岸氏、名は駒、又た昌明、字は賁然、可觀堂、華陽、同功館、虎頭館、天開窟等の號あり加賀金澤の人、昌明少うして書を好み四方に周遊して後ち京師に止まり有栖川宮に仕へて雅樂助となる後ち朝廷の官人となりて大屬に任ぜられ又た越前介に遷る天保七年藏人所衆となり從五位下に任ぜられ越前守に轉ず初め沈南蘋の書風を慕ひて其書く所頗る精密なり後ち則諸家を折衷して一家の風をなす名聲大に鳴る水墨の虎は特に有名にして時人爭うて之を求む晩に岩倉の廢寺を修めて以て自ら居り又た一

小庵を山腹に作りて天開窟と名け以て自ら號とす天保九年十二月五日歿す年九十

岸岱〔畫〕岸岱字は君鎭、卓堂又た同功館と號す京都の人岸駒の子なり父の畫風を傳へて能くす筑前介と稱す安政六年十一月四日歿す年六十五

岸良〔畫〕岸氏、名は良、字は子良又た士良、畫雲樓と號す通稱雅樂介初め五郎と稱す岸駒の義子なり畫は能く家風を守りて能くし其最も人物に長ず嘉永五年三月十五日歿年五十五

岸村〔畫〕筆意雪舟及び周文を慕ひ最も人丸の像を畫くに長ぜり

岸規〔畫〕岸隣内と稱す長州の人、畫法を岸岱に學ぶ嘉永年中

京傳〔畫〕名は醒、字は酉星、初名は田藏、岩瀨氏幼字は甚太郎、後ち傳藏又た政演と改む其京橋南傳馬町坊第二街に住するを以て自ら號して京傳と曰ふ一に山東菴と號す是に於て山東京傳の號あり又た醒々老人と稱す人と爲り狂狷にして奇才あり讀書を屑しとせず曾て度曲を松永某に學ぶ又た成らず喜て狹斜の遊を爲し花柳に流連し家に居る一月僅に五六日に過ぎず而れども父母甚だ之を呵せず蓋し見る所ありて然るなり天明中坊間に赤本なる者あり蓋し其表裝の赤きを以てなり後ち又た一變して黃表紙と爲る其文滑稽にして巧に娼妓の狀態を寫す都鄙喧傳盛に時に行はる京傳戲れに赤本一冊を著はし更に其趣きを殊にす遠近傳播聲名大に彰はる是時に當り坊間稗史の梓に上るもの汗牛啻ならず特に京傳を以て出色となす凡そ當時の院本稗史は淫艶浮靡にして風俗を傷害する者多し官令して一切之を禁じ坊間に梓行するを允さず而るに京傳書估某の爲め一兎冊を著はし題して教訓讀本と曰ふ實に花柳の情史に係る官其禁を犯し不經の書を著すを以て處するに法を以てし其家に幽閉す連坐罪を得る者甚だ多し未だ幾ならずして赦に値ふ京傳深く自ら悔悟し復た戲文を作らず而して聲名藉々愈々韜して愈彰る馬夫牛卒と雖ども京傳の名を識らざるなし四方の書估其門に輻輳し來りて新著稿本を需むる日に一日より盛也是に於て實語教稚講釋一卷を著はす明年肆店を京橋銀座第二坊に開き烟草具を賣り以て業となす又た丸藥を制し之を販ぐ名けて讀書丸と云ふ遠近傳播し利市日に萬錢を博す京傳獨り文藻の時輩に超越するのみならず世故に慣熟し事情に錬達す是を以て凡そ施設する所命發奇中絶へて虛矢を見ず文化十三年九月七日京傳其友北川眞顏喜多靜廬と其弟京山の宅集に趣き酒を置き談笑夜に及びて歸る道に病を得韓盧扶けて其家に送る醫藥効なく遂に此夜を以て歿す年五十六兩國回向院に葬る葬の日柩を送る者太田南畝北川眞顏喜多靜廬曲亭馬琴凡そ百餘人皆當世の名士なり

具平親王〔書〕村上天皇の皇子、圓融天皇の皇弟母は代明親王の女庄子女王なり二品中務卿となり千種殿と稱し後中書王と稱す才藝人に絶し最も詩歌に巧みにして又た書を能くす寛弘六年薨ず年四十六

具選〔畫〕岩倉氏、正三位廣雅の嗣子也風流を好み文事を事とし書を能くせり殊に

書道に達し墨畫に巧みなり彩色を施したるもの亦た其氣韻甚だ高し文政七年七月七日薨ず年六十九

具三 高田太郎一庵の別號

定家【書画】藤原氏、俊成卿の男、正二位權中納言たり後ち沙門に入りて明靜と號す書畫を能くす仁治二年八月二十日薨ず八十

定長【書画】藤原氏、僧俊海の子、叔父俊成養ひて子となす後俊成の子定家生るゝに及びて避けて僧となり名を寂蓮と改む丹青を善くす特に和歌に巧なるを以て世に賞せらる建仁二年七月二十日歿す

定昭【書画】菅沼氏、從五位下左近將監たり丹波龜山の城主にして定房の男なり深く丹青の枝を好み絶妙超凡專家も及びがたきものあり正保四年九月二十一日歿す

定頼【書画】佐々木氏、高頼の二子近江の人初め相國寺に入りて僧となり吉侍者と稱す後ち還俗して家を繼ぐ圖書を善くし常に炎帝の像を書く天文二十一年正月卒す

定禪【書画】法橋に叙せられ洛の七條に住す書を能くす

定信【書画】狩野元信に就いて學べり其の姓氏等詳ならず

定信【書画】松平氏、田安宗武の七男にして白川の城主松平定邦の嗣となる書畫及び和歌に巧みなり樂翁公と稱す文政十二年卒す年七十二

定信 狩野興以の名

定信 奈須宗仙の名

定信 狩野柳伯の名

定景 谷東籬の名

定靜 渡邊華山の名

定良【書画】木村氏、江戸の人、千蔭、春海等と交り學を修む徒を集めて敎授す

定明 梅田雲濱の名

虎溪【書】名は永義、もと長州毛利氏の族なり後ち出家して普く天下の諸老に參す寛文中伊達綱村聘して仙臺東昌寺の住職となす禮遇大に厚し元祿中移りて東福寺に住す綱村賜るに金襴法衣と黃金とを以てす世に之を千金法衣といふ後ち復た東昌寺に歸住す虎溪綱村に請ひ別に一寺を創し僧の鐵牛をして開祖となさしむ虎溪學識深遠且つ書を能くす享保八年九月十八日東昌寺の禪室に入りて寂す八十

虎重【書画】永島氏、通稱福太郎、竹林舍、孟齋と號す芳虎の門人にして錦畫を畫く慶應年間の人

虎關【書画】名は師錬、字は虎關、南禪寺の住持なり元亨釋書を著して文名高し又た書を能くす貞和二年七月寂す年六十九本覺禪師と諡す

虎巖【書画】虛舟の法師享保年間の人

虎頭館 岸駒の別號なり

坦菴【書】伊藤氏、名は宗恕、字は元務、坦菴は其號又た通稱とす白雲散人、不輟齋、自怡堂の別號あり京師の人、祖丹後守宗通豐臣秀頼に事へ大阪の役に死す父宗淳亂を避けて京師に居り醫を業とす坦菴父の業を受け醫を江村專齋曲直瀨玄理に學ふ又た儒を那波活所に受く寛文中業を改めて儒となり專ら程朱の學を唱ふ趣前候に仕へて文學となり祿千石を食む猶留りて京師に居り玄理の女を娶りて妻とす玄理は德川

幕府の醫員なり或人坦菴を譏して曰く玄理に黄緑して以て大府の學職とならんと欲すと侯之を聞きて大に怒り坦菴を福井に徵して之を幽する三年其の寃明なるを以て釋されて京に師り文學の職を奉ずること故の如し坦菴年老て文學を廢せず村上友佺伊藤仁齋と相善し寶永五年八月二十四日歿す年八十六

坦庵【書画】江川氏、名は辰英、通稱太郎左衛門、伊豆韮山の代官なり泰西の學に通じ彼邦の砲術に長ず傍ら書畫を好み書は市河米庵に習ひ畫を椿山に學ぶ安政二年正月十六日江戸に歿す年五十五

竺菴【書画】名は淨印、明の人、歸化して黄檗山に在り其第十三世は即ち此人なり書を能くせり後ち退隱して洛西海寶寺に住す

竺仙【書画】名は竺位、字は梵仙、來々禪子と號す南禪寺の住持文名高し貞和四年寂す年五十七

果堂【書】名は永昶、字は果堂、萬福寺十二代の住職後ち海寶寺に住す

宕陰【書】鹽谷氏、名は世弘、字は毅侯、宕陰は其號、一に九里香園と號す江戸の人なり少にして昌平黌に入り學を修む濱松侯に仕へて文學となり顧問に備る後ち徳川幕府の儒官となる慶應三年九月六日歿す年五十九

芙蓉【書画】高氏、名は孟彪、字は孺皮、芙蓉は其號又た中岳書史と號す通稱は大島逸記又た近藤齊宮と云ふ甲斐高梨郡名取邑の人父を尤軒と曰ひ醫を業とす芙蓉方枝を治むるを欲せず京師に遊學し廣く時流に交はる學常師なし專ら漢魏の傳注を以て經義を講習し竟に之を以て顯はる少壯より故あり屢々姓名を變ず蓋し高氏は高梨郡に生れしを以て之を修したるなり資性穎敏にして衆藝を博綜し好みて書畫を爲る柳里恭池大雅を友とし善し又た篆刻を以て一時に喧し蓋し是れより先き榊原篁洲池永道雲細井廣澤等篆刻に名ありと雖も唯明人の一班を窺ふに過ぎず芙蓉出づるに及びて古今印章の制度を商確し遂に秦漢の淵源に遡り流派を探汲して餘蘊なし本邦印章の一技是に至りて大に備はる皆川淇園柴栗山稱して印聖と曰ふ又た兼ねて坊菅公に從ひて朝儀典詁の說を受けて以て故實有職の奥底に通達す傍ら韜鈐射御の枝に及ぶ晩に宍戸侯に任へて儒員となり家を挈げて江戸に來り不幸俄に傷寒を病みて邸舍に歿す時に天明四年四月二十四日年六十三

芙蓉【書画】鈴木氏名は雍字は文熙、老蓮と號す俗稱新兵衛、信州の人、江戸に出て谷文晁に學び後ち阿波侯に仕ふ山水人物を能くし傍ら詩文に長ず文化十三年五月二十七日歿す年六十八

芙蓉【書画】山路愚鈍、芙蓉は其號なり又た峰隱士と號す江戸の書家なり寛政九年六月一日歿す

徂徠【書】荻生氏名は雙松、字は茂卿後ちに避くる所あり字を以て行はる徂徠は其號、又た蘐園赤城翁と號す通稱總右衛門江戸の人其先は參河荻生に居る因りて荻生を氏とす姓は物部故に略して單に物と

稱す父方菴(名は篤)徳川幕府の醫員たり法眼に叙せらる延寳中事に坐して上總に竄せらる徂徠生れて岐嶷五歳字を識り十餘歳能く文辭を屬す十四の時父に謫所に從ひ書を讀みて研究す居ること十二年赦に遇て江都に還る時に年二十五父又た出でゝ醫官となる父の弟觀字は叙達徂徠に命じて己れが家を嗣ぎ博士となさしむ徂徠是に於て帷を芝浦に下して洛閩の學を講ず家極めて貧會々柳澤氏勃興して侯に封ぜらる徂徠武學を以て仕へて十五口糧を食む尋で儒官となりて寵あり累遷して五百石に至る是より先き伊藤仁齋古學を平安に唱ふ徂徠乃ち蘐園隨筆を著はして古學を拒絶す時に年五十既にして李王の書を讀み倏ち感發する所あり舊學を棄てて古文辭を以て古經の楷梯となし一家の言を創立して自ら復古の學と稱し務めて門戸を擴張す詩文は專ら李王を崇び彼の宗元を見ること仇讐啻ならず安藤東野、山縣周南、服部南郭、平金華の徒從ひて之を鼓盪す弟子大に進む名聲藉甚一世に震ふ是に於て一時の貴人公子及び藩國の名士より閭菴處士及び輜徒に至るまで風靡影從唯だ後れんことを恐る海内の文藝之が爲めに一變す徂徠人と爲り英氣豪邁卓犖不羈眼一世を空うす而して其後進に於けるや苟くも一長を擅にせば齒牙を惜しまず嘖々揄揚す其學汪洋浩博雅樂象胥より軍旅法律等に至るまで兼ね綜べざるなし文を爲る縱横馳騁間々詭怪に渉るありと雖も豪放佚蕩一時に冠たり徂徠少き時兵學を精習す故に其仕途に就くや兵學を以てす徂徠初め柳澤侯の故を以て屢々將軍綱吉に見えて經史を辯論す綱吉賜ふに葵章の衣服等を以てす享保六年將軍吉宗又命じて大論衍義に句讀を附せしむ成るに及びて又衣服を賜ふ後ち屢々文學を以て召に應ず十二年特に命じて入見せしむ十三年正月十九日歿す時に年六十三

岳翁【畫】其畵風周文に異なる所なし故に人或は曰ふ周文の別號なりと詳細を知るに由なし

岳守【書】藤原氏、從四位下三成の長子、少うして大學に遊び史傳に渉り且つ草隷に巧みなり貧生温和賢不肖の別なく心を傾けて之を引接す時人皆其の徳に服す近江守に遷る仁壽元年薨ず

昆臺【書】宇津木氏、名は益夫、字は天放、昆臺と號す通稱太一郎、名古屋の人、京師に出でて醫を業とし傍ら詩文和歌を能くす又書に巧なり嘉永元年五月八日歿す年七十

昆陵【書畫】石川氏名は陽、字は東文、河内の人書畫を能くす、

昆芳【畫】長谷川氏、融記と稱す備前の人、狩野派の畫家なり嘉永年中

孤月【畫】雪舟の筆意を學ぶ文安頃の人

孤村【畫】池田三信、孤村又た舊松軒と號す越後の人幼にして江戸に出で酒井抱一に學び晩年明畫を修め稍畫風を一變す世に奇人を以て稱す甞て抱一の著せる光琳百圖に擬し新撰光琳百圖を著せり慶應二年二月十三日病歿す年六十六

孤雲 英一蜩の別號

孤鶴軒 狩野房信の號

孤峰【畫】中根氏、尾張の人、安政中

孤

峯 吳俊明の別號

孤山 【畫】藪氏、名愨、字子原、小字茂二郎、朝陽山人と號す父を愼庵といふ名は弘篤、初め震庵と號す亦た儒を以て名あり孤山父の教を受け後ち京師に遊學し該博淵深天下に推さる寛政年間歿す

昌安 【畫】狩野元信に就いて畫を學び特に彩色を善くす山水花鳥に巧なり

昌池 【畫】周文の門人彩色の鷹を畫くに妙なり

昌以 【畫】富世氏岩本昌運の甥にして初め新八と稱す畫法を狩野安信に學べり

昌運 【畫】岩本氏、通稱市右衛門、狩野安信に學び後ち法橋に敍せらる

昌信 【畫】山本氏、菊治と稱す江戸の書家なり安永九年二月十五日歿す

昌信 二世狩野休伯の名

昌信 月岡雪鼎の名

星彥 【畫】飯尾氏、名は昌彥、三河の人、岡本俊彥に學ぶ安政年中

昌川 【畫】狩野常川の二男文化三年七月早世

昌次 【畫】寺澤氏、鶴澤探山に學ぶ安永年中

昌雲 【畫】太田氏、狩野永眞の門に學び狩野氏と稱す正保年中

波山 【畫】服部氏、通稱謙藏、字は自牧、下總國豊田郡下石毛村の人、家世々農を業とす幼より畫を好む初め下谷の山下に住す戊辰の役兵燹に罹り居を根岸に移し遂に畫を以て業とすもとより常師なし然れども專ら南宗を主とす初め學を和田蹊齋に受け大沼枕山、小室樵山等と訂交來往す性山水を好む故に信越の奇勝を探り南紀の秀靈を踰み以て其景を寫す人と爲り淳樸にして世と合はず維新後といへども猶は結髮舊の如く外貌を飾らず一見野人の如し明治二十七年十月十日病んで歿す駒込大觀音の域內に葬る

波山 【畫】服部氏、書を能くす畫も亦巧みにして山水に長ず文政七年四月生る前に出せる服部波山とは全く同名異人なり

波響 【畫】蠣崎廣年、字は世祐、波響と號し將監と稱す奥州松前の人初め宋紫石に學び後應擧の門に入る花鳥は其の最も善くする所なり

來禽 【畫】女史は平安の畫家なり羅井氏の女にして後ち大島芙蓉の妻となる好みて花禽を畫き巧妙にして清人の風趣あり天明年中

來章 【畫】中島氏、近江國大津の人、神通堂と號す初め畫を渡邊南岳に學び後ち應擧の風を模す華頂の宮より富貴長命の印を賜はる明治九年歿す

來鳳 【畫】歸化の明人なり隱元禪師と共に渡來して長崎の崇福寺に住す好みて畫を作る氣品遒逸最も墨竹に巧みなり承應年間歿す年八十有餘

來禽堂 澤田東江の別號

季鷹 【畫】加茂氏、季鷹は京都加茂神社の祠官なり山本氏、正四位安房守に任ぜらる雲錦亭と號す初め有栖川宮幟仁親王に請うて和歌を學び後ち江戸に至り加藤千蔭と交り學ます〳〵進み其名海內に鳴り樵夫牧童といへども知らざる者なし是に於て日々其門に來りて詠歌の揮毫を乞ふもの市を成す又た狂歌を善

くす其門に入りて學ぶもの上は貴顯縉紳の徒より下俳優のごときものに至る天保十三年九月歿す年九十一

季茂【畫】渡邊氏、儒にして能書家なり鶴溪と號し福島造酒と稱す伊勢山田の神職たり從四位下に叙せらるはじめ伊藤仁齋に學ぶ享保十八年七月十九日歿す年五十九

季賴【畫】狩野氏名は季賴元信の次男初めの名は乘信、治部大輔たり父に先だつて歿す元龜年間の人

季昱【畫】佐伯氏、大藏史生に任じ繪所預となる曾て大嘗會御屏風を畫く應保年中

季長【畫】鎌倉永福寺の扉に畫けりと傳ふ修理少進たり建久年中

季信 岩本昌運の名

武曰【畫】宮澤氏、信濃善光寺の人、岸駒に學びて畫を善くし兼ねて俳諧を以て時に名あり年五十餘平安に遊び岸駒の家に寄食し常に師と將棊す品やや低し然れども旗鼓相當る一日梅泉、岸駒を訪ふ時に盛夏の候炎熱甚だし武曰綿袍を着て汗面に滿つ梅泉訝りて問ふ武曰、曰く今日吾が將棋大敗して斯の如きに至る蓋し武曰勝てば則ち岸駒の畫一幅を取り敗くれば則ち炎暑に綿袍を着し初寒に單衣を着す常に以て例となせるなり

武禪【畫】黒井道觀、字は全、初め高瀬船の船頭たり甚だ畫を好み後ち遂に畫を以て業とす文化八年歿す年六十七

武清【畫】喜多氏、名は武清、字は子愼、通稱榮之助、可菴と號す又五清、鶴翁の別號あり谷文晁に從ひて學び又た狩野探幽の畫風を慕ひて最も人物花鳥に巧みなり安政三年十二月歿す年八十一

武禪【畫】墨江道寛、字は子全、武禪は其號又た朦朧齋と號す大阪の人、初め船頭なり性畫を好み月岡雪鼎に學びて遂に畫を以て業とす又だ詩文を巧にす常に酒を嗜み生涯清貧にして妻子なし文化七年歿す年七十三

武禪【畫】長田氏、月岡丹下の門人にして畫を能くす常に淸貧に安んじ陋巷に住して晏如たり炎暑酷寒のときには毫も畫かず夏月は唯石膏を以て假山を作る其技甚だ巧にして八方皆正面のごとし畫法によりて工夫せる所なり

武藏【畫】宮本武藏（一に無三四に作る）名は政名、幼時七之助、後ち友次郎と改め最後に武藏と改む二天と號す二刀流劍法の祖なり播磨の人、赤松の支流に出づ武名天下に鳴る傍ら衆藝を綜べ物として涉獵せざるはなし畫を海北友雪に學ぶ頗る氣韻あり其畫くところ多くは達磨或は鍾馗の圖にして山水等は稀れなり且つ遺跡世に多からず故に世大に之を珍重す正保二年五月十九日熊本城下に病歿す年六十四

武信 狩野伯壽の名

武一【畫】喜多氏、武清の男、畫を父に學ぶ文久年中

武保 菊池容齋の名

武昌【畫】菊池氏、容齋の男、畫を父に學び早く名手の稱あり天保年中父に先ちて歿す

武陵【畫】森氏、通稱直三郎、因幡の人、天保年中

林竹【畫】岡氏、名は義道、字は渤海、林竹は其號又た卽翁と號す通稱三右衞門、鳳岡の門人に

して書を能くす

林貞 羽賀休心の別號

林昌 [畫]松原氏、狩野派の畫人寶永年中

林叔 [畫]井尻氏、狩野主昌に學びて能く其體を得たり

林翁 [畫]北山壽啓、理菴と號す江戸の畫師なり明和四年四月二十七日歿す

林犀 [畫]川崎氏、名は整儀、久次郎と稱す江戸の畫家なり享保三年八月歿す

林齋 [畫]山內帶岳は江戸の人なり畫を岡島林齋に學ぶ明治二十二年歿す年七十三

林屋 岩瀬半夢の號

林幽甫 小柴守直の別號

林麓草堂 內田玄對の別號

周揚 [畫]雪舟の門人、墨畫の鐘馗を畫けり天文頃

周文 [畫]僧周文、字は等慶、越溪と號す別に春育、岳翁越溪、片山翁等の號あり近江の人京師相國寺に住す如雪に就きて畫法を學び出藍の稱あり應永二十一年正月如雪より畫譜君觀臺なるものを授かる畫家の秘本也畫く所の山水人物花鳥は馬遠夏珪顏輝の法を用ゐ墨畫は牧溪玉澗の奧を極む畫風濃密にして筆力巧緻に山水雅韻にして奇骨あり雪舟、宗丹元信寺宋元の堂に上ることを得たるは皆周文のの楷梯あるに由りてなり應永年中の人

周柵 [畫]高野山の僧にして畫を好み雪舟の筆意を學ぶ

周耕 [畫]大和多武峰に住す雪舟に學びて畫を善くす曾て雪舟に從つて明に遊ぶ水墨の山水に長じ花鳥之に次ぐ永正年中の人

周豪 [畫]畫を能くし鐵舟に似たり夢窓と時を同じうせる人

周惠 [畫]雪舟の畫法を學べり年代詳かならず

周峰 [畫]森氏、名は貴信、周峰は其號、別に鐘秀齋と號す浪花の人、森陽信の弟なり初め畫を吉村秋山に學び後ち月岡雪鼎に從ふ最も山水人物花卉に巧み也法橋に叙せらる陽信貴信狙仙の三人兄弟各畫を以て稱せらる文政六年歿す年八十六

周制 [畫]彌陀及弘法大師の像を畫けり文保年間の人

周支 [畫]周文に學びて能くせり

周孫 [畫]周文を學びて筆意能く似たり其畫の世に遺れるもの稀れなり

周元 [畫]雪舟の畫法を學び等身の達磨を能くす天文頃

周德 [畫]惟馨と號し雲谷庵主と稱す周防の人、雪舟に就いて畫法を學び山水人物に長ず其畫く所の水墨の山水に龜陰の僧周良の賛するものあり賛に曰く雲谷庵主周德以繪事鳴西周者也、其徒波月等薩出紙以見需畫本、周德所筆寫玉磵所摹之佳山水以付焉と永享頃の人

周信 [畫]狩野氏初め右近と稱す如川また泰寓齋と號す常信の長男、中務卿法眼に叙せらる父に學びて名手となる享保十三年正月六日歿す年六十九木挽狩野氏第三世

周溪 [畫]渡邊清、周溪と號す土佐の畫風を學び筆致精巧毎圖必ず捺印して落款少し文久元年五月七日歿す年八十四

周山 [畫]吉村充與、探仙と號す性川充信に學び狩野風の畫を善くす又根付を彫刻するに巧なり後ち法眼に叙せらる安永年間の人なり

周水 [畫]鈴木氏、

井出正水の門人書風師に劣らず

周位【書】畫僧なり天龍寺に居りて侍者となり書を能くす夢窓國師の畫像は大概周位の畫く所なりと云ふ或は曰ふ夢窓國師の侍者となり道德の聞え高しと

周峰【書】森貴信、鐘秀齋と號す狩野派の畫人なり大阪の人吉村周山の門に入りて學び後ち月岡雪鼎に就いて學べり人物山水花鳥に長ず文政六年歿す年八十六

周譽【書】狩野氏、名は親信舟川の子なり畫を父に學びて能くす明和年中

周榮【書】狩野元信の門人、元龜年中

周樂【書】浦名氏、吉村周山の門人安永年中

周圭【書】吉村氏、周山の男、畫を能くし法橋に敍す天明年中

周岳【書】曾根氏、吉村周山の門人、安永年中

周南【書】吉村氏、大岡嘯川の門人、安永年中

周南【書】山縣氏、名は孝孺、字は次公、少助と稱す周南は其號、周防の人、年十九父に從ひて江戸に來り物徂徠に師事す徂徠時に初めて古文辭を唱へ和するもの尙寡し獨り安藤東野從ふ周南東野と互に研究切劘す徂徠亦其人を得るを喜ぶ爾來徂徠の學日に與り從ひ學ぶ者益盛んなり遂に海內を風靡するに至る是に於て其徒蘐社の高足を語れば先づ指を周南東野に屈す徂徠二子を待つこと群弟子に異なり江戸に居ること三年業成りて歸る正德元年韓使來聘す幕府其過る所の郡國に命じて饗應せしむ使舟赤馬關に至る長門侯乃ち諸國士を遣はして接待せしむ周南亦之に預る時に年尙ほ弱し而れども韓客と應酬敏捷なり韓客大に賞異す對州の學士雨森芳洲亦稱して海西無雙となす是に於て聲譽藉然一時に著はる是後ち侯朝覲すれば輙ち從ひて西し常に其側を離れず侯嘗て學校を興し師導を設け諸生を養ふ釋奠養老の禮時を以て行ふ六藝武技皆な其中に肄習す名けて明倫館と云ふ而して周南の計畫多きに居るといふ元文二年舘の祭酒小倉尙齋死す周南代りて祭酒となる學事の外兼ねて時事に通ず侯に講筵に陪し或は間宴に侍す啓沃諷諭陰に匡齊の功を盡せり或は家老有司の爲めに謀りて裨益する所少なからず又た大義を斷ずるに臨みて獨見の明に據り侃々奪ふべからず人皆な能く敬服す嘗て侯命を奉じて公室譜牒、諸臣系譜を撰す寶曆二年八月十二日歿す年六十六

周興【書】吉村氏、周南の弟、大岡嘯川に學ぶ安永年中

周保【書】吉村氏、周山の門人、天明年中

周繼 釋雪村の名

周村 佐竹永海の別號

周雪 加茂季鷹の號

周雪 服部南郭の別號

周溪【書】渡邊氏、通稱は清、尾張の人、畫法を田中訥言に學びて土佐家の風格を得山水花卉人物に長ず有職の畫は精巧緻密最も世に稱せらる安政年中

其角【書】榎本氏、本とは竹下氏、母氏を冐す晉子寶井及び雷堂は別號也近江堅田の人、父を東順と云ひ醫を以て某侯に仕ふ其角初めの名は順哲、父の業を繼ぎ又書を善くす初め佐々木文山を師とし後米南宮を喜びて別に機軸を出し自ら寶晉齋と號す其俳諧は則ち芭蕉翁を師とし世の爲めに推さる所謂十弟子

の首なり然れども酒を好みて放蕩生業を事とせず江戸に來りて堀江町に寓し其友服部嵐雪、小川破笠と同居し三人一被を共にして手足皆な露はれ飯ごとに唯々酗蒸一味のみ而かも嘯傲自若たり居ること數年聲名大に興る嘗つて門人數輩と舟を墨水に浮べて三圍祉に詣り農夫の群を成して鼓噪するを見其の故を問ふ答へて曰く旱甚しく野に青草なし雨を神に祈るなりと門人請ひて曰く古は名歌神を感じて能く膏雨を致す師豈意なからんやと其角固辭す農夫之を聞き其禿頭なるを以て誤て僧となし爭ひ來りて拜して曰く大和尚大菩薩苦を救へ苦を救へと其角已むを得ず歌を作りて之を祠に奉じ默禱頃刻にして黒雲湧出倏忽にして天に漫り雨颯然として來る恰も盆を翻へすが如し農夫歡呼し門人大に駭く其角又た何に由て然か致すを知らず時に元祿六年六月二十八日なりと云ふ寶永四年二月三十日歿す年四十七

其相【書】田其相字は子玉浪花の人書風一家をなす頗る風致あり

其明【書】歐陽其明は恒善の男なり父に學びて書を能くす

其寧【書】關氏、字は子永、南樓と號す其寧は其名、源藏と稱す本と落合氏、書を關鳳岡に學びて其風を能くす因て嗣子となりて其業を繼ぎ土浦侯に仕ふ名一時に高く黒蹟海內に流布す寛政十二年四月二十九日歿す小日向稱名寺に葬る年六十八

其明【書】中野氏、防琳齋と號し晴々齋と號す畫法を鈴木其一に學びて善く師法を守る明治二十五年五月歿す年五十九

其一【書】鈴木氏、名は元長、爲三郎と稱す其一は其號又た噲々、菁々の別號あり蠣潭の養子、酒井抱一の家扶也畫を抱一に學び山水人物花鳥を善くす其傑作は師抱一に讓らず安政五年九月十日歿す年六十三

其正 呉北汀の名

其融【書】市川氏、江戸の人、鈴木其一に學ぶ安政年中

其英【書】田口氏、一勇齋國芳の女婿なり浮世繪を能くす安政年中

其樂【書】山田氏、通稱耕造、豐前の人、南宋畫家なり文久年中

其榮【書】村越氏、通稱辰之助、江戸の人畫法を鈴木其一の門に學ぶ天保年中

其節【書】來次氏、鏸次郎と稱す江戸の人畫を鈴木其一に學ぶ明治十九年歿す

長英【書】伊藤氏、字は重藏、又た以て通稱とす梅宇と號す仁齋の二子東涯の異母弟寶永中褐を德山に釋く正德元年韓使來聘す德山侯時に其接伴員となり長英をして專ら文翰の事を掌らしむ長英韓使と唱酬談論詞鋒挫けず韓使之を稱す享保二年致仕して京師に退き生徒に敎授す三年福山侯に仕へ家を携へて移居す是より先福山の地皆山崎氏の學流なり長英此に至りしより闔國風に向ひ文學一變して往時の風習跡を絕つと云ふ私に諡して紹孝(一に康献に作る)と云ふ長英人と爲り魁梧健談文は韓歐を主とし詩は李杜に原づく常に陸務觀集を愛して曰く老蒼宏雅老杜に讓らずと鑽研博綜老いて彌々篤し本邦未だ眞に放翁の詩を知る者なし眞に之を知るは長英より始まると其子弟を訓導する寬厚にして倦まず鉛槧自から娛しむ延享二年十月二十

八日歿す年六十三

長嘯子【書】木下勝俊、初め字を大藏と曰ふ肥後守家定の長子なり幼より豊臣秀吉に仕へ從五位下に叙し若狹守に任じ羽柴氏を賜はり龍野城主となる天正十六年從四位下に叙し侍從に任ぜらる文錄三年若狹に封ぜられて采邑八萬一千五百石を食み小濱城に居る大阪の役事平ぎて後ち封を奪はる乃て洛東靈山に潛居し名を長嘯子と改め剃髮して入道す是より歌を詠じ風月を娯しむ又た大原野に住み天哉翁松洞と改む慶安三年六月歿す年八十一

長隆【書】土佐經隆の次男後ち姉小路と改め別に一家をなし從五位下越前守に叙任せらる父の畫法を得て妙手に至る氣韻甚だ高し弘安年中の人

長春【書】長谷川氏、通稱典之丞浮世繪を畫く貞享頃の人

長章【書】土佐長隆の男出でゝ光正の後ちを嗣ぎ能く家法を守る從五位下に叙し越前守に任ぜらる延慶年間の人

長洲【書】大阪の人、安永天明の頃尾形光琳の畫風を學ぶ

長秋【書】伊藤氏、字は萬年匡山と號す書を松山天姥に學ぶ天明七年八月二十日歿す年五十二

長月【書】能勢氏、狩野安信の門人にして初め山三郎と稱す

長吉【書】狩野元信に就いて畫法を學び風致あり其事歴詳かならず

長隆【書】藤原氏、家隆甥のなり姉小路法眼快閑と號す建治年間の人

長春【書】宮川氏、長左衛門と稱し春旭堂と號す尾州宮川村の人、因て宮川氏と稱す土佐派の畫を好み岩佐又兵衛の圖に依りて當時の風俗を寫すこと太だ妙なり畫風岩佐に似て菱川師宣と同じく落款に日本繪宮川長春とあり日本繪を好む人特に之を愛す子孫、氏を勝川と改め亦皆大和繪に巧なり元祿享保年間の人なり

長廣【書】大橋氏、通稱九右衛門柿園と號す京師の人本居大平翁の門に遊びて古學詠歌を修し業大に進み名世に鳴る傍ら書を善くす嘉永四年三月五日歿す年六十四

長譜【書】楠長譜は織田信長の書史たり書風鳥飼流より出でゝ別に一家をなせりといふ

長尊【畫】河内國觀心寺蓮嚴院に住す密宗の僧にして畫に巧みなり明兆を師とし專ら佛像を畫く筆法最も大畫の法を得たり觀心寺に藏する所本堂中兩界四天皇像及び涅槃像太だ精妙應永年中の人

長明【畫】竹内氏、字は雪窓、雲崖と號す讚岐の人文化年中

長秀【畫】大阪の人、俳優の似顔を畫くに巧みなり天保の頃

長丸【畫】桂向亭、浮世繪を善くす享和年中の人

長衡【書畫】伊藤長衡、字は正藏、又以て通稱とす、介亭と號す仁齋の三子、東涯の異母弟なり父歿して後ち兄東涯の撫育を受け家學を研摩す享保十一年、年十二にして高槻侯に仕ふ猶平安に居り屢々高槻に往き經義を講授す侯家待つに賓禮を以てす恩遇甚だ渥し其侍讀の職にあるや四世に歷事す亦藩の政事に參與す頗る獻替の功あり長衡文學の餘兼ねて臨池の技を能くし尤も行草に巧みなり又繪事を善くす蘭竹花卉山水岩湍を寫すに頗る風致あり其人を待つに一つに恭敬寛裕を以てす故に人皆稱して乃父の風あり

とす安永元年十月二十四日歿す年八十九小倉山二尊院先塋の側に葬る私に謚して謙節先生と曰ふ著はす所謀野危言救荒小言經濟小言謙節遺稿あり

長家妻【書画】大宮氏、法住寺爲光の孫、齋信の女なり畫を巧にす

長利【書画】板谷氏、廣隆の子、桂舟と號す畫を父及び住吉弘貫に學び幕府の畫師となる天保年中

長年【書画】關氏、美濃の人安政年中

長年【書画】前田氏、鹽川文麟に學ぶ明治年中

長祥【書画】堀越氏、信州の人、畫を岡本豐彦に學ぶ天保年中

長庚 與謝蕪村の名

長月 東東寅の別號

長興 龜田鵬齋の名

長江 建部凌岱の別號

長祥 淺野蔣潭の名

長胤 伊藤東涯の名

長堅 伊藤蘭嵎の名

長洲 增山雪齋の別號

長信 一世狩野休伯の名

長頭丸 松永貞德の別號

長江軒 尾形光琳の別號

長生庵 堀内仙鶴の別號

芭蕉【書画】松尾氏、俳諧中興の祖と稱せらる伊賀上野の人、名は宗房、初め通稱金作、後ち甚七郎と改む後ち又た忠左衞門と云ふ芭蕉は晩年の號なり風羅房桃靑、釣月、羊角、羽扇等の別號あり畫は彩色を用ふるもの稀れなり概ね粗畫なりといへども氣韻自から備はる書も又た佳なり元祿七年十月浪花の客舎に歿す年五十三

政貴【書画】小堀氏、遠江守政一の三男にして十左衞門と稱す茶道に精しく書法に巧みに名聲世に高し寶永元年六月二十三日歿す年六十六

政尹【書画】小堀氏、通稱權十郎、蓬雪と號す政一の二男、德川幕府の旗下にして千石を食む茶法及び書法を父に受けて之を善くし畫を嗜み山水鳥花人物に巧みなり毎に半井卜養と交はる卜養は幕府の醫官にして狂歌を善くす依て狂歌の贅あり元祿七年八月四日歿年七十

政純【書画】永田氏、通稱瀨兵衞、長門藩士、家世醫を業とす政純其嗣子にあらざるを以て專ら心を經史百家の書に潛め傍ら武技を修す博聞強記最も國史に通じまた能書の聞えあり元祿十年別に仕へて一家をなす官に在ること六十年寶曆三年歿す年八十三

政信【書画】奧村氏、初め志道軒と號し後ち芳月堂と改む又丹鳥齋と云ふ文角又た源六と稱す江戸の書肆なり初代鳥居清信の門人にして能く邦俗の人物等を畫き多く繪草紙となりて出づ京保年中の人

政美【書画】北尾政美は杉皐と號し後ち紹眞、蕙齋と改む通稱三次郎江戸の畫人なり畫を北尾重政に學ぶ因て北尾政美と稱す巧みに浮世繪を畫く又た谷文晁の門に入りて畫法を研究す後ち松本越前侯の藩士となり從來業とせる出版發賣の書を止め落髮して鍬形紹眞といふ文政七年三月歿す

政吉【書画】淺利氏、字は金助、蒲生家に仕ふ圖畫を好みて能くす元祿年中

政信【書画】菱川氏、字は守節、畫法を師宣に學び能く其風を得たり

政一【書画】小堀

氏、字は作助、父を正治といふ世々近江に住す豐臣秀吉に仕へ後ち德川家康に仕ふ春屋國師に參禪し剃髮して素甫大有居士と稱す和歌及び書畫を能くし挿花の法に通ず點茶は吉田重能に學び其法を熟得ず遠州流の茶法は即ち政一の始むるところなりといふ正保四年二月歿す年六十九

政子【書】源頼朝の室平氏、北條時政の女也賴朝の薨ずるや剃髮して尼となり如實二位尼と稱す嘉祿元年七月十一日薨ず年六十九書を善くし假名書のもの今尙ほ世に存すといふ又た兼ねて圖畫を能くす鎌倉壽福寺所藏の釋迦の像は竹を以て構成し紙を以て貼造す世に之を籠釋迦と稱す宋人陳和卿の作に係る年世久遠にして頗る壞損す元祿四年之を修補せんと欲し拓して其の中を見れば觀音の畫像二十四片あり而して紙ごとに其の畫きたる日を記入せり蓋し日課として畫くところなる歟當時狩野常信これを見て平氏の畫く所とす實は政子の畫く所なり其模本筆法婉暢殆と專家の如しといふ

政房 奧村政信の門人寶曆年中

政信 狩野宗仙の名

政演 山東京傳の名

東江【書】澤田鱗、字は文龍、東江は其號、又た來禽堂、萱舍、靑蘿館、玉島等の別號あり通稱は文治、文治郎後ち文藏と云ふ本と源氏、江戶の人、家世商を業とす東江に至つて始めて學を好む之を以て一世に振揚せんと欲す林鳳岡の門に入りて專ら程朱の學を攻め性理の說を研究す後ち又た木澶洲山縣柳莊と漢魏の古注を講習す經義別に一格を構ふ又兼ねて墨癖あり運筆の法を高頤齋に受く頤齋は玄岱の子にして書名あり其筆法明の王履吉より出づ東江講經の暇專ら其法を學ぶ尤も草隷に巧みなり兼ねて六書に精し年四十を過ぎ王氏の書は古法に非るを知り晉の二王を奉崇して別に一家を成す其人世の所謂書家者流に非ずと雖も經學文章は書名に掩はれて世人今に至るまで之を知るもの少し又畫及び篆刻を善くす聲價一時に高し初め平林氏を稱す故に平鱗（鱗麟同字）を名とす字は景瑞東郊と號す後ち名は麟字は文龍と改む又た兩國橋畔の箭倉に居るを以て人呼びて東江先生と曰ふ故に東郊を改めて東江と爲すと云ふ寬政八年六月十五日歿す年六十五嘗て山縣大貳の獄に嫌疑を蒙り町預となり東和四年八月無罪となるといふ著はす所書述、書話、書府、書則書範、書學筌外數種あり

東齋【書】菅井氏、通稱岳輔、東齋は其號又た梅關山人と號す仙台の人なり根本常南に就いて學ぶこと數年略其道を得たり既にして江戶に出で谷文晁の門に入りて學ぶ文晁異派を雜ゆ東齋憚ばす去つて京攝に遊び遍く名蹟を訪ひ臨模甚だ勤む偶々淸人江稼圃の書を市に見て之を奇とし其來りて長崎に在りと聞き遂に往きて贄を委す稼圃東齋の有識を喜び悉く之に秘訣を傳へ兼ねて詩及び書法を授く別に臨みて墨梅を寫さしめて携へ歸る東齋是に於て更に梅關と號す長崎に留まること十餘年歸りて浪華に寓す之れより名聲遠邇に聞こゆ殊に山水を巧みにし又た梅の書を能くす當時越後の雲泉と並び稱せられ

仙台の梅關といふ終身娶らず平居瀟然酒を以て筆を扶け豪放決樂常に言ふ吾れ妻孥なし書を以て世に遺す是れ子孫なり子孫は畫ならんを欲す故に墨を惜む能はずと蓋し世の輕妙を以て拙を飾るものを諷するなり天保十五年正月十二日終る年六十一

東暉【畫】山脇廣成、字は子憲、晳提また既白と號す京師の人松村月溪の門に入りて畫を學ぶ人物花鳥に巧みに後ち自から一格を爲し佛像を畫けり天保十三年八月二十三日歿

東所【書】伊藤氏、名は善韶、字は忠藏亦以て通稱とす東所は其號東涯の長子克く學業を繼ぎ家聲を墜さず文化元年七月二十九日歿す年七十七私に修成先生と謚す

東里【書】伊藤氏、名は弘美、は延藏、東里は其號、東所の嗣子實は東涯の第三子にして東所の弟なり文化十四年五月二十四日歿す年六十一私に謚して恭敬先生と曰ふ

東里【書】澤田氏、名は千之、字文己、文二郎と稱す東江の男、父の書風を以て世に鳴る

東涯【書】伊藤氏、名は長胤、原藏と稱す東涯は其號、又た慥々齋と號す仁齋の長子なり三四歳にして能く字を知る長ずるに及びて博聞強記善く文を屬し經術に深くして家學を繼述す人と爲り沈靜寡然恭儉謹愼其言訥々然として口より出づ能はざるが如し然れども經義を解剖する精微神に入る又た人の過失を擧げず紀伊侯其名を聞きて聘すれども就かず台閣公卿往々弟子の禮を執る是時に當りて俊傑輩出各々旗幟を一方に竪て互ひに相詆排すれども東涯は一語も他人の學術に及ばず菅麟嶼初め物茂卿に學び心に東涯を慕ひ遂に笈を負ひて之に赴き業を向ふ人書紙を乞ふあれば貴賤長幼を論ぜず皆立ところに應ず又た他の嗜好なし終日矻々手に卷を釋かず而して得る所ある毎に之を劄錄す其著述身に等し皆天下有用の書なり東涯名教を以て自任す詩文は其餘事なり然れども亦一世の鉅匠たり文は唐床の大家を學ぶ縝密精整浮躁の態なし詩は門戶を堅持せず故に其態一ならず然れども其の當時李王を尸祝するものに比すれば一種の滋味ありと云ふ又資性利欲に淡なり一日二條町を過ぐ會々藥囊の路上に遺るあり諸生をして之を拾はしむ中に金數十兩あり東涯眉を顰めて曰く當に之を遺者に還すべしと即ち其地に立ちて待つこと良久しく日將に昏れんとす乃ち歸りて之を神棚に置き伊勢の巫祝至るに及びて付して以て大神宮に納む元文元年歿す年六十七私に謚して紹述先生と曰ふ

東澤【畫】兒戲及び佛像の圖を畫く常に其畫を懷にし若し乞ふものあれば出して直ちに之を與ふ

東溪 石川丈山の別號

東溪【畫】別所氏、通稱權右衛門、名は則房、雪山と號す後ち東溪と改む對馬侯の臣なり京都に住す岡本豐彥の門人にして山水花鳥に巧みなり天保年中

東溪【畫】田村氏、京都の人、畫を景文に學び又た描金を巧にせり天保年中

東溪【畫】森氏、上野の人南宋畫家也天保年中

東溪【畫】小倉不重、東溪と號す讃岐の人淸人沈南嶺の畫法を好みて設色に巧なり

東軒【畫】貝原氏、名は初、字は得生、東

軒は其號、鴻儒益軒の妻、秋月の藩士、江崎廣道の女なり夙に經史に通じ和歌を能くすまた隷書に巧みなり常に益軒に從ひて名勝舊跡を探る益軒多く遊記あるもの一に東軒の手に成るといふ正德三年九月二十五日歿す年五十二

東湖〔書〕藤田彪、字は斌卿、通稱虎之助後ち誠之進と改む東湖は其號、水戶藩士幽谷の子なり文武兩道に通じ最も經濟の才あり夙に導攘の大義を唱へ烈公を輔けて企畫する所多く一世の仰望する所となる安政二年十月二日江戶大地震あり屋梁崩れて壓死す年五十著す所回天詩史、弘道館記述義最も世に行はる明治二十二年二月十一日憲法發布の當日特旨を以て正四位を贈らる

東邱〔書〕江間方壽、字は子靜、通稱德中、仙子樓と號す書家なり安政三年十月十一日歿す

東野〔書〕安藤煥圖字は東壁、通稱仁右衞門、東野は其號、下野の人、瀧田氏、幼にして父を喪ひ去りて東都に出で太宰春臺とともに中野撝謙の門に學ぶ後ち安藤氏に養はる因て其氏を冐す寶永中柳澤吉保に仕へ物徂徠に就いて學ぶ詩文雋抜兼ねて音律に通ず又書に巧みなり正德元年仕を辭して江戶駒込に隱栖す時に年二十九後ち本多忠統の賓師となる當年徂徠の學を傳播し徂徠の終に海內に木鐸たるは東野與りて最も力あり享年四年四月歿す年三十七

東舍〔書〕何人なるを知らず狩野派の畫家なり天明年中

東舟〔書〕林氏初め名は信澄、後ち永善と改む東舟は其號晩に樗墩と稱す羅山の弟京師の人なり慶長戊申始めて東武に來り柳營に筮仕す時に年二十八歳屢々顧問を承け既にして屋宅を受け甲寅乙卯難波の役に鹵簿の後に從ふ元和丙辰命を蒙りて台嶠僧正と倶に洛に入り家康の謚號を奏議し詔を得て東歸す眷遇日々に厚し會々府廳に官事及び神祇浮屠の事の牒訴ある每に其席に陪す故に世を擧げて其名を知る寬永丙寅の秋二條城に行幸して斂奏取捨あり即ち東舟預り聞く時に勅して宋朝類苑一部及び綿數十緬を賜ふ己巳父の憂に丁たり暇を告げて洛に赴き忌畢りて歸る臘晦刑部卿法印に叙せらる乙亥台命あり十九條の制法を郡國に示す其討論修飾與りて力あり丙子冬朝鮮來貢す其禮及び返簡兄羅山と共に或は之を考へ或は之を草す東舟幼より書を讀み詩を作り文を屬す藤原惺窩及び兄羅山に學んで術業益々進み名聲羅山と齊し且倭歌を弓治に問ひ以て祕蘊を窺ふ凡そ倭唐の群書涉獵せざるなく咨詢ある每に補ひなしと爲さず寬永十五年八月十五日病んで歿す年五十四

東濱〔書〕林氏、名は義卿、字は周父、東濱は其號周介と稱す長門の人少き時山縣周南に師事して州學明倫館に寓す年十三に至り擧げられて生員となる遂に同門の士和智棣鄉山根淸瀧長愷小倉實廉等と長州十才子の稱あり其名夙に關西に著はる就中棣卿長愷と之を山縣門の三傑と稱す年二十四故ありて其州里を去り浪華に來り講說して業となす又平安に移る從遊の士日に衆し京攝の間稍々物氏の學の行はるゝは東濱を以て嚆矢とす鄉里を去りてより意を仕進に絕ち王侯の聘問悉く辭謝す後ち江戶に來りて生徒に敎授す初め其浪華に在りし時備

後の人鍋島公明東溟に學んで篤く物氏の學を信ず嘗て物氏が人に與ふる國字の書を僞作し名けて徂徠國字牘と云ふ序を東溟に求む東溟其僞作たることを知らずして其請に應ず後ち其僞作の事世に發覺す故を以て東溟江戸に至ると雖とも蘐社の諸家卑んで共に交らず聲價漸く減ず即ち常に詩酒の間に豪放し敢て儒を以て居らず晩年に及びて紫碧仙叟と稱し老莊の學を好み優遊以て身を終ふ時に安永九年九月二十五日なり年七十三

東洲【畫】村上氏、名は成章、字は秀斐、平安の人初め蘆山に學び後ち稍々其格を變ず殊に山水人物に妙なり平安の人なり

東洲【書】佐野潤、字は君澤、文介と稱す江戸の書家なり文化十一年三月十日歿す

東旭【畫】村上氏、加賀の人、岸駒に學びて其の法を得たり

東山【畫】晴雲齋と號す大阪の人にして浮世繪を畫く

東山【畫】石垣氏、大阪の人、最も山水に花鳥を能くす文政年中

東山【書】岩淵德林、字は世輔、一字洞叉た茂仲、小字孝七郎、東山は其號、玩易齋、梅隱翁等の別號あり奧州の人、其先は武藏國岩淵に居る依て氏とす仙台侯に仕へ佐久間嵓洞と相謀り明倫堂を創剏す安政五年六月二日歿す年八十一

東潤【書】名は宗澤釋氏なり

東嶺【書】釋氏なり

東提【書】大橋氏、名は富之、字は子敎、平安の人、書體一家の風を成す當時書を以て世に鳴るもの凡そ七十餘家東提を以て第一となす嘗て朝鮮の使焉齋稱して韓山の一片石といふ常に門人に敎へて曰く草書を學ぶは古轍を踏むと雖も其成熟に及びては融神暢筆之を天地の自然に委して始て之を得んとす其自然を得んと欲せば先づ其心を正すべし心正しからずして無我の境地に至るは未だ之れあらずと

東河【書】渡邊氏、名は彭、字は文平、東河は其號澤田東江の門に入りて書法を學び又た琴を能くす佛石老人と號す文化十二年六月二十五日歿す年五十二

東郊【書】和智隷卿字は子樂通稱九郎右衛門東郊と號す狹侯の世臣なり儒家にして能書の聞へあり年六十三にして歿す

東川【書】佐久間茂之、字は思明、通稱甚八書を能くす寛政十二年十月歿す

東岳【書】原田氏、名は直、字は温夫、通稱喜左衛門、東岳は其號、中津侯の儒員なり初め經義を伊藤東涯に受け後ち古文辭を服部南郭に學ぶ傍ら書を能くす天明三年十二月歿す年五十五

東岳【書】平林氏、名は惇德、字は子孝、通稱庄五郎、東岳と號す又た越水の號あり靜齋の子なり父の業を受けて徒に授く文化三年十月七日歿す年六十四

東谷【書】平林氏、名は明雅字は德卿江戸の人、別に仁山と號す東嶽の子也

東澤【畫】東澤居士、佛像及び兒戲の圖を畫く常に己が畫けるものを懷にし之れを請ふものあれば乃ち悅んで與ふ歿年月詳ならず

東洋【畫】東氏、字は大洋、小字俊太郎又た傳藏と稱す初め玉峨と號し後に東洋また白鹿園と號す奧州栗原郡金成の人なり父方元畫を善くす東洋生れて器局あり平安に出で畫を狩野梅笑

に學ぶ梅笑その才を愛し養子となす後ち大雅應擧及び月溪諸老手に書法を問ひ已にして長崎に遊び方西園に學び歸て京師に住し故ありて狩野の嗣を辭して專心畫法を習練しつひによく一家をなす法眼に叙せらるゝに及んで仙臺の畫員となる其畫く所雄渾老蒼にして名聲一時に著はれ其字を書する又た健雅にして遒逸世の重んずる所となる二子東寅東萊及び門人村田俊平鈴木南嶺等各々その畫法を得たり天保十年十一月二十三日歿す年八十五

東洋【書】澤田哲、字は文明、通稱文治郎、東江の孫にして書を能くせり

東寅【畫】名は寅、字は木星、東寅また長月と號す通稱俊次、東洋の男なり父の敎を受けて能く其家法を守れり嘉永年間

東萊 東々寅の別號

東籬【畫】谷氏、名は定信伊勢の人、嘉永年中

東雄【畫】班目氏、通稱信介、仙臺の人、畫を東東洋に定ぶ天保年中

東野 大原民聲の別號

東海【畫】釋東海は常陸石神村の人、雪村風の墨畫を作る京和二年十月歿す年八十二

東居 島北嵩の別號

東塢【畫】吉田氏、岩代の人、文久年中

東岸【畫】佐藤氏、陸前の人東東寅に學ぶ文久年中

東圃【畫】村田氏、通稱瑣一郎、京都の人、四條派の畫を能くす嘉永年中

東園【畫】三宅氏、通稱賴母、近江の人、嘉永年中

東園齋【畫】本山氏、大岡春朴の門人にして大阪に住す安永年中

東軒 立原杏所の別號

東軒【畫】福見氏、出雲の人、書を以て世に聞こゆ文政年中

東成 與謝蕪村の別號

東蕙【畫】草野氏安政年中

東寧【畫】猪瀬氏、上總の人、畫を日根對山の門に學ぶ天保九年生

東墨客 石川晃山の別號

東毛墨客 石川晃山の別號

東求堂 足利義政東山閑居の室號

東山隱士 中村竹洞京都に在りし時此號を用ふ

東山殿 足利義政をいふ

東窓翁 英一舟の號別

東維軒 平林靜齋の別號

東海陳人 葛烏石の別號

東浦釣客 山中靜逸の別號

東里 高野蘭亭の別號

東里 立原翠軒の別號

東陽 關思亮の號

東都藥研堀隱士 磯田湖龍齋の別號

宗泉【畫】如雪の門人にして周文の法嗣なりといふ

宗淵【畫】字は如水水火子と號す雪舟の門に入りて學ぶこと數年其山水の如きは呎尺千里の趣ありて頗る妙手と稱せらる

宗珪【畫】宗堪の筆法を模倣し又た唐畫の描法を用ゆ

宗賢【畫】字は普賢、宗賢と號す眞珠菴十五世の住職なり狩野安信に學びて妙手に至る元祿年間の人

宗觀【畫】初め周文に學び後ち牧溪の風を

慕ふ山水花鳥に巧みなり

宗林【畫】小栗宗丹の門人なり

宗謂【畫】自笑又た弧陋と號す近江の人、大德寺百七十世の住職にして本然禪師の號を賜はる書畫を能くす寛文元年十一月二十一日寂す年七十四

宗得【畫】狩野元信に就いて學べり

宗用【畫】眞相の筆意を學び能く漁人を畫けり又た山水に巧なり

宗眠【畫】糟谷治兵衛、友常と稱す探幽、一蝶等の下畫を求めて毛彫と云ふことを始む近世の名家なり享保十八年歿す

宗白【畫】小鳥を巧みに畫けり且雜畫をも能くす

宗雪【畫】後ち相雪と改む光琳の風を慕ひ其の書く所太だ逸氣あり

宗珊【畫】普賢の像を畫きたるものの外其筆蹟を見ず

宗自【畫】能く花鳥及び小景を畫く

宗達【畫】俵屋氏、字は伊年、對青軒と號す法橋に叙せらる畫に巧みなり

宗理（一世）【畫】俵屋と號す初め住吉廣守に學び後ち光琳の畫風を能くし光琳と同じく青々の號を唱ふ明和安永年間の人なり

宗理（二世）【畫】初めの名は宗二、俵屋宗理の跡を繼ぎて二代目宗理と云ふ寛政十年の頃葛飾北齋の號を繼いで二世北齋と改む狂歌摺物の畫に巧みなり北齋も亦た宗理の名を繼ぎたれば此人は實は三世なり

宗理（三世）【畫】俵屋初めの名は宗二浮世畫師なり後ち俵屋を改めて菱川宗理といふ

宗珍【畫】狩野氏、元信の姪なり元信に學びて畫法を能くす山水花鳥殊に精妙なり

宗圈【畫】長谷川氏、六歌仙畫帖あり元和年中

宗心【畫】狩野種永、通稱初め甚十郎後ち内匠と改む宗心（一に宗進）は其の號、光信の弟子なり或は曰ふ松榮の門人なりと

宗秀【畫】狩野氏名は松信、通稱甚之助、宗秀は其號、永德の弟松榮の二男畫法を父に學び後法橋に叙せらる

宗庵【畫】土藏宗庵名は俊宗、通稱但馬、京都の人、狩野休伯に學ぶ正保年中

宗信【畫】狩野元信の長男初め四郎二郎と稱し後ち祐清と改め又祐雪と云ふ家法を學びて之を能くし足利義晴に仕へて近侍となり後ち法眼に叙せらる永祿五年七月二十日歿す年四十九狩野氏第三世

宗信【畫】狩野氏、松榮の門人なり天正年中

宗信【畫】桂氏、通稱源吾、大阪の人、畫法を月岡雪鼎に學び山水人物に長ず弘化年中

宗貫【畫】田村氏、京都の人なり安政年中

宗德【畫】中御門宗德卿は正三位參議左中將たり土佐派の大和繪を能くし往々專家と雖も及ばざるものあり文政十年五月二十日薨ず享年四十六

宗川【畫】山本氏、素川の男なり父に學びて書を善くす

宗三【畫】間宮氏狩野玉樂の門に入りて畫を學び自ら一格を出す佐々木氏の族にして奥州會津芦名盛氏の畫師也と云ふ

宗義【畫】巨勢氏第八代の人なり信茂の子、畫を以て其家を繼ぐ佛畫に巧みなり能登權守に任ぜらる寛治年間の人

宗深【畫】巨勢氏有宗の弟畫を能くす治承年中の人

宗久【畫】巨勢氏第十一世の人な

り有宗の子、畫を以て其家を繼ぐ修理介に任ぜらる正治年中の人なり

宗宅【畫】長谷川氏法橋に叙せらる

宗慶【畫】鳥飼氏、隣松齋と號す攝津鳥飼の人、書風御家流より出で遂に一家をなす世に之を鳥飼流と稱す

宗嘯【畫】鳥飼氏宗慶の後ちを繼ぎて家風を能くす

宗雪【畫】觀世宗雪は本阿彌光悦に學びて書に巧みなり

宗泉【畫】奈須氏、名は政信、狩野松榮の門人なり後ち梅榮に學び狩野氏を稱す法橋に叙せらる元龜年中

宗仙【畫】奈須氏、宗泉の子、名は定信、又た養清と改む宗仙は其號別に柳伯と號す畫を父及び狩野直信に學び後ち狩野氏を稱す法橋に叙せらる文錄年中

宗仙【畫】狩野氏、興次の二男なり通稱彌左衛門、直信に學びて一家を成す法橋に叙せらる元祿年中

宗仙 狩野種信の號

宗仙【畫】俵屋宗達の子、名は是信、又た二代目宗達と稱す法橋に叙す承應年中

宗亘【畫】古嶽宗亘は紫野大德寺七十八世の僧なり別に生若と號す近江の人、畫を能くす天正十七年六月二十四日寂す年八十四

宗丹【畫】小栗助重通稱小三郎定利持氏の世、仇一色詮秀誅せられてより落髪して僧となり宗丹と號し又た自牧と號し好みて畫を作り周文を師として學び又た牧溪、玉澗、夏珪、馬遠の畫風を慕ひて研究し卒に其奧旨を得山水人物花鳥皆精妙を極む狩野元信初め畫法を宗丹に學ぶ宗丹元信をして周文の門に入らしむ故に狩野の技は是より起れりと云ふ初め京師相國寺に居り晩年大德寺に住す寛政五年正月九日歿す

宗栗【畫】小栗氏、宗丹の男、父に畫法を學びて周文の畫風を得妙手と稱せらる初め若狹小濱に住居し後ち京師の大德寺に寓す文明年中の人なり

宗休【畫】小栗氏、宗栗の男なり父に學びて能くせり

宗程【畫】萬江又た好遁子と號す大德寺の住僧なり春屋宗園の法嗣にして碩德の聞えあり書畫を能くす寛永年中寂す

宗璠【畫】玉寶氏、玉寶伯の法嗣大德寺百八十五世の住僧なり春睡と號す山城の人なり畫を能くす寛文八年十一月十八日寂す年六十九

宗歲【畫】雪舟の門人にして淡彩の山水を能くせり

宗丈【畫】曾我氏、蛇足の子なり父に學びて畫を能くし彩色の花鳥に巧みなり

宗譽【畫】曾我氏、紹仙の子、父に學びて人物花鳥に巧なり

宗也【畫】長谷川氏、通稱左近等伯の長子なり或は云ふ庶子と雲谷派の畫を描く

宗巴【畫】狩野氏、通稱源七郎宗也は其名宗秀の弟なり其畫風家法を得たり法眼に叙せらる天正年中

宗和【畫】狩野宗巴の子なり名は重信父醫を業とせるを以て宗巴も亦た之を繼ぎ家法の畫を學ぶ慶長年中

宗弘【畫】藤原氏、大嘗會主基屏風の繪を作れる人應保年中

宗俊【畫】狩野直信の門に學び狩野氏を稱す文錄年間征韓の役に鍋島直茂に從ひて軍中に在り多く戰圖を作るといふ

宗順【畫】狩野元俊の三男なり慶安年中

宗順【畫】河村氏、

岡本豐彥に學ぶ天保年中 **宗能**【書】鈴木氏、信重の子書を父に學ぶ寛永年中 **宗悅**【書】小瀬氏、通稱彌助、狩野休伯に學ぶ正傳年中 **宗悅**【畫】喜多川氏、尾形光琳の門人なり宗一に相に作る書を以て法橋に叙せらる光琳が伊年の印を傳用す享保年中 **宗一** 長谷川雪堤の名 **宗秀** 長谷川雪旦の名 **宗房** 松尾芭蕉の名 **宗澤** 英一川の名 **宗清**【書】禪師は名を以天、機雪と號す山城の人なり東海宗朝の法嗣にして大德寺八十三世の住僧なり好みて書を作り祖師像及び寒山拾得圖を書く相州小田原早雲寺の開祖なり天文二十三年正月寂す年八十三 **宗清**【書】長谷川氏正保傳中 **宗庭**【書】天海僧正の傳者となりて江戶に來る曾て德川家康の命に依り其肖像を書く慶長年中 **宗甫** 小堀政一の號 **宗甫**【書】小栗氏、宗丹の弟なり書を兄に學ぶ長祿年中 **宗眞**【書】兒島氏、本阿彌光悅の門人寛永年中 **宗謙**【書】尾形氏、光琳の父なり通稱は主馬、名は宗甫字は子柏、宗讓別に洗齋と號す東福薩院の吳服織にして傍ら書を好み兒島宗眞に學ぶ貞享四年歿す年六十七 **宗仁** 土佐光則薙髮後の號 **宗立** 釋江雪の名 **宗中** 釋等歲の名 **宗恕** 伊藤坦庵の名 **宗成** 島山崧岳の名

抱一【書畫】酒井氏、名は忠因、幼名は榮八、酒井雅樂頭宗雅の弟なり資性多病なるを以て出家して西本願寺文如上人の養子となり文詮暉眞と名づけ等覺院權大僧部に任ぜらる又た寺務を捨て隱居して東都に歸り根岸の里鶯村に住し室を雨華庵と稱し鶯村と號す及た輕擧道人、庭柏子と號し屠牛を以て其通稱とす若年の比書を好み初め兄宗雅に學び後ち狩野永德の門に入り壯年にして京都に上り土佐守光貞の弟子となり狩野の書風を捨てゝ土佐の筆意を學ぶ又た圓山應瑞の門に入りて寫生を研究す江戶に還りてよりは南岳を師として猶ほ專ら圓山風を學び後ち尾形光琳の書風を喜び一變して之を書くに至れり當時谷文晁書名一世に鳴る抱一夙に交を結びて書法を問ふ書も亦た其能くする所にして董堂敬義に學び後ち寶井其角の風を慕ひて屢々樓上に書筵を開く故に娼妓中に其學書及び發句を學ぶもの多し曾て光琳百圖及び尾形流印譜を著して世の爲めに珍重せらる一時文晁と名を齊うす文政十一年十一月歿す六十九 **抱眞**【書】石垣氏、通稱は文右衞門、初め江戶駒込片町に住し後ち大塚の里に隱遁し抱一上人の門に入りて書法を學び抱眞と號す上人嘗て抱眞に語つて曰く汝良工たらんと欲せば宜しく諸名家の書を縮寫し以て其筆意を知得すべしと抱眞因て一圖を得る每に之を模寫し遂に數百帖に至るまた書法を屋代弘賢に受け其技に長ず安政三年九月二十二日歿す年六十六 **抱儀**【書畫】守村約、經

解と號す又た松篁、交翠山房、鷗嶼、眞實菴の號あり通稱治郎兵衛、書畫及び詩俳諧を能くす文久二年正月十四日歿す年五十八辭世の句に曰く
『山の井や苔の下より春は立つ』

拙堂【書】號、齋藤氏、名は正謙、字は有終、拙堂は其翁と稱す寛政九年江戸柳原の津藩邸に生る幼にして穎悟長じて昌平黌に入り業を古賀精里に受く藩主藤堂侯の學校を創建するや其學職に擢任す安政年間幕府召して儒官と爲さんとす辭して拜せず慶應元年七月十五日歿す年六十九

拙宗 等楊の號、但し雪舟に非ず

拙窩 甲賀玩鷗の別號

拙榮 賴春水の別號

佩川【畫】草場氏、名は華、字は棣芳、佩川は其號又た玉女山人、濯纓堂主人の號あり嵯助と稱す肥前多久の人儒學を以て本藩佐賀に擢用せらる又た畫を善くす初め沈南蘋の畫風を長崎熊代態斐の門人江繡浦に學びて人物花辨卉毛を善くす中年前より南宗に變じ最も墨竹に名あり時に亦山水を作る晩年幕府に徵さる病と稱して出でず因て銀及び褒詞を賜はる慶應三年歿す年八十一

佩弦齋【書】青山延光、水戸の儒者なり字は伯卿、佩弦齋、晩翠、春夢居士等の號あり通稱量太郎、延于の長子、天性强記尤も詩文に長ず力を史學に盡し其志父の業を繼ぐに在り彰考館の編修總裁弘道館教授たり明治二年朝廷徵して大學中博士に任じ從六位に叙す三年九月歿す年六十四

泥舟【書】高橋政晃、字は寛猛、幼名謙三郎、通稱精一、幕府瓦解の際勝安房等と倶に盡力する所多し明治中興後復た仕へず翰墨を事とす勝海舟山岡鐵舟と並び稱して世に三舟と云ふ

忠季【畫】藤原氏、頭中將たりし時法性寺の執行能圓の女容色艶美なり忠季之を戀ふと雖も從はず一日夜に入り雪降ること尺餘忠季偶公事を以て闕に至り自から雪中の景を畫き六位をして能因の女の許に送らしむ女取りて之を觀る是に至りて互に相通じ終に少將親平を生むと

忠雄【書】大高氏、通稱源吾、凌霜亭子葉と號す赤穗四十七士の一人なり其角に從ひて俳諧を善くし又た書に巧みなり元祿十六年二月四日自裁して死す年三十二

忠七【畫】繪菱忠七は京都の人、雛形母子草雛形瀧の糸伊達紋花結等の繪本を畫く

忠平【畫】藤原氏、基經の子和歌の達人を以て稱せらる官太政大臣に至る書を善くし杜鵑を畫くに妙なり天曆三年歿す年七十

忠長【書畫】花山院忠長は左大臣定熈の男、從四位上右少將たり書を能くす

忠友【書】穗井田氏、通稱標助、又た鞍負と稱し蓼莪と號す三河の人、平田胤實の門に入りて學び後ち香川景樹に從ふ和歌を能くし書も亦佳なり弘化四年九月十九日歿す年五十六

忠兵衛【畫】北村氏、寛永年間の人にして畫を能くす

忠【畫】淺井氏、名は忠、幼名は忠之丞、後ち忠に改む江戸木挽町に生る明治八年國澤新九郎の家塾彰義堂に入りて洋語を學び翌年講武所美術學校に入學外人に就きて研鑽怠らず其技大に進む三十一年東京美術學校敎授に任ぜられ三十二年洋畫研究の目的にて二ヶ年間佛國留學を命ぜられ三十四年更に歐州各國を遊歷し同年八月歸朝直ちに京都高等工藝學校敎授に任ぜらる第五回內國勸業博覽會審査官及聖路易萬國大博覽會審査官たりしことあり又關西美術院長となりて徒に授く明治四十年十二月十六日歿す年五十二

忠馬【畫】海北氏、友泉の男、畫法を父に受く寶曆年間の人

忠監【畫】園田氏、尾張の人なり森高雅に學ぶ明治年中

忠因 酒井抱一の初名

忠俊 住吉廣通の初名

忠篤【畫】本多越中守忠如の男、幕府の老中となり從四位下待從に任ず沈南蘋の畫風を好みて筆力秀雋なり明和年中

忠淵 狩野守政の初名

芥舟【畫】木村氏、名は毅、字は天模、楷堂と號す江戸の人、家世德川幕府の旗下なり海軍所頭取、勘定奉行勝手方等の諸役を務む王政一新の後ち屢々召さるれども辭して應ぜず餘生を風月に托し專ら詩文を事として悠々自適す明治三十四年十二月九日歿す年七十二

雨谷【畫】川村氏、名は應心、字は廣卿、字は守國雨谷は其號、江戸の人別に陸蓮子の號あり幼時新潟に行き杉浦南陽に就き漢籍を學び又た武術を觀老館に練る慶應の初め長崎奉行支配定役を命ぜられ在勤中木下逸雲、僧鐵翁等に就き畫を學ぶ後ち大審院判事となる晚に官を辭して風月を樂しむ畫を求むるもの門に絕えず門人多し明治三十九年十二月二十九日歿す年六十九

雨蕉齋 柳川重信の別號

雨香仙史 藤井竹外の別號

靑涯【畫】櫻間氏、名は咸、三河の人、本多中務大輔に仕ふ貧尤も甚し畫を渡邊華山に學びて能手の稱あり其性物に拘泥せず眞率無我最も椿山と友善し椿山一日靑涯を訪て其戸を敲くに戸內に今日不在と呼ぶ其聲正に靑涯なり椿山怪しみ潛に其戸內を窺へば裸體を以て獨坐し傍らに一の衣類あるを見ず椿山意ふ此故なりと戸外を見れば一單衣洗濯して竿頭にあり椿山其衣に觸れて試るに已に乾けり乃ち其衣を取り少しく障子を穿て之を內に投じて曰く斯くても猶ほ不在なりや否やと又戸內を窺へば靑涯立たんとするに褌なし側の扇を取て臍下を覆ひ進て衣を取て之を着し呼んで曰く靑涯家にありと靑涯又た畫を作るに一の文房具なし僅に筆硯ありしのみ服部波山弱齡のとき櫻間の家に到て見るに醬油樽を兩邊に置て脚となし上に雨戸をのせ之に氈を敷き机に替て畫をかく室中疊席なく空米苞を敷き賓主共に之に坐し毫も愧る色なし以て遊ぶに晝夜を辨ぜず酒を呑むに限りなく時々出仕の時を違へ或は門限を過ぐるを以て毎時法のために幽屛せしめらる

然れども人其無我を愛して之を惡まざりしと云ふ嘉永四年二月十八日歿す

青於〔畫〕小倉氏、通稱吉五郎、武州兒玉郡本庄驛の人也世々農を業とす父を紅於と曰ふ翰墨を弄し風流自ら遣り文人墨客と交はる高久隆古嘗つて本庄驛に遊び其家に寓す青於幼より書を嗜み乃ち隆古に從ひ其技を學び尤も花鳥人物に長じ出藍の譽れあり隆古因て青於の號を命ず後ち東都に抵る青於人と爲り至孝而かも淡泊名利の念なし嘗て某貴顯と相識る某任を勸むるも肯んぜず服部波山田口柳所の二老と其居の相近きを以て朝夕來往す居常人の書を乞ふあるも其意に適せざれば絹素を戸棚に投じ肯て其の囑に應ぜざること數旬若し意に適すれば直ちに其需めに應ず明治七年三月十三日歿す年五十三

青邨〔畫〕廣瀨氏、名は範治、字は世叔、青邨は其別號、北豐下毛郡土田村の人本姓は矢野氏廣瀨淡窓に師事し都講となる淡窓遂に養ひて子と爲し家業を繼がしめ弟子益進む萬延文久の間內外多故青邨天下の形勢を察せんと欲し江戶に出づ侯西歸に及び府內侯延びて賓師となし學政を督せしむ是時淡窓已に歿し弟旭莊大阪に在り其子林外宜園に留守し青邨と鼎立唱和す世稱して三廣と云ふ明治元年徵されて京に入り漢學所に直す八年岩手縣七等出仕兼七等判事に補し修史局三等修撰に遷り局廢せらるゝに及びて居を牛込にトし塾を開き徒を聚め東宜園と稱す既にして華族學校の敎師に聘せられ宮內文學に準ず又た山梨縣學徽典館に司敎たること歲餘明治十七年十二月三日病を以て歿す享年六十六

青琴〔畫〕女史は馬杉氏、名は貞、雲外の末女熊谷眞彥に就いて畫を學び四條派吳春を受けて名聲あり自ら婦人繪畫研究會を起して子弟に敎ふ明治四十三年二月二十三日歿す年三十六

青霞〔畫〕田邊氏、名は文琦、豐後の人、南宋畫家なり天保年中

青崕〔畫〕山中氏文久年中

青江〔畫〕女史は橋本芳谷の妻なり大阪の人南宋畫を能くす安政年中

青城〔畫〕熊谷氏、通稱敬三、遠州の人、畫を福田半香に學ぶ明治年中

青陽齋 淺山蘆洲の別號

青々齋 尾形光琳の別號

青白齋 狩野常信の別號

青白齋 狩野友川の別號

青坡齋 狩野閑川の別號

青松江 釋紹等の別號

青池堂 馬場春水の別號

青蘿館 澤田東江の別號

青海堂 馬場董水の別號

枕山〔畫〕大沼氏、名は厚、字は子壽、幼名は捨吉江戶の人、其父を竹溪と云ふ尾張の儒臣となる枕山幼時家貧にして囊中空如一錢を蓄ふるなしと雖も花に吟じ月に嘯き天地に睥睨して慷慨自から勝ふる能はざるが如きあり落托日に甚し去つて菊地五山の門を訪ふ家人枕山の言語朴訥にして弊衣破履なるを認め謂へらく丐兒の徒ならんと遂に之に應ぜず枕山一喝して曰く縱令身に襤褸を纏ふも胸中豈に錦繡無からんや

と家人異みで之を五山に告ぐ五山笑うて曰く是奇人ならんと延て座を與ふ枕山懷にせる稿を出して五山に示す五山取て之を閲するに才識縱横格律深嚴井々として秩序あり少年輩の作にあらず其或ひは他人の口吻を籍るものに非ざるかを疑ひ試みて床頭挿む所の一卉を詠せしむ枕山聲に應じて忽ち一律を賦す宛然金石の音あり翁驚いて上客となし列を諸生の上に置く已にして名聲大に著はる梁川星巖、鹽田隨齋、大窪詩佛、小野湖山と相交はる後ち下谷吟社を設け一時の俊髦其門に入る植村蘆洲、溝口桂巖、杉浦梅潭、中根半嶺諸老皆從つて學べり明治二十四年十月一日下谷の花園町の居に歿す年七十四

枕石【畫】眞道直三、萬延元年十一月生る長尾無墨の門に入りて畫を學ぶ南宋派の畫家にして山水を善くす明治十五年歿す

芳園【畫】西山方園畫法を松村景文に學び人物花卉鳥獸を善くす四條風の畫家、大阪の人なり當時近畿に稱揚せらる慶應三年十一月八日歿す年六十四

芳洲【書】雨森俊良、又た誠清、字は伯陽東五郎と稱す、芳洲は其號又た絅尙堂と號す對馬侯の文學なり平安の人江戸に出で木下順菴の門に入りて學ぶ才藻卓絕順菴稱して後進の領袖となす遂に其推薦に依りて對馬侯に仕ふ芳洲外國の語に通じ毎に韓人と話說するに譯官を用ゐず韓人嘗つて戲れて曰く君能く諸邦の言語に通ず而して殊に日本に熟すと年八十一にして始めて和歌に志し古今集を誦すること一千回又た自から賦すること一萬餘首人其精力に服す寶曆五年正月六日歿す年八十八

芳豐【畫】芳豐、字は北粹、通稱兵三、上原氏大坂の浮世繪師なり俳優似顏錦繪及び劇場の看板を畫きて其名殊に高し和歌を善くし又茶番狂言をなす天保嘉永年間の人

芳中【畫】中村氏、光琳の風を慕ひて其趣を得たり平安の人、浪華に住す又た俳諧を能くす

芳洲【畫】山田熙常、字は士常、咬花また索隱子と號す先哲の畫法を修めて能くす後法橋に叙せらる文化年中の人

芳延【畫】松本氏、通稱彌三郎、一桂齋と號す亦遊狸菴都々美と稱して狂歌を善くす天保九年十一月生る幼時幕府の士松本某の養子となり其家を繼ぐ性放逸不羈にして士風の窮屈なるを患ひ壯年の頃畫家國芳の門に入り浮世繪を學び芳延と云ふ狸を畫くに妙を得たり故に世人呼んで狸の芳延と稱せり嘗つて產を破り赤坂なる義兄吉田屋宇三郎の許に寄食す二世繪馬屋の門に入りて狂歌を學びて妙を得たりしかば畫家を廢し名古屋に移りて幽居す然れども其生計に苦しむを以て陶器畫を畫き多少の餘財を獲しかば之を懷にして東京に歸り淺草田浦に料理店を開く通稱を狸汁と云ふ幾ばくもなくして又た橫濱に移り住む明治二十三年八月十四日歿す年五十三

芳年【畫】月岡氏、大蘇、又た一魁齋と號す東京の人、本と吉岡氏、父を金二郎といふ月岡雪齋の養子となり其氏を冐す初め一勇齋國芳の門人となり專ら丹青の技を勉め自から洋風を折衷して別に一家を成す門に入りて學ぶもの多し明治二十五年六月九日歿す年五十四

芳幾

〔畫〕落合氏、歌川風の畫家なり朝霞樓また一蕙齋と號す多くは人物を畫けり

芳崖〔畫〕狩野氏、董信の子、畫を父に受く明治廿一年歿す年五十一

芳信〔畫〕歌川國種の門人、文久年中

芳春〔畫〕歌川國種の門人、文久年中

芳宣園 橘千蔭の別號

芳月堂 奥村政信の別號

芳齋〔畫〕富取氏、通稱良輔越後の人、安政年中

芳勝〔畫〕石渡氏、通稱は庄助、畫を歌川國芳に學びて能くす文久年中

芳溪〔畫〕山內氏、歌川國種門人、慶應元年歿す年六十八

芳溪〔畫〕右田氏、甲斐の人、通稱は五兵衛、歌川國種に學ぶ萬延年中

芳藤、**芳梅**、**芳鳥**、**芳芳**、**芳鷹**、**芳鶴**、**芳滿**、**芳芳**、**芳英**、**芳雪**、**芳榮**、**芳里**、**芳秀**、**芳員**、**芳兼**、**芳富**、**芳綱**、**芳影**、**芳丸**、**芳基**、**芳直**、**芳芳**、**芳貞**、**芳爲**、**芳雨**、**芳晴**、**芳照**、**芳艷**、**芳廣**、**芳盛**、**芳近** 等皆歌川國芳の門人にして歌川を稱し萬延文久年間の畫家なり

芳宜園 加藤千蔭の號

直信〔畫〕狩野直信（又幹信ともいふ）通稱源七郎又た大炊助、薙髮して松榮（一に正榮）と號す元信の三男（或は次男ともいふ）足利義輝に仕へて近侍たり民部卿（或は云ふ民部少輔）法眼に叙せらる書法を父に受けて其蘊奥を極む山水花鳥等みな巧にして奇骨風韻あり當時名畫と稱す文祿元年正月二十一日歿す年七十四木挽町狩野開祖

直賢〔畫〕白井氏、名は直賢、字は子齋仲八郎と號す京師の人、圓山應擧に學び鼠を畫くに妙なり又た雜畫を能くす

直菴〔畫〕曾我氏、紹祥の子なり家法を學びて山水人物花鳥を能くす殊に鷹を畫くに巧みなり筆力生動世の稱贊する所となる

直朝〔畫〕源直朝、月擧と號す雪舟を學び又た玉澗を慕ふ文祿年中の人

直行〔畫〕桂直行、歸一堂と號す書體一家をなす殊に楷書に巧みなり天保五年十月二十五日歿す年六十四

直入〔畫〕田能村氏豐後の人、幼名は松太後ち山疑と改む小虎散人と號し直入山樵笠翁青椀飲茶庵主人等の號あり甫めて九歳田能村竹田に學ぶ後ち學を篠崎小竹、大鹽後素に受く明治の初め京都に卜居し畫學校を創設し推されて攝理兼敎頭となる博覽會及び共進會等の審査委員となり賞牌を受けたること枚擧に遑あらず明治四十年一月二十一日歿年九十四

直彥〔畫〕熊谷氏、通稱直彥、通じて號とす廣島藩士、文政十一年十一月生る岡本茂翁に就いて

四條派の畫法を學ぶ能手と稱せらる

直治【畫】原田氏、通稱治兵衞、肥前の人、畫を狩野直信に學びて能手の稱あり後ち毛利輝元に仕ふといふ永祿年中

直康【畫】仲安氏、能く人物佛像を畫く意是道人と號す文正年中

直芳【畫】住吉廣守の門に學ぶ安永年中

直清【畫】室鳩巢の名

直好　山崎如流の名

和道【書】鈴木氏、常陸龍崎の人、富五郎と稱す後ち江戸に出で書を以て業とす文化八年五月七日歿す

和泉【畫】狩野氏、其系統等詳ならず享祿二年二月尾張熱田神社を修する繪卷物を押畫す同畫は僧賢信なり社家今尙ほ藏すといふ

和亭【畫】瀧氏、名は謙、字は子直、和亭又た蘭田と號す其畫室を骿香館と云ふ東京の人天保三年正月江戸千駄ヶ谷に生る幼より畫を好み初め大岡雲峰の門に入り雲峰歿して後ち長崎に遊び沙野鐵翁に就き又た淸人陳逸舟華昆田等と相交はり六法の要を問ふ居ること凡そ二年長崎を去つて京都に赴き又た南海諸州を歷遊し安政元年江戸に歸り幕府に仕ふること歲餘故有て仕を致し後ち北越に遊び丘壑の秀麗を探り山河の勝槩を討ね東馳西走すること十餘年時に明治維新の後ちにして喪亂已に平らぎ新運漸く開くの時勢に際し多年學ぶ所のもの世に知らるゝを得るに至れり明治六年澳國博覽會に方り政府の命を奉じて着色の巨輻を作り之を出品して重賞を受け又た內國勸業博覽會等開設每に其作畫を出品し屢々賞牌を受く同三十四年九月二十六日病んで歿す時に年六十九築地本願寺中久寶寺に葬る

和元【書】羽川氏、珍重の門人、天明年中

和應　英一蝶の別號

和年　柴田耕齋の名

和畫五筆　光長、慶恩、吉光、行光、行秀、以上の五人之を和畫の五筆と稱す

和樂齋　菅原白龍の別號

和亭　賴春水の別號

宜卿【書】友淵氏、字は白明、浪華の人、梁田蛻巖に學び經史に通し兼ねて臨池の技を能くせり

宜竹【書】名は景徐、字は周麟、詩を善くす相國寺に住す永正十五年三月二日寂す

宜軒【書】西岡逾明、詩書を能くす曾て函館控訴院長たり晚に相州小田原に隱栖し文墨を以て老を養ふ

花顛【畫】三熊氏、名は思孝、字は海棠、一に介堂に作る花顛は其號、主計と稱す長崎の月湖に學び畫風大に備はる最も櫻花を寫すを以て名あり傍ら俳諧を能くし京師の鳴瀧村に住す嘗つて伴蒿蹊と近世畸人傳を著はし大に世に行はる寬政六年八月二十六日歿す年六十五

花溪藏主【書】竹林七賢の圖を畫きたるものあり筆致高逸なり文明年間の人

花溪【書】名は樵溪、釋花溪仙、字は花氏なり

花蹊【書】【畫】跡見氏、名は瀧野、花蹊と號し又た木花、西成等の號あり跡見重敬の第二女也天保十一年四月攝津木津村に生る詩文を能くし書畫に巧みに屢々宮禁に召されて揮毫し又た自から

女學校を起して徒に授く

花隱【書】廣瀨氏、名は自勝、花隱は其號、別に睡足軒と號す初より書を好み初め狩野派を學び後ち三熊花顛の門に入りて專ら櫻花を畫けり

花藍 北尾重政の別號

花月堂 奥村政信の別號

花隱 北島雪山の別號

花竹幽窓主 田能村竹田の別號

松陽【書】岡松君賛、字は世襄、江戸の人、久留米の文學なり嘗つて安井息軒、鹽谷宕陰等と詩酒の交はりをなす詩及び文章を善くしまた書に巧みなり年七十餘にして歿す

松白【書】狩野氏、(松白一に松泊に作る)雪川と號す松榮の門人松榮の歿後休白に就いて學び法橋に敍せらる

松林【書】狩野氏、名は興信(一に惇信と作る)松林と號す、昌信の二男、是信の養子となる畫法を昌信に就いて學び能く其家法を得たり元文四年六月二十一日歿す

松岳【書】大内松岳、名は元澄、東菴また松岳と號す京師の人幼にして學を好み博聞強記にして雜家小說浮屠老莊の書に至るまで一として通曉せざるものなし常に和歌を詠じ唐詩を賦するを以て樂となし嘗つて仕進榮達を望まず醫を能くするを以て法橋に敍せらる尤も書法に精しく筆を下すに法あり峨山月譚は文字禪を以て一世に名あるものなり嘗つて詩に『滿紙龍蛇追晋妙。七言錦繡倣唐賢』の句あり其の人のために歸服せらるゝこと斯くの如し元祿十三年歿す年五十一

松苗【書】岩垣氏、名は松苗、初めの名は維光、字は長等、謙亭、又た東園と號す從五位上音博士大舍人助に敍任す龍溪の養子となり益々古學を唱ふ又た國史に通ず嘉永二年十二月歿す年七十六

松洞【書】松浦氏、名は知新、字は無窮、温子と號す長州萩の魚商の二子なり礀西涯に就き書法を學び後ち京師に入り小田海僊を師とす最も人物に長せり嘗つて僧月性の像を畫き吉田松陰これに序す常に憂國慨世の士と交はり國事に奔走し文久二年長藩久坂義助等と共に京師に入り時事を慨嘆して殆んど狂するが如し遂に粟田山に入りて自殺す松陰の捕に就き江戸に送られんとするや諸友門人松洞をして其肖像を寫さしむ今世に傳ふる松蔭の像は即ち之なり

松堂【書】村上茂篤、字は元厚、松堂と號す京師の人、畫を岸駒に學びて人物山水に長ず天保十二年九月二十日歿す年六十六

松蘿【書】黒川英、字は子雲、左膳と稱す松蘿は其號、又た別に芙蓉山人の號あり龜玉の男、江戸の人、畫風父に似て頗る沈南蘋の風あり

松葉【書】松葉上人は大和般若寺の僧なり性畫を好みて能くす不動尊の像を興福寺の壁に畫けり

松溪【書】宅間派の畫人なり遺跡の世に存するもの少し永亨年中の人

松林【書】林氏名は儼、字は稚膽、長崎の人、熊斐の門に學び畫を能くし最も着色に長ず花鳥に巧なり安永年間江戸に來り一時大に行はる其人となり恬淡放逸酒を嗜み小事に區々せず錢あれば妓館酒樓にあり錢盡くれば門を閉ぢ孜

孜筆を揮ふ寛政四年八月十二日歿す終身娶らず亦兄弟なし或は曰く松林は唐山賈人の子なりと

松好齋【書畫】半兵衛と稱す文化年間の人大阪に住す繪本を畫けり

松亭【書畫】鳥海恭、字は仲默、松亭は其號、出羽の人、江戸に住す寛齋の門に學び詩を善くし書畫に名あり文政二年四月十八日歿す年四十八

松軒齋【書畫】佛像を寫すに巧みにして又た書法に精し大阪天滿に住す

松谷【畫】吉川米、字は明啓、少穀と號す近江の人畫を能くす大阪に住す安政年中の人なり

松南【書】摩島氏、名は弘、字は子毅、助太郎と稱す京都の人、若槻幾齋に學び又た書を能くす天保十年五月十八日歿す年四十九

松翠【書】井出氏、臥溪と稱す加賀金澤の藩士也初め内田鐵舟に就いて書を學び頗る出藍の譽あり松雲公俸祿を賜ひ以て書記と爲す松翠之を辭して曰く野人は鐵舟の門人なり潤筆以て一身を養ふに足れり若し賜ふ所の餘俸あらば願はくは之を鐵舟に賜はらんことを請ふと公嘆じて曰く今や世風日に澆季に流る然るに汝の如きは唯書法を解するのみならず師に仕ふるの義を失はず能く其道を守りて過たざるものと謂ふべしと二百石を鐵舟に與へ、別に松翠に賜ふに二十口を以てす松翠後ち加賀を去りて京師に隱栖す公尚ほ十口を賜ふと云ふ書法の著書數種あり

松菊【書】木戸氏、本と和田氏、名は孝允、通稱小五郎、松菊と號す幼にして桂氏に養はれ桂小五郎と稱す後ち木戸準一郎と改む幕府の末造力を國事に盡くし明治中興の大業を翼贊す詩文を善くし又た書に巧みなり明治十年五月二十六日歿す享年四十四天皇侍從鍋島直彬をして正二位を賜ひ併せて金幣を賜ふ時に宣して曰く『公誠忠愛夙に心を皇室に傾け獻替規畫大に力を邦猷に展ぶ維新の洪圖を贊し中興の偉業を襄く功全く德豐に始めあり終りあり洵に是れ國の柱石實に朕の股肱たり玆に溘亡を聞く曷ぞ痛悼に堪へん』

松年【畫】鈴木氏、百僊と稱す京都の人畫法を文に受く

松花堂 瀧本猩々翁の號

松壑【畫】櫻井氏、名は成能、松壑は其號、越後高田の藩士なり盤城釜の子の人、畫及び篆刻を能くす敎部省及び宮内省に出仕す明治十九年二月七日歿す

松城 佐瀨得所の別號

松巖 土肥霞洲の別號

松竹堂 土肥默翁の別號

松菊主人 龍草廬の別號

金峨【書】井上氏、純卿、文平と稱す金峨は其號、又た別に考槃翁、柳塘閑人の號あり江戸に生る祖喜菴醫を以て信州笠間侯に仕へ祿二百石を食む父觀齋其祿を襲ふ金峨の時に至り祿を辭して去り業を改めて儒となる駒籠に僑居し帷を下して徒に授く業一時に振ふ初め金峨西條侯の文學川熊峯に就いて伊藤氏の學を修し又た井上蘭臺に從つて物氏の說を問ふ後ち其非を悟り盡く其學ぶ所を廢し別に機軸を出だして偏へに一家の言を主とせず訓詁は漢唐の註疏を取捨し義理は宋明の諸家を折衷す

其詞章に於ける亦護園の遺習を厭ひ務めて其陋弊を排擊す詩は中唐及び晩唐を取り文は韓柳歐蘇歸震川等を推す專ら清新流暢を主として拮屈聱牙の風を矯む所謂折衷學之なり是より以降其説を唱ふるもの相踵て起る江都の學之が爲めに一變す蘐園の學次第に衰へしは此人の排斥するに因るといふ兼ねて衆技を博綜す天文相法兵劒弓馬刀鎗鳥銃の類に至るまで該通せざるはなし東叡王府に奉仕して記室となり天明四年駕に從ひて日光山に登り留る數日疽背に發し駕に先ちて還る遂に其年の六月十六日を以て歿す年五十二門下原狂齊篠本竹堂岡四溟吉田篁墩下田芳澤菅東海龜田鵬齋尾崎稱齋等の名士を出せり

金岡【畫】巨勢家の開祖紀氏、中納言野足か子（一説に野足が孫有行が子なりと）舊と難波氏初采女正に任ぜられ清和陽成光孝宇多及び醍醐の五朝に任へて官大納言に至る自から丹青の妙に臻り畫を以て一家を成す嘗つて水墨の山を作るに其層十五遠近分つべし又た勅命を蒙りて弘仁以後鴻儒の風景を詠ぜしものゝ形を圖す又た皇居南の庇東西の障子に歷代の鴻儒を畫く即ち紫宸殿障子聖賢の像是なり小野道風其賛詞を書す元慶四年先聖先師九哲の像を畫く世人相傳ふ御府に藏むる所の金岡が畫鳥毎夜萩戸の邊に於て萩花を嚙ふ因て畫工に勅して筆を以て之を繫がしむるに果して止む又た仁和寺御室に在る所の金岡が畫馬毎夜近境の田甫に出でゝ稻苗を食ふ里人怒りて兩眼を穿つ之に依りて止むと其畫く所佛像多きに居る金岡晩年に薙髮して仁和寺に閑居す醍醐帝勅して聖賢の障子を畫かしむ時に金岡假りに髪を著け壯年の粧を爲し紫宸殿に登りて之を畫くと云ふ金岡の畫一家をなすと雖も其の傳は唐畫呉道子より出づ畫譜一編を撰ぶ世に傳はる金岡歿日詳かならずと雖ども蓋し延喜年中なるべし遺蹟著名の品は浄土曼荼羅鎌足公多武峯本尊漢人狩之圖殘缺藥師如來地藏尊毘沙門天阿彌陀三尊とす

金若【畫】巨勢金若は紀氏、初め出家して朝日阿闍梨圓深又た昔天子といふ後ち還俗して畫を作る承和四年清涼殿を畫く因りて大納言に任ぜらる此人或は金岡の祖父なるか

金高【畫】巨勢派の畫家なり金岡の裔佛像人物を畫くに妙也

金持【畫】巨勢派の畫家なり金高の子にして畫を善くす土佐派の祖藤原基光に畫法を傳へしは此人なりと

金谷【畫】横井氏、謝蕪村に從ひて畫を學び長ずるに及んで四方に周遊し畫名大に鳴る近江國大津の人寛政年中

金陵【畫】金子允圭、字は君璋、日南亭と號す谷文晁に從ひて花鳥に巧なり文化十四年二月九日歿す

金城【畫】鼎氏、名は鉉、字は子玉、愛采堂と號す文人畫を能くす大阪の人、嘉永年間

金峨【畫】古市氏、通稱哲藏、備前の人、畫を岡本豐彦に學ぶ天保年中

金親【畫】巨勢氏、京都の人、金岡の遠裔なり天保年中

金一【畫】江森氏、畫を松村景文に學ぶ文政年中

金起 巨勢小石の名

金玉仙【畫】北條氏政の畫師なり名は壽、字は宮南、相模の人なり狩野元信に學び人物花

鳥を能くす

金溪【畫】名は良敏、初め周文に學び後ち宋人牧溪の風を慕ひ人物花鳥に巧みなり貞治年中の人

金龍【畫】狩野元信に學び雜畫を能くす

金鷄【書】關口氏、名は興貞、字は行休、金鷄は其號、通稱嘉兵衛、上野の人江戸に大橋流の書を學ぶ是より先き大橋隆慶及び其父重政能書を以て聞え二世相繼ぎて幕府の書史となり聲價天下に傳播す世呼びて大橋流と云ふ金鷄故あり出でゝ篠田氏を冒す筆札の技を以て徒に授く後ち剃髮して沙彌行休と號す書名大に鳴る世呼びて篠田大橋流といふ寶曆十三年正月十九日歿す年七十九

金嶺【畫】西村氏、藍江の門人にして山水人物を能くす

金洞【書】金井氏、名は子恭、字は子誠、別に梧樓又た錦鷄の號あり上野佐立郡島村の人にして父は金井烏洲也元治慶應年間四方の志士と交はり勤王の大義を唱へ幕吏に捕へられて幽囚數年慶應戊辰東北征討軍に從ひ平定の後ち市政局訟方筆生より累進して内閣書記官、元老院議官、錦鷄間祗候、貴族院議員となる明治四十年五月十五日歿す年七十五

金僊【畫】久保田氏、名は滿昌、米僊の次男、明治八年京都に生る父の敎を受け又た幸野楳嶺に從つて學び名世に現る

金鳳【畫】望月氏、平野淨惠の二男、弘化三年三月大阪に生る後望月家を繼ぐ森二峯に圓山派の書を學び後ち西山完政に就いて四條派の書法を受く

受川【畫】狩野玄信甫信の二男なり木挽町狩野氏に養はる家を繼がずして享保十六年十月十日歿す時に年十七

易堂【書】寺西氏、名古屋の人、書法を柳澤吾一に問ひ學を藤森弘庵、林鶴梁、後藤松陰に受く書を能くす

易安 宮原節庵の別號

枝直【書】加藤氏、本と橘氏、初名は爲直、後ち枝直と改む通稱又兵衛、伊勢の人、江戸に出でゝ幕府の騎士となる國學に精しく門人甚だ多し天明五年八月十日歿す年九十四

玩鷗【書】甲賀氏、名は象、字は伯魏、小字は總左衛門、故ありて太田氏を稱す鶴汀又た拙窩と號す晩に闇上老隱と號す備中倉敷の人、業を同族九畹に受け京師に遊びて江村北海に從ふ文化元年十月歿す年七十六

拜山【書】【畫】吉嗣氏、名は達、筑前太宰府の人、詩書畫を能くす書は中西耕石の門に學ぶ明治中興に際し職を太政官に奉ず昇廳の途上暴風倒屋の災に遭うて右腕を折き爲めに職を辭して鄕里に歸る後ち左手を以て書畫を作る又た右腕の骨を以て骨筆を製し携へて支那に遊び文人隱士に接す爾來書畫一變し大に世に稱せらる骨筆奚囊集あり世に行はる

侗菴〔書〕古賀氏、名は煜、字は季曄、侗菴は其號、小太郎と稱す高祖忠豐曾祖和作祖忠能三世皆な佐賀に仕ふ父は樸即ち世に呼ぶ所の精里先生是なり侗菴幼にして戲を好まず深沈寡默群兒敬憚す寛政八年父幕辟に應じ家を携げて東遷す東菴之に從ひ篝燈夜課仕々旦に徹し白眉の稱駸々として起る父甞て潛に人に告げて曰く兒の業大に進む箕裘託あり吾以て瞑す可しと蓋し大に東に契る所あるなり文化六年擢じられて儒者となり米二百苞を賜はる父子駢番同じく學政を革す世以て希事となす十一年階を兩番に進め尋で御儒者に轉じ兩番の上に班す弘化四年病を以て終る年六十

承朝〔書画〕名は承朝、字は海門、初め相國寺に住し後南禪寺に居る書畫を善くせり嘉吉年中に寂す

承澄〔畫〕世に小川の僧正と稱す、忠快法印の弟子なり曾て馬を畫く其の筆法鳥羽僧正に似たり弘安年中の人

承貞 内藤元康の初名

承如法 式子内親王薙髪後の號

承弼 篠崎小竹の別號

泊々舍 清水濱臣の號

亞歐堂 田善の號

九畫

洞春〔畫〕狩野氏、名は美信、俗稱三四郎、元仙方信の子にして式部卿法眼に叙せらる幼にして父母を喪ふ父の門人石里洞秀の敎育を受け探幽の古法を守り雪舟の筆意に據り勤めて温柔華麗の弊を避く之を駿河台風といひ一大名手と稱せらる甞つて幕命を奉じ朝鮮國王に遣る所の屛風を畫き又東叡法王の命を奉じ賓殿及び便室の壁並に淺草觀音堂の仰板に畫く仰板合せて八枚一枚の大さ縱九尺橫一丈二尺之に天女奏樂の圖を畫く上野中堂の天女に比し遙に優れるを以て當時江戶第一の天人と云ふ畫成りて法王大に之を賞し賜ふに其の欲する所を以てせんとす美信固辭して言はず强ひて問はるゝに及び終に辭すること能はざりしかば試に前觀音を賜はらんことを請ふ前觀音は淺草觀世音の前に安置せる觀世音の一體なり世の人呼びて前觀音といふ法王直ちに命じてこれを美信に賜ふ美信雀躍百拜し因りて此の前觀音を駿河臺の私邸に遷坐せしむ此の時四方の信徒等來り集りて頗る盛大なる遷坐式を行ふ終に狩野家の前なる坂を呼んで觀音坂と云ふに至る前觀音後ちに河鍋曉齋の有となり轉じて鹿島清兵衛の手に入り今は淺草傳法院に安置せり）寛政九年二月二十一日歿す年五十一駿河臺狩野第四世

洞文〔畫〕土岐氏、周文の門人なり、土岐頼範の一族な

りといふ人物山水花鳥ともに師の風ありて筆力相伯仲せり **洞雪**【畫】雪舟に學びて名あり奥州三春の人 **洞雲**【畫】狩野益信、洞雲と號す、通稱は采女、後藤立乘光顯（一に益乘光次）の三男なり幼より畫を好みて探幽に學び後ち其養子となる時に年十一探幽之を鍾愛し秘訣を傳ふ後遂に名手となる慶安三年養母死して探幽後妻を迎へ探信、探雪の二子生る因て出でゝ別家す時に年三十五後隱元釋師來朝して洞雲の二字を贈る德川家光之を寵遇し法眼に叙し狩野三家に次ぐの命あり元祿七年正月八日歿す年七十駿河臺狩野の開祖 **洞春**【畫】狩野氏、初の名は益信、後義信、良信、政信と歷改し、遂に福信と稱す、洞春は其の號又守靜齋と號す洞雲の養子享保八年十二月十二日歿す駿河臺狩野の第二世 **洞白**【畫】狩野氏、名は愛信、洞白と號す、美信の男なり、法眼に叙せらる文政四年二月四日歿す年五十 駿河臺狩野第五世 **洞益**【畫】狩野氏、名は春信、洞益と號す、實は板屋桂意の子、洞白愛信の後を嗣ぐ畫法を養父に學びて能くせり天保十二年六月五日歿す駿河臺狩野氏第六世 **洞元**【畫】狩野邦信、洞元と號す、信政の二男、或は名は主信、榮之助と稱すと、永德に學びて畫法を能くせり **洞琳**【畫】狩野波信、洞琳は其號、洞玄の男、永德に學びて善くせり寶曆四年正月二十六日歿せり年四十九 **洞壽**【畫】狩野堯信、洞壽（一に洞樹）は其の號、洞琳の男なり永德に學びて畫を能くせり **洞益**【畫】飯田氏、永叔主信に就いて畫を學び能く其の體を得たり **洞昌**【畫】渡邊氏、秋田の人、畫を狩野洞春に學ぶ文政年中 **洞仙**【畫】津村氏、名は重信、秋田の人、洞昌の門に學ぶ天保年中 **洞簫**【畫】狩野氏、名は益尙、小平次と稱す土佐山内家の畫師なり幼にして村上十兵に學び後ち江戶に上り狩野洞雲の門に入り研精二十年終に名手となる元祿六年歿す **洞和**【畫】前村氏、土佐の人、狩野派の畫家なり嘉永年中 **洞山**【畫】岡野氏、石見の人、狩野派の畫家なり嘉永年中 **洞意** 廣瀨柳榮の別號 **洞郁** 河鍋曉齋の名 **洞仙** 三浦梅園の別號

若冲【畫】伊藤氏、初の名は春敎、後ち汝鈞、字は景和、若冲は其の號、又斗米菴と號す、青物問屋の主なり幼より畫を好み初め狩野家に學び後ち元明の古蹟を摸修し又光琳の筆意を混じて一流の畫風を出せり人物山水草花鳥獸等を能くす殊に鷄畫に巧みなり家に鷄數頭を養ひ數日其の形狀を熟視し後ち揮毫す故に筆意其の眞に入る恰かも靜動鳴啄を爲すが如し然れども形似を事とせず專ら寫意を主とせり世人大に感賞して其の名一時に傳播す後ち京師の深草石峯寺の側に閑居して黃檗派の伯珣和尙に附屬す偶々鷄の畫を請ひ求むる人は必ず米一斗を以て謝禮とす故に斗米菴の號あり寬政十二年九月十日歿す年八十五 **若**

水【書】稲生氏、名は義、字は宣義、一字は彰信、若水と號す、江戸の人、儒醫を以て加賀侯に仕ふ嘗て庶物類纂一千巻を撰し二部を謄寫し一は幕府に一は加賀侯に献ず當時の大家新井白石稱して曰く年未だ五十に滿たずして千巻の書を著すもの古來希に觀る所なりと後世本草を道ふもの率ね若水及び阿部將翁を祖とす其書亦太だ巧なり正徳五年七月五日歿す年六十一

若水【書】伊尾喜氏、伊豫の人、安政年中

若融【書】長崎の人墨竹を能くす

星巖【書】梁川氏、名は孟緯、字は公圖、一字は無象、初め名は卯、字は伯兎、通稱新十郎、星巖は其號なり、また百峯、天谷、老龍菴等の別號あり美濃國安八郡曾根村の人、詩に長じ江戸に在りて玉池吟社を創む門人甚だ多し晩年京都に住し諸藩志士と尊攘の大義を唱ふ安政五年九月二日逝く年七十

星池【書】秦其馨字は子馨、通稱源藏、星池と稱す、菊如齋の別號あり江戸の人初め平陵に學びて孫過庭を摹す壯年長崎に遊び來朝の清人胡兆新に親炙して運筆の法を受け業大に進む最も楷行に長ぜり文政六年三月八日歿す年六十一著す所は崎館書論、星池玉屑、運筆眞證、封照書札、雲淡帖、清風帖、坐石帖、朶雲帖等あり

星嶽【書】上野の人、書を能くす後ち吉原の幇間となる享保年中

星洲【書】淺井氏、柴田義董の門人、文政年中

星聚館圓山應震の別號

星海【書】鈴木氏、京都の人、文政年中

冠山【書】岡島氏、名は璞、字は援之、後ち玉成と更む長崎の人始め譯士を以て萩侯に仕ふ後ち辭して京攝の間に游び又た江戸に居る唐音に精しく又た稗史に通ず傍ら書を能くす享保十三年正月平安に歿す年五十五

冠岳【書】沖氏、土佐の人也江戸に住す書を以て世に稱せらる明治九年歿す

昭通【書】額田氏、通稱は彥三郎、常陸の國額田城主小野崎下野守篤道の子なり其の先は藤原秀鄉に出づ昭通父に繼いで城主となり天正の末年佐竹氏と兵を構ふるや大に敗れ走りて上杉氏に投ず是に於て氏を額田と改む昭通丹青を好み最も鶉を畫くに妙を得たり國人今に至りて稱して額田の鳴鶉と云ふ元和の末年本國に歸り寛永七年歿す

昭信狩野舜川の名

昭信狩野勝玉の名

昭乘惺々翁の名

珍重【書】羽川珍重、本姓は眞中、通稱太田辨五郎書を鳥居清眞に學び吉原細見記等の繪を畫けり沖信又た三洞と號す寶曆四年七月二十二日歿す

珍海【書】禪那院に住し醍醐寺の住職なり三寶院の定海を師とし又土佐基光に就いて學ぶ

重長【畫】西村氏、通稱孫三郎、仙花堂と號す、初代清信の門に居りて鳥居派の畫を學び俳優の似顔繪及浮世繪を能くせり寶曆六年六月二十七日歿す年六十餘

重雅【畫】大橋長平と稱す岩城平侯に仕へ書を以て聞ゆ文化十年八月歿す年五十四

重政【畫】北尾重政、通稱左助、紅翠は其號、又た台嶺、一陽齋、花藍齋の號あり江戶の人鳥居風の畫を作り最も板下に妙也文政二年二月十一日歿す年八十一

重保【書】大橋氏、通稱長左衞門、龍溪と稱す、甲斐の人書體自ら一家をなす正保二年二月四日歿す年六十四

重政【書】大橋氏、重保の子なり、通稱長左衞門、父に書法を受け一家をなす世に大橋流と稱す幕府の書史たり寬文十二年六月三十日歿す年五十五

重名【書】渡邊氏、豐前中津八幡宮の神職たり從五位に叙し下野介に任ぜらる本居宣長に從ひて國學を修め和歌を善くす天保元年十二月二十三日歿す年七十二

重艮 狩野一溪の名

重賴 狩野榮翁の名

重賴【書】松江氏、名は重賴、維舟と號す松永貞德の門人にして俳諧を能くし又た畫に巧み也延寶八年六月歿す年七十四

重信 狩野永德の名

重信【畫】柳川氏、雨蕉齋と號す志賀理齋の子、葛飾北齋の女婿となる天保三年歿す

重信【畫】狩野氏、友益の子、春悅と號す父に先ちて早く歿す

重信【畫】狩野氏、眞笑の三男、式部と稱す弱年にして歿す

重信 津村洞仙の名

重鄉 狩野一翁の名

重賢 曾我紹仙の名

重賢【畫】石井氏、名は重賢、鼎湖と號す鈴木我古の子なり明治某年歿す

重之 石川丈山の號

重則【畫】池永氏、名は重則、通稱三五郎、重賴の子なり畫を父に學ぶ寬政年中

重則【畫】勝田氏、名は重則、字は士貞、通稱沖之丞、竹翁、養溪等の號あり安藝の人、狩野休伯に學び人物花鳥に長ず又た好みて墨畫を作り雪舟雪村の風致あり畫を以て幕府に仕ふ萬治年中

重九齋 菊川英山の別號

重宣 鳥北嵩の號

重丸 歌川國直の門人、文久年中

重成【畫】大原氏重尹の養子洋々館と號す畫法を松村景文に學ぶ文政年中

風外【畫】名は慧薰、曹洞宗の僧なり幼にして穎悟長ずるに及びて薙髮して佛道に歸す資性畫を好み嘗て達磨の像を畫く筆力清逸松華堂と伯仲す寒暖移轉して一定の住所なく衣服襤褸塵垢面に滿つ知らざるものは以て乞食の僧となす箱根山中に土窟を穿ち此に居る小田原城主稻葉侯之を召す應ぜず侯益々之を景慕して止まず一日土窟を訪ふ闃乎として人の在るなし唯麻衣一領及び敗鍋一枚あるのみ後ち豆州山中眞鶴に穴居し土人に命じて穴を埋めしめ以て入定す寬永年中の人なり

風蘿坊 松尾芭蕉の別號

風竹軒 伊藤素安の號

律女【書】大橋氏、栗原一素の妻なり舊洛西島原の名妓書畫を巧にし和歌を詠ず後別離を請ひ尼となりて白隱和尙に從ひ禪を學ぶ歿年月詳ならず

胡保【書】岡本氏、保考の子、書を花山院愛德より傳受す正四位下に叙し甲斐守に任ぜらる書博士たり天保七年七月七日歿す年六十三

洲尾【畫】岩田氏、北汀の門に學び山水に巧みなり安政年間の人

威子【書】威子中宮は後一條天皇中宮藤原道長の第三女にして藤壺と號す嘗て多寶塔を造之が供養をなさんと欲し經卷を製して之に書く万壽二年三月薨ず

威仲 柴田義董の字

恒菴【書】天沼齋、字は樂善、恒菴は其の號、父を浮渥と云ふ擊劍を善くし任俠義を尙び好んで人の難を救ふ寛政の初年恒菴を江戶神田に生む恒菴八歲にして藤華園の門に入り專ら書を學ぶ又た三浦淳夫に就いて經を受け劉文翼に從つて詩を學ぶ寛政六年歿す年五十

恒軒【書】稻生氏名は正治、字は見茂、恒軒は其の通稱、浪華の人、古林見誼に學び業成りて江戶に出づ淀侯永井尙征其名を聞き聘して侍醫とす恩遇益々渥し延寶三年致仕す已にして侯學舍を興して吏民に敎ふ恒軒固より儒學を善くし經義は專ら濂洛の說を奉ず尤も群書に該通す是に於て恒軒を起して敎職とす六年病に依り浪華に皈る同八年歿す年七十一

恒善【書】歐陽恒善は長崎の人書體一家をなせり又た詩を能くす

恒章【書】速見氏、通稱彥三郞春曉齋と號す平安の人なり浮世繪を以て其の名世に顯る文政六年七月六日歿す

范古【畫】世に之を長崎范古と稱す肥前長崎の人なり花鳥を能くす又墨竹に巧なり

宣長【書】本居氏、享保十五年六月七日を以て伊勢松坂に生る家に三十六の鈴を掛け之れを以て悶を遣る故に號を鈴屋と云ふ京師堀景山に儒を學び旁ら武川法眼に從つて醫を學ぶ後ち鄉に歸り加茂眞淵の著はす所の冠辭考を讀みて大に發奮し書を眞淵に寄せて名薄を通す爾來雁書往來して以て能く其蘊奥を究む資性强記絕倫古事記の如き古來之れを解するものなし宣長之れを遺憾とし遂に傳五十卷を著はす考證の精確大に世に傳稱せられ盛名一時に鳴る享保元年九月二十九日歿す年七十二

宣就【書】岡本氏、初め熊井田新八、正武と稱す、本と石上氏、半助と稱す、兵法家なり隱退して無名翁、安分子、飯袋子、喜菴等の號あり嵯峨流の書を能くす和歌茶道に巧にして又兼て書を善くす其の書風澤菴和尙或は光廣に近し明曆三年三月十一日歿す年八十三

拾水【畫】下河邊氏、京都の人、書を鈴木春信に學びて能くす畫本類を畫けるもの多し天明年中

拾墮 秀樵釋紹等の別號

奇童【畫】畫僧なり可翁に學びて能く相似たり

奇峰【畫】八木氏、京都の人、松村景文に學ぶ天保年中

茁齋【畫】神部光濟、字は子海、雅樂之助と稱す圓山派の畫師なり伊勢の人、應擧の門に入りて其の風を能くす

紀主【畫】名は良忠、字は然阿、石見の人、鎌倉光明寺の住僧なり藤原道長八世の孫諫議大夫賴定の子、光明寺を創して此に居る畫を能くす弘安十年七月六日寂す年八十五

紅蘭【畫】女史は梁川星巖の妻なり美濃の人、年十七にして星巖に嫁し夫に詩を學びて能くし常に夫妻相携へて各地の山水を探討す畫は中林竹洞に學びて山水花卉に長ず嘉安の際海內多故志士等尊王攘夷を論ず星巖其の巨擘たり安政五年九月病みて歿するや幕吏紅蘭を拉して獄に下し鞫詢數旬に及び而れども紅蘭能く星巖の遺志を守り正を持して屈せず之に對へて曰ふ居常星巖も別室に在り故に客の到るありといへども其の何人なるかは余の知らざる所且つ國事の大事を婦人と共に議するが如き星巖に在らずと幕吏詰問する能はず遂に赦して家に還す時に六年二月十六日紅蘭是より零丁孤苦備さに辛艱を嘗む而れども貞操愈々勵み毅然大丈夫に讓らず明治十二年三月歿す年七十六

紅藍【畫】谷氏、名は榮、字は紅藍、谷文晁の二女なり書法を父に學ぶ菅原洞齋に嫁するを以て文晁之を菅伴と呼ぶ天保年中

紅園【畫】長山孔寅の號

紅英 山本翠雲の名

紅翠齋 北尾重政の別號

紅荳詞人 田能村竹田の別號

英中【畫】名は玄賢、字は英中南禪寺に住す詩名高し

英山【畫】菊川氏、名は俊信、通稱は爲五郎、重九齋と號す、はじめ父英二に學び後ち北齋の畫風を慕ふ又た歌麿の筆意に據り美人畫を發刋して世に行はる又善く俳優似顏畫を書く文化二三年の頃堀江町の團扇問屋等相謀り豐國の俳優畫を斥け英山をして代りて畫かしめしに大に行はるといふ豐國春扇と並び立て浮世繪中興と稱せらる

英泉【畫】池田義信、一に茂義、字は混聲、通稱善四郎、又た善次郎ともいふ後ち里介と改む北豪、溪齋、一筆菴、國春樓、無名翁、可候等の號あり初め狩野白珪に畫法を學び後ち菊川英山の門に入り浮世繪を學ぶ最も武者繪に巧みなり又た小說を作る嘉永元年八月廿六日歿す年五十七

英信【畫】狩野氏、名は英信、通稱源七郎、如適齋と號す後ち祐清と改む主信の二男なり憲信に養はれ其後を嗣ぐ德川家治の寵遇を受け畫を以て法眼に敍せらる寶曆十三年六月二十一日歿す年四十七、狩野氏第十一世

英齋【畫】三宅氏、浪花の人、畫を玉手掌洲に學び山水人物花鳥を能くす明治十一年歿す

英之【畫】佐脇氏、名は

マサ、嵩谷の女なり、父に書を學び其法を能くす寛政三年六月三日歿す

英信【畫】鶴澤探山の門人、安永年中

英信【畫】菊川英山の門人、安政年中

英章【畫】菊川英山の門人、安政年中

英章【畫】土田氏安政年中

英一【畫】菊川英山の門人、安政年中

英蝶【畫】菊川英山の門人、安政年中

英壽【畫】池田英泉の門人、嘉永年中

英里【畫】菊川英山の門人、安政年中

英春【畫】大木氏、江戸の人、池田英泉に學ぶ嘉永年中

英親 建部巣兆の名

英彦【畫】上代氏、雲州松代の人、岡本豐彦に學ぶ天保年中

柏園【畫】廣瀨氏、駲固の子なり父に書法を學びて能くせり

柏巖【書】名は性節、字は柏巖、碧崖氏と號す黄檗山の僧なり

指津【書】名は宗瑱、字は指津、釋氏なり

述齋【書】牟岐氏、名は純、字は隴陽、通稱は平助、浪花の人書を善くす

貞德【書】松永氏、彈正久秀の孫なり、父を永種といふ、幼名勝熊、長じて猶は髫を束ね童服を着け自から長頭丸、又は延陀丸といふ後ち書左衞門と改め逍遙軒、明心居士と號す資性和歌を好み特に連句に巧みなり當時山崎宗鑑俳諧を好み犬筑波集を著はす其句式未だ一定せず依て淀川油糟の二書を著はし以て宗鑑の著を正し犬筑波の遺漏を補ひまた御傘の書を著はして窃かに其の法式を定む後ち法皇貞德に聽して花の本の稱號を賜ふ堯然法親王方廣寺の南方に居り花卉を移植して柿園と稱す貞德其他に移住し構內に蓁葭を以て一の草菴を營み之れを蘆の丸屋と稱せり門に遊ぶもの多し書を能くし風骨圓豐自ら脫俗す著書數種みな俳諧の事に屬せり承應二年十一月十五日歿す年八十三

貞碩【畫】姓氏不詳、狩野派畫家寶永年中

貞柳【書】榎並氏（或は曰ふ永田）通稱は善八（或は曰ふ忠兵衞）油煙齋と號す初め良因といひ剃髮して貞柳と改號す又た清雲洞、圓果亭、助榮亭、長生亭、珍果亭等の別號あり實に戲曲作者を以て名ある紀海音の兄なり大阪の人、御堂前に住し家は菓子屋にして鯛屋山城椽と云ひ父を大和椽といひ貞因と號し俳諧を善くす貞柳父に學びて俳諧を善くし又八幡山の豐藏坊信海を師として狂歌を學び傍ら書法を講じ號を信乘といひ又た一に二世信海と號す松井和泉といふものあり嘗つて禁裏に墨を上つる貞柳之を見て曰く「月ならで雲の上まですみのぼるこれはいかなるゆゑんなるらん」と此の狂歌九重に達して油煙齋（一に由緣齋に作る）の號を賜はるといふ狂歌の道、貞德、未得、卜養、信海等盛に唱ふと雖も廣く世に行はるゝに至らす此人に至りて大成す享保廿年八月十五日歿す享年八十一

貞柳〔三世〕【書】初め貞佐と稱す、安藝廣島の人、丸山氏、後ち芥川氏を繼ぐ二世貞柳の門人にして狂歌をよくしまた書に巧みなり兼て畫に妙なり

師跡を嗣ぎて三世貞柳と稱す安永八年歿す年八十一

貞信【畫】狩野貞信、初め四郎二郎と稱す後ち左近、又右京進と改む光信の長男祖父永德の風を慕ひ父に從つて畫法を受け遂に大家となる德川秀忠に仕ふ元和九年九月二十日歿す年二十七狩野氏第七世

貞親【畫】伊勢貞親は足利義政の臣にして書を能くせり文明五年正月歿す年五十七

貞藤【畫】伊勢貞藤は默存居士と號す貞親の弟なり後入道して常喜と云ふ備中守に任ぜらる好みて圖書を作る

貞宗【畫】三好氏、眞言院の僧なり畫を能くせり天慶七年七月寂す年七十九

貞安【畫】雪舟の畫風を慕ひて之を能くす

貞芳【畫】歌川國貞の門人なり長谷川氏、大阪の浮世繪師なり

貞丈【畫】伊勢氏、原と平氏、名は貞丈、安齋は其の號平藏と稱す父貞益幕府の士たり千石を領す兄貞陣封を襲ぎて幾くもなく夭死す依て封地を返官す幕府殊に舊領地の內三百石を平藏に賜ひ家を嗣がしむ平藏幼より有職故實を好み博覽宏通中世以降の記錄に於て硏尋せざるなく之れを以て一家を成す制度典章器械服飾に至るまで考據精密にして是より先き有らざる所なり著述の書も皆寫本を以て行ると雖ども人々之れを珍重す書は狩野土佐ともに修めて筆法太だ細密也天明四年六月五日歿す年七十

貞虎【畫】歌川國貞の門人、通稱典之助、年少にして歿す嘉永年中

貞繁【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞景【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞秀【畫】橋本氏、通稱兼次郎、歌川國貞の門人、文久年中

貞幸【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞綱【畫】歌川國貞の門人文久年中

貞久【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞重【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞廣【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞舛【畫】歌川國貞の門人、文久年中

貞歌【畫】女史は歌川國貞の門人、文久年中

貞信【畫】狩野氏、梅榮の子、梅春と號す畫を以て幕府に仕ふ嘉永年中の人

貞信【畫】歌川國貞の門人、世に畫名あり安政年中

貞常親王【畫】後崇光院の子なり伏見宮と稱す應永三十二年十二月生る文安元年二月親王となる二年三月加冠す四年三月二品に敍し中務卿に任ず寬政五年七月後花園帝、親王の東洞院の第に幸し二品を授く學和漢に通じ書畫を能くす文明六年七月薨ず年五十

貞幹【畫】藤井氏、一名は好古、字は子冬、無佛齋と號す通稱は叔藏、京師佛光寺中の僧家の子なり國學を以て聞ゆ尤も考證に長じ平生述作の書皆な後進に裨益あり畫を高芙容に學ぶ寬政九年八月十九日歿す年六十六

貞幹 木下順庵の名

柴菴【畫】相國寺に住す畫風眞相に似たり

契信【畫】天台宗の僧侶、畫を善くす

俊道【畫】百々俊道、字は仁傑、富春、又誠名園と號す越智氏なり後三佛齋と號す待醫にして法

眼叙にせらる

俊徳【書】百々俊徳、字は克明、漢陰と號す通稱内藏太、俊道の子なり醫業盛に行はれ又た漢學に精しく詩文を能くす天保十年四月十三日歿す年六十六

俊和【書】紀俊和は惜蔭と號す紀伊和歌山の神職なり書を能くす文化年中の人

俊英【書】藥師如來十二神崎の像を圖せりといふ

俊賀【書】畫を能くす其唐本を模して畫けりと傳ふる羅漢八鋪は高山寺に存すと云ふ

俊久【書】巨勢俊久は維久の子、父の業を繼ぎて聲名を墜さず貞治年中の人

俊【書】村田氏、東洋の門人、書を善くす京師の人

俊成【書】藤原氏、俊忠の子、初め顯廣といふ幼にして聰明和歌を善くす又圖書を善くし頗る雅趣あり元久元年薨す年九十一

俊滿【書】窪氏、通稱は安兵衛、尚左堂と號す戯作者にして名を南陀伽紫蘭と云ふ著書數種あり世に行はる又北尾重政、勝川春章に就て浮世繪を畫けり左筆なりといふ

俊長【書画】藤原氏、俊成の子、從四位下左少將に任ず後ち薙髮して釋門に入る書畫を能くす建仁二年歿す

俊明 青木夙夜の名

俊明【書】永正の頃畫を以て伊勢北畠氏に仕ふ

俊之【書】石川氏、通稱伊左衛門、菱川師宣の門人、正德年中

俊信 菊川英山の名

俊信 英一笑の名

俊信【書】狩野氏、匡信の子、雪溪と號す天保年中

俊彦【書】岡本氏、字は士明、菰村、友松齋、守中館等の號あり、豐彦の養子となる蓮華光院の近侍となり岡本舍人と稱す嘉永年中

俊一【書】尾崎氏、三河の人、岡本俊彦に學ぶ安政年中

俊章【書】早川氏、三河の人、岡本俊彦の門に學ぶ安政年中

俊雅【書】吉永氏、三河の人、岡本俊彦の門に學ぶ安政年中

俊卿 中澤雪城の名

泉必東【書】泉必東、泉一に錢に作る名は貞、字は恆卿、必東は其號、沈南蘋の畫風を學び人物花鳥を善くし其名當時に高し又書に巧みなり寶永頃の人

泉石【書】狩野翁信は清右衛門と稱す泉石は其の號法橋に叙せらる松榮の門人なり

泉南【書】名は寂照、字は泉南、書を好んで能くせり

泉景【書】佐々木氏、名は爲絢、泉景は其の號別に彩雲と號す享保八年歿す年七十四

泉晁【書】俗稱吉藏、貞齋と號す、溪齋英泉の門人にして江戸の浮世繪師なり靈岩島に住し多くは草双紙錦繪等を畫く頗る世に行はる天保の頃の人

泉首座 景蘇の名

泉玄【書】佐々木氏、名は守公、泉景の弟書を能くし法眼に叙せらる文政年中

泉龍【書】佐々木氏、越溪と號す泉景の子、明治初年歿す年七十餘

泉明【書】田中氏、泉景の門人、天保年中

泉里【書】池田英泉門人、安政年中

泉隣【書】井村氏、江戸の人、池田英泉に學ぶ安政年中

泉石【書】佐々木氏、別に白頓と號す泉龍の子、明治初年歿す

前久【書畫】近衞前久舊の名を晴嗣と云ふ天正十三年關白長者の詔命を受く左大臣從一位に叙せらる詩歌を能くし尊圓流の書に長じ又た畫を能くす薙髪して龍山と號す慶長七年五月薨ず年七十七

咸之【書畫】上田氏、字は淳父、止々齋、又た半九窩と號す、通稱利兵衞、初め書法を加茂の祠官岡本保考に學び後ち一家の風をなす上田流といふ文政九年十二月二十六日歿す年七十一

要清【書畫】狩野元信に學びて畫を能くす天正年中

後鳥羽天皇【書畫】韓は尊成、萬機の暇畫事を好みて人物を畫かせらる緻密柔潤畫工の及ぶべきにあらずといふ延應元年崩ず壽六十

後宇多天皇【書畫】諱は世仁、龜山帝第二の皇子、空海の像を畫き賛を其上に加へられるもの今東寺に傳ふといふ正中元年六月崩ず壽五十八

後醍醐天皇【書畫】諱は尊治、後宇多天皇第二の皇子、博識强記材文武を兼ね且つ書畫を能くせらる延元四年八月崩ず壽五十二

後光嚴天皇【書畫】諱は彌仁、北朝の帝なり畫を好み師を召して學び花卉禽獸の圖を巧みにせらる應安七年正月二十九日崩ず壽三十七

後奈良天皇【書畫】諱は知仁、後柏原帝の皇子、畫く所設色の北野神像あり弘治三年九月五日崩す壽六十二

後陽成天皇【書畫】諱は周仁、親

王たる時海北友松を召して畫法を學び其の妙を極め又た泥畫を能し給ふ文和三年八月崩ず壽四十七

後水尾天皇【書畫】諱は政仁、落飾して圓淨と稱せらる和歌に通じ佛教に精く又た畫を能くせらる筆法清爽にして逸氣あり寛永六年崩ず壽八十五

後慶【書畫】雪村の門に學ぶ天正年間

後素 大盥中齋の名

後樂齋 三神三介の號

亮僊【書畫】小島氏、周文に學びて山水人物花鳥を能くす雅趣甚だ愛すべきものあり天文年中の人

亮信【書畫】貞和年中の人父藤原爲信に畫を學びて父に劣らず比叡山に登りて山門の法印となる好みて文珠の像を畫けり

亮信 狩野春笑の名

亮彦【書畫】岡本氏、豐彦の二男、字は士朗曉翠と號し別に澄神齋の號あり父の歿後復た妙法院の近侍となり岡本司馬と稱す嘉永年中

相阿彌【書畫】名は眞相、鑑岳又た松雪齋と號す藝阿彌の子足利義政の臣なり山水人物花鳥を能くす畫風周文より出でゝ別に一家をなす世に稱せらる

相見【書畫】巨勢氏第二世の人、相見一に相覺に作る金岡の子なり妥女正に任ず又讃岐目たり畫風父と大同小異なりといへども特に活動あり佛像に巧くみなり延喜年中の人

相信【書畫】藤原氏、中納言敦忠の孫なり畫に巧なり曾て自ら其の家の障子に畫く粟田關白此に遊び之を見て深く愛重す

相保【書畫】海田氏、采女祐と稱す初め藤原氏、

中頃源氏に改め、後ち又た藤原氏に復す最も圖書に精し或は曰ふ土佐隆相の子なりと

相鑑【書画】雜畫を能くするを以て世に其の名あり

相泉【書】周文の弟子泉州の人にして常に堺に住し彌陀の像を畫く金碧を用ゐるに精しく畫亦た風韵あり後高野山の麓に歿せり

相宰 木下逸雲の名

柳灣【書】舘氏、名は機、字は樞柳、通稱二郎、柳灣は其號、一に賞雨老人と號す詩に巧に書を善くす弘化元年四月十三日歿す年八十三

柳雪【書】狩野派の畫家、名は秀信、紫峰と號す柳雪は其の號光信の門人

柳日【書】桃田守明、柳榮の男、畫を能くす寛永九年正月歿す時に年三十九

柳塘【書画】柳生徹 字は眞達、柳塘は其の號、一に柳菴、或は魁堂と號す肥前の人、長崎に出でゝ清人に就き專ら書法を學ぶ又畫を好み蘭竹石等に長ず後ち筆を載せて諸國を漫遊す明治六年八月紀州田邊に於て歿す享年六十七

柳堂【書】田邊文清、字は子章、通稱文平、南宗派を能くせり大坂の人

柳園【書画】福島氏、名は寧、通稱重次郎、武藏湯本の人なり畫を好み柴田是眞に就いて學ぶ後ち宋明の遺墨を模寫し更に一格を開く最も山水に工に又た四君子花鳥を作る又た詩を能くす明治二十二年十月二十五日歿す年七十

柳榮【書】桃田守光、幽香齋と號す、探幽の門に入りて其の深趣を得大に妙技を極む元祿十一年歿す

柳安【書】畑氏、名は惟和、字は厚生、柳安は其通稱、黄山と號す京師の人、侍醫となりて法印に叙せらる艱步を以て特に殿上杖を許し號を醫學院と賜はる傍ら書を能くす文化元年五月二十六日歿す年八十四

柳元【書】桃田氏、柳榮の弟也畫を兄に學ぶ天保年中

柳所【書画】田口氏、名は與治、字は子朗、柳所は其號、また適齋、蘭鶴等の別號あり羽後山形の人初め淺草七軒町に住し後下谷稻荷町に移り晩年谷中の芋坂に移る大沼枕山に就いて詩を學び福島柳圃に從つて畫を學ぶ當時の諸名家と來往して翰墨の交はりをなす明治二十五年六月二十七日歿す時に年五十四

柳雪齋【書画】狩野氏、了琢の長子なり外記と稱し柳雪は其號、畫法を父に學ぶ寛永十二年七月歿す

柳榮【書画】廣田氏、通稱金藏、竹友と號す狩野派の畫家なり元祿年中

柳伯【書画】狩野氏、名は定信、柳伯は其號、通稱粂次郎、大學氏信の三男、兄柳雪の子早く夭せしを以て其養子となる京保年中

柳伯 奈須宗仙の別號

柳蹊【書画】吉田氏、駿州の人、安政年中の畫家

柳煙樓 歌川國直の別號

柳齋【書画】大岡氏、嘯川の門人、安永年中

柳郊【書】北尾政演の門人文政年中

柳浪 小林桐雨の別號

柳塘閑人 井上金峨の別號

是安【書画】和久氏、名は俊英、半左衞門と稱す書は近衞信尹の門に學び其風を能くす畫も亦信

尹の風に似たり初め豐臣秀頼に仕へて書史を勤む後ち伊達政宗德川家康の許を得て之を招用す寛永十五年八月廿一日仙臺に於て歿す年六十一

是直【畫】巨勢氏第六代の人、弘高の子、其家を繼ぎて畫名あり左近衛將監に任せらる長元年中の人

是永【畫】荒木氏、江戸の書家なり志津磨の門に遊びて書方を學ぶ後ち遂に一家を成す

是菴【畫】相國寺の住僧なり書意甚相に似て發墨柔潤甚だ氣韻あり

是信 狩野作山の名

是眞【畫】柴田氏、幼名龜太郎、後ち順藏と改む父は宮彫工市五郎といふ是眞文化四年を以て江戸に生る年十一始めて坂内寛哉を師として蒔繪を學び文政五年鈴木南嶺の門に入りて四條派の畫法を學び令哉と號す十三年京都に趣き岡本豐彥、穗井田忠友等の門に入り又た香川景樹を訪ひ去りて賴山陽の家に寓し周遊多年江戸に歸りて畫業大に進む其後ち居を淺草石切河岸に移し柳原と對するを以て對柳居といふ老て益壯に內外の博覽會共進會等に筆を揮うて大に人目を驚かし當世畫家の巨擘と稱せらるゝ門人甚だ多し其傑出せるものには柴田令哉(長子)同眞哉(次子)幷草國芳、池田泰眞、福島柳圃山形素眞、松野應眞、大西椿年、莊司竹眞、吉村しま女等あり是眞又た俳諧を好み幼にして飛鳥井一叟を師とし其死後橘田春湖に交り已れの書道を以て彼の俳道と交換す明治二十四年七月十三日歿す年八十五

珉江【畫】初め縫箔を業とし後ち浮世繪師に轉ず摺込の彩色を發明し大に世に行はる寶曆明和頃の人

珉和【畫】書法を岸駒に學びて善くす平安の畫家

珉江【畫】橘氏、浮世繪を畫き摺込の彩色を工夫し一時世に賞讃せらる職人部類を著はせり寶曆明和の人なり

珉山【畫】書法を岸駒に學んで能くす平安の人

保胤【畫】慶滋氏、賀茂丹波守忠行の第二子、陰陽博士保憲の弟なり學識該博にして文章に冠絕す少うして菅文時に師事し天曆の末に試みられて獨り第に中る從五位下大內記に拜す少年より深く佛敎を慕ひ剃髮して寂心と稱す嘗て日本往生傳を著はす後四方に歷游して專ら佛事を務とす長德三年東山の如意輪寺に寂す筆跡に巧みに略ぼ道風に似たり世に慶保胤といふ

保國【畫】橘氏、守國の男、大坂の人書法を父に學びて後素軒法橋と稱す寛政四年二月二十三日歿す年七十六

保壽【畫】河原保壽字は子昌、臺山と號し又た鵲巢主人の號あり通稱小河嘉兵衛、書を葛烏石に學びて善くす天明三年九月十一日歿す享年七十

保足【畫】岡本氏、山城上加茂の祠官たり幼より書を好み晝夜寢食を忘れて修學す年八十に餘るも尙勉強す人あり其の書を賞揚すれば潸泣して自から拙を耻づ其の風宋元を慕ふ文政年中歿す

保考【畫】岡本氏、正四位下甲斐守兼治部權大輔たり書博士に任ぜらる□○齋と號す殊に能筆の名高く門に入つて學ぶもの頗る多し又た和歌に妙を得たり文政元年四月十九日歿す年六十八

保

光齋【書畫】吉村周山の門人、書を以て法眼に叙せらる安永年中

保川【書畫】古川氏、下野の人、狩野派の書家、嘉永年中

思亮【書】關氏、字は世達、東陽と號す、通稱は源吾克明の男也生れて精敏群兒に異なり幼にして圖書を辨じ文字を識る日に翰墨を弄し以て娯みと爲す長じて博く史籍を覽能く文辭を屬す其家臨池の技を傳ふるを故を以て墨池の論金石の編廣く訪うて而して該通せざるはなく其臨池に關係する者旁ら捜りて偏く綜ねざるはなし夫の字説の若きも精覈ならざれば舍かず晨夜孜々唯だ業是れ務む聲譽日に滋々進み業を請ふ者門に滿つ是に於て父克明門生肆業の事を以て一に東陽に委ね開業の際に方つては逍遙管を搦りて責めを塞ぐ而已是に由つて父に代り日に出でゝ諸侯及び貴紳の請に其邸に就き父と共に觴を分つて並び騁せ敢て遑あるなし衆謂ふ關氏子ありと曩きに克明の行書類纂を著はすや東陽之が編次を爲し古字本及び正俗假借の若きは一に説文に據り字説に檢して之れが要を擧げ而して之が卷首に揭げて覩易からしむ然して東陽實に助けあり克明博く海内の法書を集め其得て購ふ可からざる者は塾中の諸子をして之を摸せしむ東陽恒に其役を總ぶ双鉤の法嚮搨の妙雲捲霞收纖濃疎密の際曲に至りては眞に逼り觀者駭然たらざるはなし蓋し天生に出づと云ふ天保元年九月二十七日暴かに病むで歿す年僅に三十五

思恭【書】關氏、字は子肅、源內と稱す鳳岡、又た恭默齋と號す江戸の人原と伊藤氏故ありて關氏を冒す學を太宰春臺に受け書を細井廣澤に學び名一時に顯はる尤も草書に工みなり時に草聖と稱せらる其の門に入るもの五千餘人に至る土浦侯に仕へ明和二年十二月二十九日歿す年六十九

思考 三熊花顚の名

思敬 關雪江の名

思貼齋 細井廣澤の別號

看鶴【書畫】吉野徽、字は嗣宗浪花の人書畫を能くす

看雲【書畫】三宅氏、嘉永年中の人

即譽【書畫】狩野氏、名は豐信、また種信と云ふ即譽は其の號なり素川の三男、後加賀侯に仕へ畫法能く家法を守る加賀即譽と稱す

即梅【書畫】周文の門人にして達磨及び雜畫を畫けり

即非【書】名は如一、雪峯と號す隱元と共に來朝して萬福寺に住す廣壽山の開山たり

即山【書】神波氏、名は桓、詩書を善くす明治二十四年一月三日歿す

即譽【書畫】狩野氏、即譽六代の孫天保年中

秋巖【書】荻原翬、字は文侯、通稱祐助、後自然と改む秋巖は其號別に古梁漁史と號す卷菱湖の門人にして書を能くす著す所書法薈粹あり明治十年二月十九日歿す年七十五

秋香【書畫】谷氏、名は舜英、字は小香、通稱シュウ文晁の妹にして中田粲堂の妻なり山水を能くせり天保三年五月十六日歿す年六

十一

秋嶺【書】村山氏、名は源、幸三郎と稱す奥州の人書を能くし山水に長ず安永年中

秋山【書】櫻井氏、名は雪傑、字は桂月、江戸の人、雪關の女、書を父に學びて人物山水を善くす最も高壁巨障を書くに巧みなり秋山容貌醜しといへども丹青の技に誇り自ら見る甚だ高し曾て一宴中酒酣なる時秋山曰く海内實に我に配すべきの男なしと傍人卒爾に曰く海内亦た君が如き醜婦を娶るべき男なし匹なきを以て患となす勿れと秋山大に愧づといふ文化年中の人

秋月【書】僧秋月、俗姓は高城氏、名は等觀、長州の人、初め薩摩に仕へ後薙髮して僧となり雪舟に學びて其奥旨を極め又た師に從ひて入唐す後ち特に其名を得たり故に入唐秋月と稱す筆意淸秀其印なきものは世人往々誤りて雪舟の書となす水墨の山水達摩に至りては特に然りとす永正年中の人

秋岳【書】字は林周、丹波の人、幼より書を好み壯年に及び周文の書風を慕ひて能くす後年故ありて書事を廢せり故に遺墨世に少なし

秋共【書】飯河氏、治部少輔と稱す後入道して一兩齋妙佐と號す皇朝入木道の正統を繼ぎ弘法大師三十三世の傳統なり上代風又は加茂流と稱するもの丶中祖なりとす

秋澤【書画】書を能くす多くは佛像なり應永年間

秋暉【書】岡本氏、祐之丞と稱す晩に秋翁と云ふ江戸の市民にして幼より書を嗜み鍬形蕙齋の門に入りて學ぶ一說に渡邊華山の門人とするは非なり後故ありて小田原の大久保氏に仕ふ始め山水人物を專とせんとせしが藩臣に列し俗事多忙なるを以て人物の古實を考究する能はず又山水の奇勝を游覽する能はず是に於て專ら花鳥を研究し其の眞を寫すを以て日誌とす遂に一機軸を出だし花鳥の大家となれり又書龍に長せり其の書固より古人の粉本を摸範とせず筆法と寫眞の二要を兼むるを以て家には一の粉本なし唯龍風の粉本若干あるのみ曰く龍風の如きは寫眞する能はず謹んで古人の粉本に據らざるを得ざるなりと文久二年九月歿す年七十八

秋香【書】中邨氏、舊稱小周次、不盡の屋、今かくれが、乾坤廬、槐陰書屋等の號あり靜岡の人、年十五國學を松本直秀に學び傍ら漢籍を戶塚靜齋の門に修む明治六年以降教部內務文部各省に歷仕し後ち大學事務官となり又第一高等學校に教授となる三十年御歌所寄人を命ぜらる歌を善くし書に巧みなり明治四十三年一月二十八日歿す年七十

秋香 建部巢兆の號

秋月 三世堤等琳の初號

秋榮 三世堤等琳の初號

秋水【書】木下氏、近江の人、南宗の書法を修す嘉永年中

秋水【書】村瀨氏、名は徵、字は世猷、初め韓江と號し後ち秋水と更む晚年或は秋翁と稱す通稱は平三郎、美濃國武儀郡上有知村の人、幼より書を好み年甫めて十三名古屋に至り張月樵の門に入りて專ら繪事に耽り書を以て天下に名を爲すを期す三十歲にして野呂介石の門に入り或は名蹟を臨摸し又は山河を跋涉して書資を求む曾て京都に遊ぶと稱して家を出て遂に遠く長崎に遊び僧鐵翁と相晤し福州竹數竿を得

て携へ歸りて庭に植う風月の夜竹影婆娑々として紙窓に映ずるを見て書竹の妙處を悟り變化自在を得と云ふ又た嘗て和州多武峯某寺に黄大痴の天地石壁圖を藏すと聞き往きて之を觀んことを乞ふこと二回其の繪事に熱腸なる推して知るべし既にして書に志し歳六十を過ぎ明人張東海が草書千字文の眞蹟を得て毎朝鷄鳴に起き必通習一過を以て例とす人に語て曰く七十の手習とは此事也と揮毫を請ふもの常に門に滿つ秋水固より嘉遯を以て自適し都城に出でゝ名を衒くを欲せず故に書も亦た飄逸自ら呉仲圭の人となりに比すと云ふ明治九年七月歿す年八十二

秋峯【書】増田秋峯は豊前の人なり吉田公均に書を學ぶ嘉永年中

秋溪【書】松山氏、肥後の人、文久年中

秋塘【書】姓氏を知らず安政年間の人にして水墨山水を能くす

秋圃【書】秋月氏、長門の人、嘉永年中

秋成【書】上田氏浪花の人、通稱東作、醫を以て業とし後ち醫を廢して和漢の書を讀み博聞强記なり加藤美樹の浪花に來るを待ちて門に入り專ら古學を修め遂に一家を成し大に世に鳴る平生屢々其居を變ふるを以て自ら鶉居と號し又た無腸、餘齋と號す殊に煎茶を愛して其法を中興す文化七年歿す年七十八

幽汀【書】石田叔明、幽汀は其號、狩野探鯨に學びて能く其の法を得、後一家の風をなせり圓山應擧は初め其の門に入りて畫法を受けしといふ元明六年五月二十五日歿す

幽玄【書】目賀田氏狩野守信の門人にして其の風を能くす

幽皓【書】狩野派にして鶴澤探山の門人なり

幽谷【書】野口巳之助、元大工源四郎の子也、天保二年正月江戸に生る年十五にして父を喪ひ兄に養はる其の大工の職の母を養ふに足らざるを憂ひ椿椿山に畫を學ふ第一回繪畫共進會に其畫く所菊花の圖を出し宮内省の御用となる又其の會に就て審査官となる後ち帝室技藝員に列す明治三十一年六月六日歿す年七十四

幽谷【書画】藤田氏、名は一正、字は子定、幽谷は其號、次郎左衛門と稱す幼にして穎悟人に絶す初め句讀を志水元禎に受け後ち立原東里を師とし學業日に進む東里其才を稱し薦めて館生となす時に年十五文公藩に就くや數々召見して詩文を作らしめ以て之を試むるに筆を授くれば立ろに成る公大に之を奇とし累りに錄秩を進む後ち史館に入り編修に與る武公の時擢じられて小納戸となり編修を總裁し祿二百石を食む其子弟に敎ふるに忠孝を以てし力を正學に專らにして尤も老壯の學を惡む素と邊事を憂ふ當時干戈を見ざる二百餘年文恬武熈復た兵事を言ふもの無し謂らく滿清乾隆の西師は今を去ること二三十年一水の外大兵革を用ゐたる此の如し海內虞なしといふと雖も而かも治安特むべけんやと言論常に世の無事に安んずるものを警發す文政九年十二月一日歿す年五十三明治廿四年正四位を追贈す

幽谷【書】鶴澤探山の門に學ぶ大阪の人安永年中

幽香齋 桃田柳榮の別號

幽泉 鶴澤探山の別號

幽讃 神足高雲の別號

幽篁齋 佐脇嵩之の別號

幽篁【畫】河野氏、通稱左右平、越前の人狩野派の畫家、嘉永年中

幽石【畫】池田氏、幽石は其號、後ち神田善之丞と稱す狩野安信の門人、慶安年中

幽石 春木南湖の別號

幽溪 大西圭齋の號

幽次【畫】兒島氏、鶴澤探山の門人、寶永年中

幽知【畫】松原氏、鶴澤探山の門人、寶永年中

幽墨【畫】松田氏、信武と稱す肥後の人、狩野派の畫家なり天保年中

柯亭【畫】武井氏、名は秦、字は子通、柯亭は其號別に五峰と號す會津の人、書を能くす名利に淡く晩年常に鶴裳衣を被て徜徉散步し名山勝水に逢へば岩石に跪して彈琴吹蕭還るを忘る明治三十某年歿す年七十餘

柯亭【畫】海野氏、通稱藤藏、畫を父蟆齋に學び殊に墨畫に長ず文政年中

美靜【書】福羽氏、津和野藩士福羽美質の長子、幼名文三郎と稱す長じて大國隆正の門に入りて國學を修め出藍の稱あり明治元年徵士となり神祇事務局權判事に任ぜらる爾後教部大輔、元老院議官、貴族院議員、錦鷄間祇候等に任じ子爵を授け正二位に敘せらる明治四十年八月十四日歿す年七十七

美信 狩野洞春の名

美麿【畫】喜多川氏、菊麿の門人、文政年中

美丸【畫】歌川國丸の門人文政年中

美樹【書】加藤氏、本姓は藤原、大助と稱し靜舍と號す縣居眞淵の門人なり最も和歌に長ず安永六年六月十日京都途次に歿す

信春【畫】長谷川氏、通稱久藏といふ等伯の二男なり父に學びて遂に之に超ゆ其精密なるものは狩野元信に傚ひ人物花卉を能くせり元祿元年九月十八日歿す

信包【畫】織田氏、信長の弟なり薙髮して老犬齋と號す好みて圖畫を作る慶長十九年七月十七日歿す

信雄【畫】河窪氏武田氏の族にして信俊の男なり始め主膳、後ち越前守と稱す幕府に仕へて畫師たり鷹の圖は其の最も長ずる所なり

信武【畫】野々村通正、俵屋と號す光琳の畫風を學びて能くせり

信忠【畫】佛像鬼魅の圖を畫けり見るもの恐怖す

信尹【畫】藏原伊信の門人其の畫法を傳ふ

信春【畫】牧溪より出でゝ能く其の風を得たり世或はいふ狩野元信の門人なりと南都の人春日畫師にして佛像を能くせり天文年中の人

信實【畫】藤原氏、初の名は隆實、後ち信實に改む和歌に巧なり父隆信に從ひて畫を學び妙手にして殊に寫眞に長ず又光長の風を慕ひ筆意優に勝る興に入れば則ち人丸の像を畫く時人得て以て珍藏す晩年入道して寂西と云ふ文永二年十二月十六日歿す年八十九

信茂【畫】巨勢氏七代の人なり是重の子、畫を以て其の家を繼ぐ左衞門忠に任ぜらる康平年中の人

信鄕【書】羽倉氏、字は子晟、三峰と號す本姓は荷田、洛南稻荷の祠官たり從四位上攝津守に敘任す詩歌を能くし

書に巧みなり享和元年閏四月二十七日歿す年六十二

信尹【書】近衞信尹、舊の名を信基といふ太政大臣前久の子なり從一位左大臣に陞り關白氏長者となる夙に能書の聞えあり近衞流書風の祖なり又た好みて天神の像を畫けり文祿十九年正月薨ず年五十論して三藐院といふ

信海【書画】名は孝雄、玉虛と號す又子覺、華堂等の號あり小堀政一に就いて茶道を學び松花堂に從ひて書畫を學び狂歌を善くす其の名とともに世に高し元祿元年九月十三日寂す八幡豐藏坊の僧なり

信清【書画】川島氏、讀本繪を畫き自ら大和繪師と稱す大坂の人文化年中

信玄【書】武田晴信、機山と號す剃髮して信玄といふ其の事歷は此に贅せず詩を巧みにしまた畫を善くす多くは人物を描く天正元年四月十二日歿す年五十三

信貞【書】能く馬形及び打球の圖を畫く一時大に重んぜらる多くは皆公卿の殿閣に畫きしものなりと云ふ天正年間の人

信【書画】藤田信、字は子立、通稱小四郎、先憂齋、雲溪と號す、水戶の人、東湖の四男、詩文を能くし書畫に巧み也尊攘の說を唱へ兵を筑波山に擧げ屢幕軍を苦しむ元治元年十月二十三日越前敦賀に刑死す年二十四明治二十四年十二月從四位を追贈せらる

信政 狩野素川の名

信種 英一舟の名

信勝 英一蜂の名

信祐 英一川の名

信宣 高嵩溪の名

信曉 高田太郎庵の別號

信一【書画】歌川國芳の門人、文久年中

信與喜【書】歌川國芳の門人、文久年中

信清【書画】歌川國芳の門人、文久年中

信房【書画】歌川國芳の門人、文久年中

信之 狩野春雪の名

信藤【書画】藤原信藤は爲理の子にして信實五代の孫なり畫法を父に受け筆力秀逸なり延慶年中

信繁【書画】武田氏、通稱左馬助、信繁は其名なり信玄の弟、逍遙軒と號す嘗て信玄の像を畫く又た十王及十二天像を模したるものは今藏めて紀州高野山に在りといふ永祿四年五月川中島に戰死す

信盛【書画】錦氏、狩野派の畫人なり寶永年中

信義【書画】狩野氏、榮信の二男三之助と稱す天保年中

信章【書画】狩野氏、榮信の三男、駒之丞と稱す畫法を父に學びて能くす文政十一年十月歿す年二十一

信秀【書画】巖本氏、播摩の人、土佐派の畫家なり天明頃の人

信案【書画】米信案は狩野派の畫人なり寶永年中

信重【書画】鈴木右兵衞と稱す狩野光信の門人にして後ち狩野信重と種す慶長年中

信天翁 山中靜逸の別號

信天翁 月岡雪鼎の別號

茂彥【書画】岡本氏、通稱左馬、平安の人なり岡本豐彥に畫を學びて善くす殊に席上揮毫に妙を得たり

茂朝【書画】長瀨氏、字は子林、九柳と號す文化年間南都の人

茂樹【書画】西村氏、名は鼎、字は重器、晩に泊翁と號す佐倉藩士なり夙に蘭學を修め泰西の事情に通ず維新の頃既に泰西史鑑萬

國史等を譯述して大に世の文化を助く學和漢洋に渉り皆能く究めざるなし明治二年佐倉大參事に任じ諸官に歷任し宮中顧問官となる三十四年文學博士の學位を授けらる性寛洪にしてまた詩文書を善くす明治三十五年八月十八日歿す年七十五

茂兵衛【書画】辻村氏、浮世繪を能くす承應年間の人

茂右衛門【書画】狩野貞信に從つて畫を學ぶ氏名詳ならず慶長年中の人なり

南浦【書】名は紹明、南浦と號す入宋して虛堂の法弟たり書をよくし又詩に巧みなり

南源【書】名は性派、字は南源、黄檗山の僧たり松雪と號す

南崖【書画】岩城親寅、字は子恭南崖は其の號、通稱は金兵衛尾張の人なり書畫を善くす

南陽【書】原氏、名は昌克、字は子柔通稱は玄興、水戸侯の醫員なり又能書の聞えあり初め京師に遊び山脇侃、賀川玄悦の術を受く伎倆卓越名東國に振ふ文政三年八月十六日歿す年六十八

南蘋【畫】沈南蘋名は詮、字は衡齋、清の呉興の人來朝して長崎に住し居ること三年蘭竹梅菊に巧みに且花鳥に長ず研麗秀澤能く人目を悦ばしむ邦人爭うて師とし學ぶ故に其の畫格當時大に行はる

南湖【書】堀正修、字は身之、通稱正藏、南湖は其の號又た習齋と號す安藝侯の儒臣にして書も亦た佳なり寶曆三年三月七日歿す年七十

南嶺【書画】鈴木氏、名は順、字は子信、南嶺と號す又た觀水軒の號あり通稱猪二郎、平安に出でゝ東東洋の門に學び人物花鳥山水を能くし其の名高し弘化元年十月十二日歿す年七十

南畝【書】太田氏、名は覃、字は子耕南畝は其の號、蜀山人、杏花園、櫻山人、石楠齋等の別號あり直二郎と稱し後七左衛門と更む幕府の士なり學を好んで文章を善くす傍ら遊戲國歌を作る滑稽諧謔村老野嫗と雖ども絶倒せざるなし世の所謂蜀山先生是れ也初四方赤良と號し又四方山人と號す其の匆筆になるもの人誤つて蜀山人と讀み後遂に自らも蜀山人と改むるに至れり家に老僕あり逸助と云ふ質懿朴魯南畝之れを愛す後ち授くるに資本を以てし商を營み自から給せしむ然れども逸助人と爲り迂鈍にして動もすれば乃ち來りて哀を乞ひ以て常とす一日復た將さに言ふ所あらんとす南畝笑うて曰く汝ぢ例に因りて資を請ふに非ざるを得んや逸助曰く非なり奴家の壁剝落す敗紙を請ひて之を糊補せんと欲す南畝笑つて曰く甚だ易しと手づから几上に在る所の書幅を之れに付す逸助謝して出で門人に途に遇ふ門人見て之れを問ふ逸助答へて曰く主人賜ふ所の敗紙のみと門人取て之を視れば文章詩歌奇思横逸皆な平生未だ見ざる所なり乃ち走て之れを告ぐ南畝曰く渠自から福あり子等之れを欲せば渠に求めて可なりと門人爭ひ就て之れを買ふ後ち至る者は或は壁上の故紙を揭して取り去る逸助因て十餘金を獲未だ幾ならずして資又盡く適々于蘭盆に會す逸助囊を傾けて紙燈を造り往て市に賣るに售れず南畝に抵りて買はんことを求む南畝曰く倘ほ紙燈を取り來れと逸助盡くこれを致す凡そ百餘南畝命じて墨を磨らしめ腕を揮て

疾書し一燈毎に一詞を題す出せば隨て寫す宿構を出すが如し頃刻にして成る更らに報草一通を作る文辭洒落戲謔百出逸助に命じて之れを諸友に致し副ふるに紙燈を以てす諸友傳觀し爭て之れを買ふ尋常の紙燈は直七八錢に過ぎず南畝の筆するに因て五六十錢に昻り遠近傳聞して直を倍し之れを購ふに至る逸助又た利を獲る十餘金なり時に戲文字を善くする者十返舍一九あり素と南畝と識らず其の人と爲りを聞て之れを見んと欲し其の門に抵る門者謁を通ず久うして出でず一九罵て曰く南畝は一賤士に過ぎざるも亦た人に驕るかと見ずして去る後ち之れに外に遇ひ南畝に謂つて曰く先生何爲ぞ我を困しむる答へて曰く吾子何爲ぞ我を弄する一九怪で其の故を問ふ曰く僕子の名を聞く久し幸にして訪はる共に快飲せんと欲し而して適々酒資に乏し園に一の桐樹あり之れを造履匠に鬻で數百錢を得反て子を求むれば則ち無し豈に我を弄するに非ずやと一九詰る能はず南畝生涯放浪自恣の言を以て一世を嘲弄す然れども長ずる所玆にあり文政六年四月六日歿す年七十五

南湖【書画】春木鯤、字は子魚、通稱門彌、煙霞釣叟と號す其の主雪齋增山侯資を擲つて長崎等に游ばしむ南湖乃ち兼葭堂を師とし又清人費西湖に會し繪事を究む當時谷文晁書名大に振ひ南湖も亦聲價あり天下の二老と稱す天保十年歿す年八十一發句の自賛書に「花は今芳野は見ねど隅田川」

南溟【書画】春木秀熙、字は敬一、後名を輯、字を子輯と改む南溟又耕雲漁者と號す通稱卯之助南湖の男なり山水花鳥に妙を得當時大に賞讃せらる明治十一年十二月十一日歿す年八十四

南華【書】鱗、字は南華、通稱扇之助、讀書齋、又た煙波釣徒と號す南溟の男なり慶應二年歿す

南岳【書画】渡邊巖、字は維石、南岳と號す圓山應擧の門人、人物花鳥を能くす後光琳の畫風を慕へり故に純然たる圓山風と異なり文化十年正月四日歿す年四十七

南陽【書】吉田寛、字は栗卿、節齋と號す阿波の人、楷行草共に巧みにして又墨竹に妙なり文久二年八月歿す年七十八

南溪【書画】西村正、字は三彊、山水を能くせり

南山【書】中川由儀、字は茂文、不蹇齋と號す書家なり文政八年八月九日歿す年七十

南谷【書画】名は照什、八幻筆堂、又た海印堂と號す洛西六孫王大通寺の中興たり書を能くす書は一家を成し頗る風致あり關東に往復すること數十回是れ皆六孫王廟を再建せんと欲してなりといふ元祿中歿す

南海【書画】祇園氏、初名は正卿、後ち瑜と改む一名は貢、字は白玉、又た履昌、斌汝、琨の數字あり南海は其の號又た蓬萊鐵冠道人箕踞人の號あり俗稱與一其の居る所に題して湘雲と曰ふ其の丙方の一亭を觀雷と名づく紀藩の人家本と醫を業とす南海天資雋逸にして文藻あり幼き時父に隨ひて江都に來り年初て十四木下順菴に學ぶ勉勵碎苦尤も詩作に長ず年十七春分の日自から其の才を試みるに午時より子刻に至るまで七言律詩一百篇を賦す人或は疑ひて宿構とす乃ち是の年秋分の日客を延き席間題を設け飲酒談笑

而して草を起すこと泉水の流出するが如く日中より夜半に至るまで百首復た成る一句も前詩を踏襲せず衆皆な嘆賞す順菴亦た驚異以て神となす是に於て南海の名天下に聞ゆ人稱して方今の賈生とす嘗つて事に坐して海上に謫せらるゝこと數年正德辛卯召還せられて朝鮮聘使に江都に會見す乃ち祿を增して儒職に復す南海松浦禎卿と年齡相等し禎卿詩才あり人二人を稱して木門の二妙と云ふ南海聲價益々重し白石、梁田蛻嵓と相伯仲す遂に世呼びて三大家と云ふ是の時に當り物茂卿の徒出でゝ海內明詩を宗とす摸擬剽竊靡然風を成す南海晚年心深く之れを厭ひ嘗つて戲れに文を作る名けて詩盜判と曰ふ又た兼ねて書畫に工みなり嘗つて淸人蕭天木の畫法を學びて大に能くす殊に墨竹を畫くに名あり書畫共に風韻雅致ありて所謂文人畫と稱すべきものなり柳里恭池大雅堂並に嘗つて畫法を問へり寶曆元年九月八日歿す年七十五

南洲【畫】西鄕南洲舊と吉之助と稱す、南洲は其號、詩文に長じ書に巧みなり明治中興の大業は南洲與つて大に力あり朝廷之れを賞し正三位に敍し陸軍大將に任ず明治六年十月征韓の論議合はず辭職して故鄕鹿兒島に歸る遂に子弟の爲めに擁せられて亂を作し軍敗れて城山に斃る明治十年九月二十四日年五十三

南豐【畫】藤南豐、名は褧、字は公錦、別に扶搖と號す毛利侯の庶子なり儒家にして書を能くす天明六年七月歿す年五十七

南岳【畫】小西氏、名は良行、字は士明、通稱平三大阪の人畫法を父南嶺に學んで能くす明治元年歿す

南溪【畫】藤田氏、京都の人、畫を建部孟喬に學ぶ天保年中

南溪【畫】須賀氏、松村景文に學ぶ文政年中

南岳【畫】入間川氏安政年中の人

南岳【畫】三輪氏、英念と稱す天保年中

南豐【畫】小田氏、長州萩の人、初め岡本豐彥の門に入り後ち南宗の畫風に變ず天保年中

南淵【畫】石南淵は豐前小倉の人、畫を岡本豐彥に學ぶ天保年中

南江【畫】八尾半老、南江又た洛堂と號す文政年中

南居【畫】出雲路善與と稱す羽後の人、嘉永年中

南華【畫】春木氏、南華は南溟の子、畫法を父に受く慶應二年六月歿す時に年四十八

南谷【畫】柴田氏、出羽橫手の人南宗の畫家なり安政年中

南谷【畫】山本氏、字は子方長六と稱す南宗畫家なり文政年中

南涯【畫】濱口氏、通稱は路輔、安政年中

南涯 谷合氏、通稱彌八、字は子卿、武藏八王子の人、學を好み詩を能くす好みて墨畫を作る明治二年歿す年四十八

南陵【畫】朝倉氏、通稱湖內周防の人、天保年中

南強【畫】中野氏筑後の人、安政年中

南荊【畫】原氏、京都の人なり安政年中

南峰【畫】圖師南峯は京都の人、文化年中

南甫【畫】岡部氏、日向の人、天保年中

南坡【畫】若松氏、通稱則文、日向の人、弘化年中

南嶠【畫】紀伊の人、畫を能くす池大雅と同時代の人、即ち明和頃

南

龍齋 柳文朝の號 **南窓翁** 僧鶴亭の別號 **南籟** 關世美の號

春澤【畫】名は宗晃、大德二百一世元祿七年五月寂す年八十二

春屋【畫】名は宗園一默子、自然子と號す慶長十六年二月寂す朗源大眞禪師

春朴【畫】大岡氏、名は愛翼、春朴は其號（朴一にトに作る）大阪の人、師なくして狩野の畫風を學び法眼に叙せられ名を世に得たり嘗つて明人の畫を刻し彩色して世に公けにす名けて明朝紫硯と云ふ世人因て明畫の尚ぶべきを知る著はす所畫本手鑑外數種あり寶曆十三年六月十九日歿す年八十四

春政【畫】京師の人、鹽見小兵衛の父なりと云ふ蒔繪の名手にして其の名高し

春汐齋【畫】坂本氏、大岡春朴の門人なり安永年中

春水【畫】賴氏、名は惟寬、字は千秋、一の字は伯栗、春水は其の號、又霞崖、拙巢、和亭の號あり、彌太郎と稱す藝州竹原の人父を亭翁と云ふ春水幼にして學を好む郡村良師に乏し而れ共資性敏悟能く詩を賦す年十七京師に游びて諸名士の間に周旋す既に歸りて又た大阪に至り遂に留り徒に授けて生を爲す時に年十九是時に當りて片山孝秩、葛子琴、岡公翼等の諸名士詩社を府下に結び號して混沌社と曰ふ春水之れに入り詩豪を以て稱せらる既にして洛閩の書を得て之れを悅び乃ち奮然其の故と習ふ所を棄て尾藤二洲、古賀精里と相與に程朱の學を講究す又中井竹山兄弟、西山拙齋、菅茶山と互に相往來して益々切瑳業を攻む天明辛丑の冬本藩辟して儒員とす是の時藝藩初めて學校を建つ春水爲めに學制を定む癸卯の秋江都に赴きて世子の伴讀となる訓廸方を得世子封を襲ぐに及びて東覲往來必ず從ふ春水初め仕へし時俸三十口なり後累增して三百石に至る文化十三年二月十九日歿す年七十一

春水【畫】狩野氏、春笑の子なり兼之丞と稱す春水は其の號、別に牧齋と號す畫法を父に學ぶ元祿年中

春水【畫】馬場政房、通稱條助、青池堂と號す江戸の畫家なり寬延元年八月十四日歿す享年八十六

春水【畫】宮川氏、藤四郎と稱す長春の男なり父の業を受けて大和繪を善くす後ち故ありて勝川氏と改む世に勝川と唱ふる錦畫は此人より始まる元文年中

春風【畫】賴氏、名は惟强、字は千齡、春風は其の號、春水の弟、杏坪の兄也父亭翁の命を以て醫を其鄕安藝竹原に業とす兼ねて詩及び書を能くす終身隱居して仕へず

春敎 伊藤若冲の初名

春夢 青山佩絃齋の別號

春甫【畫】江村氏、畫法を鶴澤探鯨に學びて能手と稱す平安の人

春町【畫】倉橋氏、名は格、壽平と稱す、元松平丹波守の臣なり戲號を酒上不埒、又た壽人と云ふ戀川春町は戲著小說の號なり鳥山春章に就いて浮世繪を學び之を能くす秘戲圖に巧み也寬政元年七月七日歿す年四十六

春成【畫】北川氏、明溪と號す京師の畫家なり諸流に涉りて最も模寫に長ず著はす所扁額軌範あり世に行はる

春圃【畫】浦上氏、春琴の義子なり家法を守りて畫を能

く

春菴【畫】渡邊寛、春菴と號す長崎の人なり書を善くす

春齋【畫】森永陽春、大阪の人、畫を櫛橋榮春齋に學び狩野派の畫に巧み也文化五年歿す

春沙【畫】女史名は春子、字は沙々、春沙と號す立原杏所の長女畫法を父及び渡邊華山に學びて能くす筆意秀潤にして時人に稱せらる

春休【畫】雪村の門人にして畫を善くし世に名あり

春陽齋【畫】春陽齋春子は大坂の人、畫を能くせり萬延年中

春潮【畫】通稱吉左衛門、名は春潮、後ち俊朝に改め吉左堂と號す錦畫を畫きて筆意鳥居清長に似たり草雙紙版下を畫く後ち浮世繪を廢す文政年間

春江【畫】辭啓に學び又た狩野元信の風を兼ね山水人物を善くす

春譽【畫】阿波の人、京師に出で丶畫を圓山應擧に學ぶ最も花鳥を善くす

春樵【畫】梅辻氏、名は希聲、字は廷調、春樵は其號、江州坂本日枝神社の祠官なり從四位下に叙せらる晩に京都に隱居して文雅風流を以て自ら娛しむ安政五年歿す

春信【畫】鈴木氏、又兵衛と稱す、湖龍齋又た長榮軒と號す、西村重長に畫を學ぶ、明和の初年吾妻錦繪を畫く是れ錦繪の始なり明和七年六月十五日歿す年五十三

春琴【畫】浦上氏、名は選、字は伯擧、一字は十千、春琴は其の號、又た睡菴、文鏡亭二卿の號あり備前の人、玉堂の子なり京師に住す初め畫を父に學び後ち元明の古跡を修めて遂に一家を成す設色の山水花鳥を善くす又た書を能くし大に世に稱揚せらる弘化三年五月二十日歿す年六十八

春朗葛飾北齋の初號

春川【畫】大岡甫政、春朴の養子なり狩野の畫風を能くす後ち法眼に叙せらる大坂の人

春朝齋【畫】竹原春朝齋は本氏は松本、大坂の人、春汐齋の門人にして善く畫く五畿內及び諸國の名所畫を多く出せり又欠留といへる鳥羽畫の狂畫あり安永年間の人

春泉齋【畫】竹原氏、春朝齋の男、父に就いて畫法を學び名所圖會等を畫けり

春嶽【畫】鼎氏、名は元、字は世寶、春嶽と號す、大坂の人なり初め福原五岳に學び後牧藏家の秘冊を探り戸を閉ぢて之を楊寫し精盡き髓枯るゝと雖も倦を知らず田能村竹田見て以て篤古の士となす畫名一時に高し文化八年歿す年四十六

春齋【畫】林氏、名は恕、一の名は春勝、字は子林、後ち之道と改む、春齋は其の號、又鵞峯と號す別に向陽軒、葵軒、竹牖、爬背子、晞顏齋、也魯齋、格物菴、温故知新齋、碩雪眼月菴、傍花隨柳堂、辛夷塢、仲林、南牕、恒宇、南墩、櫻峯、碩果等の稱號あり羅山の第三子母は荒川氏元和戊午を以て春齋を京師に生む天性至孝にして温柔貞固文詞は那波活所を師とし松永貞德に學ぶ稍々長ずるに及びて博學强記經史子集悉く之れを究めざるなし且つ本朝の歷史に通じ諸家の本文を諳んじ毎ねに問ふ者あれば應對流るゝが如し寬永甲戌父に從ひて東來し江府に住居す時に年十七其の年將軍家光に謁し其の後或は異國の書を草し或ひは政事を咨詢せらる而して能く其の事に堪

ふ癸未の歳命に依りて寛永系圖三百卷を蒐集す正保甲申俸支宅地を賜ふ明年食祿を加倍す萬治中官金を賜ひて珍籍を藏蓄す寛文辛丑法印に叙せらる癸卯の冬五經を講了し私考を作りて蘊奥を開示す事台聽に達し弘文院學士の號を賜ふ且つ心を四書に覃し程朱を篤信して國字解を作る其の餘編輯の書甚だ多し庚戌の歳國史を編す總べて三百十卷官命じて名を本朝通鑑と賜ひ食祿を加增し且つ俸支を賜ひて諸生を教育せしむ又た官材を賜ひて學寮を造る來り學ぶ者日々に多し闔國推して儒宗と爲す延寶甲寅命ありて再び忍岡の聖堂を修し年々祭祀して絕えず禮典漸く備はり貴介侯伯國老執政來りて祭儀を觀る暇日には著述を愛し韓使の至る每とに贈酬頻繁凡そ詩は一萬首文は二千編家に存す八年病みて歿す私諡して文穆といふ年六十三

春東　【畫】林氏、名は勝澄、一の名は憲、字は章卿、幼名又助、後春東、晉軒、洗林の三號あり春德の男弟二林家と稱す萬治四年父の業を繼ぎ本朝通鑑編輯の事に預る延寶四年十一月九日歿す年二十三

春德　【畫】林氏、初めの名は守勝、字は子文、右近と稱す後ち名を靖、字を彥復と改む、春德は其の號、又函三子考槃窩、讀耕齋、剛訥子、欽哉亭、靜廬、甚齋等の號あり後ち專ら讀耕齋の號を用ふ羅山の第四子春齋の弟なり家庭に學びて博學强記當時に名あり正保三年始めて將軍家光に謁し宅地並に年俸二百苞を賜ひ祝髮して春德と號し第二の林家と稱す明曆二年法眼に叙せられ三年食祿を加賜せられ前に通して五百石となす萬治四年三月十二日歿す時に年三十八私諡して貞毅先生と云ふ

春章　【畫】勝川春章、初め勝宮川と稱す通稱祐助、旭朗井、又た酉爾と號す李林春亭と書けるもあり書畫を善くす明和の頃俳優の似顏を畫き大に世に行はる又嵩谷に學びて一蝶風の草書に長ぜり寛政四年十二月八日歿す年六十七

春好　【畫】勝川氏、春章の高弟なり俳優肖像畫及び風俗畫を畫く畫印春章と同じく壺形の印を押す世これを小壺といふ寛政年間の名手也葛飾北齋も亦た其筆力を懼れたりといふ惜い哉中年中風を患ひて畫く能はざるに至る

春英　【畫】勝川氏、九德齋と號す江戶の人、勝川春章の門に入りて浮世繪を學び傍ら狩野、土佐に出入して竟に一家の風を作す寛政享保年間俳優似顏繪其他繪本錦繪を多く畫き又一種の狂畫を作りて世に九德風と稱せらる文政二年七月二十六日歿す年五十八

春亭　【畫】勝川氏、本と山口氏、通稱長十郎、松高齋、又勝吸壺と號す江戶の人、京傳、三馬等の雙紙を畫き又風俗美人畫、武者繪、俳優似顏畫を畫く壯年にして病痾の爲め業を廢し其の歿年等を知るに由なし

春扇　【畫】勝川氏、通稱清次郎、初め等琳の門人となり春琳と云ふ後春英に學びて春扇と改む專ら畫草紙を畫く世に二世春好と稱す陶器の燒附畫即ち赤畫を以て生業とす文政年中の人なり

春湖　【畫】狩野玄珍、初め名は岡知、春湖は其號、畫法を春雪に學ぶ或は曰ふ春笑の門人なりと

春雪　【畫】狩野信之、隼人と稱す、春雪は其號、元俊の

……男、畫風能く父の筆格を受く元祿四年三月八日歿す年七十三

春賀【書】狩野氏、卓信、又理信と云ふ春賀は其號、春雪に就いて書法を學ぶ

春浦【書】名は宗熈、首陽と號す大德四十世明應五年正月寂す年八十八正續大宗禪師を賜はる

春洞【書】西川元讓、字は子謙、別に如瓶人、大夢道人、茄古山民等の數號あり肥前唐津藩士西川元琳の男なり弘化四年正月江戸に生る甫めて六歳主命に依り楷書千字文を書して台覽に供す當時神童と稱せらる維新前尊攘を唱へ國事に盡瘁す明治初年大藏省に出仕せしが幾程もなく辭職して專ら文墨を樂む門人多し

春笑【書】狩野氏、名は亮信、春雪の二男、兄榮嗣子なきを以て其家を繼ぐ求馬と稱し春笑と號す正德五年十月歿す年七十一

春笑【書】狩野氏、意信の子天保年中

春信 狩野洞益の名

春信【書】狩野氏、內膳重良の子、寛文年中

春信 池田涼珉の名

春信【書】堀川氏、通稱斧吉、江戸の人、堤秋榮に學ぶ天保年中

春信 司馬江漢の初名

春信【書】杉浦氏、狩野派の畫家にして加州前田侯に仕ふ天保年中

春道【書】村田氏、江戸の人、豪商たり縣居眞淵の東武に出づるや我居宅に招して自身を始め子春鄕、春海の兄弟を學ばしむ歌文を能くす明和六年七月二十一日歿す

春鄕【書】春道の男なり眞淵に學び隱遁して專ら古學を修む明和五年九月十八日歿す年三十

春海【書】村田春道の子、春鄕の弟なり幼より國學歌文を好み縣居眞淵に學び又漢學を服部仲英又た京師に出でゝ皆川淇園に問ふ後ち一家を成し門人甚だ多く名聲海內に震ふ文化八年二月十三日歿す年六十六、通稱は半四郞、字は士觀、織錦齋又た琴後翁と稱す

春青【書】勝川春英の門人、文政年中

春玉【書】勝川春英の門人、文政年中

春紅【書】勝川春英の門人、文政年中

春陽【書】勝川春英の門人文政年中

春和【書】勝川春英の門人、文政年中

春久【書】勝川春英の門人、文政年中

春洞【書】通稱を政藏と云ふ勝川春英の門人にして左筆を能くす世に大政と稱す文政年中

春晃【書】小島氏、加賀の人、安政年中

春晨【書】守山吉通と稱す阿波の人、明治年中

春耕【書】西田氏、通稱俊藏江戸の人、南宗畫家なり

春月 釋雪林の號

春江【書】勝川春章の門人、文化年中

春江【書】小田切氏、尾張名古屋の人、書を森高雅に學ぶ明治年中

春育 釋周文の號

春睡 釋王舟の號

春休【書】奥田氏、中井藍江の門人、天保年中

春悅【書】狩野友益の二男なり父に先ちて夭す

春山【書】勝川春山は春章の門人、寛政年中

春山【書】古田氏、岡本豐彥の門人、天保年中

春谷【書】河北氏、京都の人、山水花卉を能くす安政年中

春塘 青木夙夜の別號

春隣【畫】大岡春卜の門人、安永年中 **春二**【畫】林春二は大岡春川の門人、文化年中 **春昌**【畫】大岡春昌は嘯川の子書法を父に學ぶ安永年中 **春日**【畫】森崎氏通稱清九郎阿波の人、大岡春川に畫を學ぶ文政年中 **春園**【畫】泉氏、京都の人、安政年中 **春園** 釋智圓の號 **春芽**【畫】江澤氏、大岡春朴の門人、安永年中 **春洋**【畫】川村氏、四條派の畫家なり安政年中 **春濤**【畫】松前氏、嘉永年中の人 **春童**【畫】柳文朝の門人にして浮世繪を能くす天保年中 **春波**【畫】田中氏、通稱朔之助、大坂の人、南宗派の畫家なり嘉永年中 **春牛**【畫】石丸氏、通稱伊輔筑前の人、天保年中 **春德**【畫】勝川春英の門人なり通稱千太郎、江戸十軒店に住す專ら武者繪を描く文政年中 **春嶺**【畫】東氏、柳文朝の門人、文政年中 **春耕齋**【畫】大岡春耕齋は大坂の人なり畫を大岡春卜に學ぶ安永年中 **春江菴**【畫】大岡春卜の門人、安永年中 **春鷗齋** 能阿彌の別號 **春甫齋**【畫】大岡春卜の門人、安永年中 **春江亭** 小栗成美の號 **春窓翁** 英一蜂の號 **春波樓** 司馬江漢の別號 **春星** 中井敬義の別號 **春山**【畫】小一氏、名は朝弘、字は士遠、下野眞岡の人弱冠にして會澤正志齋の門に入り經史を研鑽す後ち藤森弘庵に學ぶ弘庵其才を愛し賞讃措かず幕府の大老井伊直弼專横を極め終に刺客の爲めに斃さる而して安藤對馬直弼の遺意を承け益々苛政を行ふ春山之を憤慨し竊に之を害せんことを謀る既にして同盟の士等對馬を江戸坂下門外に要擊するや春山亦た捕はれて獄に繫る時に文久二年正月也八月に至りて赦さる元治元年水戸藩士藤田信等の兵を筑波山に擧ぐるや春山亦與かる因りて囚はれて佃島に竄せらる明治中興徴して史官試補となし二年八月大宮縣權大參事に轉じ後ち司法、大藏の二省に歷任す明治二十四年一月病歿す年六十五

香雪【畫】山内晉、字は希逸、通稱熊之助、香雪と號す會津の人、幼より臨池の技を好み長ずるに及びて技益々進み世に稱せらる性梅花を愛し嘗つて晉唐以下梅を詠ずる詩數千百首を集めて十五卷となしこれを梅花集と名づく又た著はす所名書手簡二十卷あり世に行はる萬延元年二月三日歿す年六十二 **香雪**【畫】田中氏、通稱主藏南宋畫家なり文政年中 **香草堂** 田崎草雲の別號 **香國**【畫】名は道蓮釋氏なり **香夢**【畫】尾張の人にして江戸に住す勾臺嶺の妻なり白描の美人を能くす **香村**【畫】坂本氏、名は直大、字は櫻宇、香村は其號、通稱浩然、別に浩雪、萱草林處永齋等の別號あり紀州藩の人、醫にして物產學家なり傍ら畫を能くし櫻に巧みなり嘉永六年八月二十六日歿す年五十四 **香湖**【畫】丸毛氏、通稱哲之助南宋畫家なり文政年中 **香石**【畫】增田氏、

通稱節平、豐前の人、南宋書家なり弘化年中

香峰【書】鈴木氏、江戸の人、書を大岡雲峰に學ぶ筆力超脱世に名あり明治十八年歿す

香案 立原杏所の別號

香蝶樓 三世豐國の號

香溪【書】山内氏、名は昇、破研齋の別號あり天保十四年二月生る父香雪に書法を學びて能くす

香雨【書】木村氏、石癲、小朱石、芝石山房の別號あり舊仙臺藩士天保十二年生る南宗書家なり

香軒 松井半平の別號

省翁【書】加藤氏、甘谷山人の子、書法を父に學びて能くし殊に人物山水花鳥に長ず文政年中

省亭【書】渡邊義復、通稱良助、もと吉川氏なり出で、渡邊光枝の跡を繼ぐ依つて其の氏を冒す嘉永四年十二月二十七日生る書を菊池容齋に學び人物に長ず

茅田【書】坂正臣、字は政介、名古屋の人、安政二年三月生る少きとき醫を學ぶ明治五年醫を廢し三河國寶飯郡一の宮村砥鹿神社權禰宜となる六年東京に出て英學を修む後鎌倉宮及神宮に奉職す十五年東京に出で宮内省御歌所出仕華族女學校等其他に敎授す

茅生庵 楫取魚彥の號

修理【書】書を善くす鎌倉永福寺の扉等に書けりといふ

畏堂 篠崎小竹の別號

畏堂【書】臼田氏、名は可久、畏齋は其號、通稱五郎左衛門本と坂口氏、故ありて臼田氏に改む備前の人、京都銅駄坊に僑居す元錄三年庚午十月七日病て歿す年四十六

畊逸【書】竹内氏、藤堂凌雲に學ぶ明治二十四年歿す年五十四

括囊 増山雪齋の別號

待價堂 池大雅の別號

飛鸞 曾我蕭白の別號

咲翁 釋隱元の號

咲翁 釋大鵬の號

珂雪堂 桑山玉洲の別號

枯髏子 釋江雪の別號

眉山【書】葦原氏、阿波の人、書法を長崎の僧鐵翁に學び山水花卉に巧み也明治二十年八月歿す年五十

眉間 高田敬輔の別號

則房 別所雪山の名

胤信【書】狩野氏、探葉の子書を父に學ぶ舊和年中

約車 鶴澤探龍の別號

約山 尾藤二洲の別號

昂齋【畫】小田氏、通稱周藏書名あり安政年中

枳園【畫】高階氏、名は經宣、字は子順、枳園と號す從四位上安藝守に叙任す御醫たり其業昌んに行はれて遠路を勞とせずして診を請ふもの門に滿つ當時福井丹洲と雁行して世に稱せらる後ち洛北に別墅を設けて隱遁す傍ら書を善くす弘化元年十二月歿す年七十一

柿園 大橋長廣の號

郁洲 篠崎三島の別號

洗心洞 大鹽中齋の別號

穿石 澤井志津磨の號

持軒【畫】五井氏、名は主任、加助と稱す曾祖某松永氏の亂を避けて大和に徙り五井戸に居り因て氏とす成童に及びて京師に遊び初め醫を白井元升、中島長安に學ぶ嘗て一婦人を療し方劑を誤りて其死を致す是に於て慨然業を改めて儒となる一時の名儒伊藤仁齋、同東涯、中村惕齋、貝原益軒、同耻軒、三輪執齋、松下見林等と文字の交りを爲す京に在ること十餘年大阪に歸る時に府下の人士學を講ずるもの罕なり持軒訓誘多年人々始めて學に嚮ふを知る持軒資性淳厚邊幅を修めず人の過を言はず郡山侯本多忠常其名を聞きて之を聘致す其風貌の古朴なるを見て歎賞之を久うす乃ち請ひて論語を講ぜしむ詞吐朗暢、辯論明爽侯大に喜ぶ持軒初め程朱の學を崇む晩に稍々見る所あり然れども其徒に授くるに辯駁を務めず略大旨を述ぶるのみ又た日本紀に精し之を講ずる毫も迂怪不經の説を雜へず傍ら和歌に長ず嘗て下河邊長流に就いて萬葉集古今集等の要義を聞けり享保六年閏七月十八日歿す年八十一、二子あり長を純實と云ふ武を以て江都に仕ふ次を純禎と云ふ儒を以て著はる

十畫

祐宣【畫】字は長善、俗姓は深澤氏、下野西方村の人、弱冠にして居村正安寺の住職に就いて得度し後諸國を游歷す常に畫事を好み墨畫を能くす雪舟の眞法を學びて能く其體を得たり後京都眞言宗知積院の沙門たり

祐尊【畫】大貳の公と號す或はいふ南都繪師法眼至徳年中の人なりと姓氏年月詳ならず

祐高【畫】南都の人也大藏少輔行忠繪師釆女正中務少輔久行大進法眼とともに弘法大師の行狀を圖す應安七年より康曆元年に至りて成を告ぐ

祐清 狩野正信の號なり清或は勢に作れるあり

祐清 狩野英信の號

祐清 狩野邦信の號

祐信【畫】西川氏、初名

は祐助、右京と稱す、自得齋、又た文華堂の號あり狩野永納に就いて畫を學び後變じて浮世繪師となる描けるもの艶麗賞すべし甞て春畫を作りて罪を蒙れり著す所の畫本頗る多し寶暦元年歿す年七十四

祐尹〔畫〕通稱は祐藏、得祐齋と號す、祐信の男、父に學びて畫を能くす板刻の畫本數種世に流布せり

祐爲〔畫〕梨木氏、畫法土佐家より出で丶一格を立つ山城下鴨の神職なり

祐清の女〔畫〕狩野氏、兄之信に就いて畫を學び出藍の譽あり後彫刻師後藤乘眞の妻となり男光乘を生む下畫に巧也後藤氏その下畫に狩野畫を用ゐたるは之に胚胎すと云ふ

祐常〔畫〕實は二條綱平の子にして圓滿院門跡入道覺尊の法嗣たり畫法を近衛家熙に學ぶ文化年中

祐天〔畫〕初め芝増上寺に住し後ち目黒に轉任す最も不動像に巧みなり享保三年寂す年八十二

祐乘〔畫〕後藤氏、通稱四郎兵衛、金工藤家の祖たり畫法を狩野正信に學ぶ永正九年五月歿す年七十三

祐益〔畫〕狩野祐益は伯圓方信の子なり家法を守て畫を能くす寛政年中

祐周〔畫〕雪村の畫法を學で山水を能くす元龜年間の人

祐軒 狩野厚信の號

祐菴〔畫〕狩野氏、元俊の二男なり畫を父に學ぶ明暦年中

祐雪 狩野宗信の號

眠龍〔畫〕市川適、字は君珪、近江の人平安に住す元明の古跡を模して能く其法を得

眠

山〔畫〕畫を紫石に學びて能くす安藝の人

純齋〔畫〕清水氏、芳野金陵の外弟なり幼にして穎悟龜田綾瀨に學ぶ其の書法雄健頗る其の氣象と類す木母寺及び白鬚祠中に碑あり皆少時の筆に成れりと云ふ又吏務に長ず文久年中將軍家茂の京師に朝するや副監察となる當時道途の警備朝參の儀仗は大概其の定むる所と云ふ

凌岱〔畫〕建部綾足、名は孟喬、凌岱は其の號、初め凉岱と號す又寒葉齋、吸露菴、長江等の別號あり南部の人亡命して平安に之き東福寺に入りて僧となる後還俗して江戸に移る畫を熊斐に學び後一家をなす夙に出藍の稱あり俳歌を善くし專ら伊勢風を唱ふ晩年加茂眞淵に從ひて國學を攻む又片歌を創めて之を唱ふ式縉紳家より片歌道守の名を賜はる然れども和するものなくして止む安永三年三月十八日歿す年五十六

凌雲〔畫〕藤堂良驥、字は千里梅華の男畫に巧なり江戸の人

凌寒齋 依田竹谷の別號

宮鑑〔畫〕明浦氏、伊勢の畫家なり墨梅を畫きて甚だ清奇あり遠く補之の風を學びて尋常畫家の及ぶ所にあらず

宮內卿〔畫〕鳥羽天皇の宮女なり和歌を以て其名高し又畫を巧にし巨勢派の風ありといふ元暦中の人

流宣【畫】石川俊之、通稱伊左衛門、江戸淺草に住す菱川師宣の門人なり描けるものに大和耕作書抄、江戸圖、江戸通鑑綱目等あり正德年間の人

索道【畫】堀守保、索道と號す書法を鶴澤探山に學ぶ山水花鳥に巧みなり後ち法眼に叙せらる

索隱子 山田芳洲の別號

浪松【畫】畫風牧溪を學びて能くし好みて墨畫の瓜茄子等を筆す

茘閣【畫】墨色の鍾馗を畫く筆力妙絶なるものあり

師重【畫】古山氏、通稱太郎兵衛、菱川師宣に學びて大和繪を能くす元祿年間の人

師政【畫】古山氏、師重の男、文志と稱す、師宣に學ぶ然れども此の人より菱川畫風を失ふ享保年間の人江戸米澤町に住す

師宣【畫】菱川氏、友竹と號す、通稱は吉兵衛、房州保田町在の菱川吉左衛門の男なり世々縫箔師を業とす若年の頃江戸に移住す初め縫箔の上繪の畫より初めて土佐の畫風を好み又岩佐又兵衛の畫を慕ひ又兵衛に續きて繪の巧手と稱せらる因りて畫名に日本繪菱川師宣と記す或は謂ふ當時狩野常信英一蝶等世に盛んなりしかば師宣も之れに薫染したりと見え自から狩野派の筆意ありと英一蝶が四季繪跋に房州の菱川師宣といふ者江府に出で梓にをこしこぞつて風流の目を悦ばしむ此の道予が學ぶ所にあらずといへども若かりし時云々岩佐菱川が上にたゝん事を思ひてはしなき浮名のねざし殘りてはづかしの森のしげき言艸ともなれりと云々正德年間歿す年七十

師香【畫】石山氏、畫を狩野永納に學び戯畫に長ず又金屬木材の小彫物に工なり從二位中納言に任ぜらる享保十九年十月十三日歿す年六十六

師永【畫】菱川氏、通稱造酒之丞、師宣の二男なり特に彩色に妙なり

師房【畫】菱川氏、通稱は吉兵衛師宣の長男なり畫法を父に學びて能くす

師道【書】屋代友達、字は師道龍岡と號す、通稱は彌左衛門、江戸の人なり廣澤に學びて書を能くし又た篆刻に巧みなり天明六年八月廿七日歿す年七十七

師足【畫】一に諸垂に作る、書を以て時に名あり樂府の屏風を畫けること大鏡に載す

師龍 曾我蕭白の一名

師長【畫】菱川師長作兵衛と稱す師宣の門人、元祿年中

師古 中井藍江の別號

師賢室【畫】從一位右大臣藤原家忠の女にして藤原師賢に嫁す容姿婉麗にして畫圖及花結の技を善くし兼ねて詩歌管絃の道に通せり建武年中

師練禪師 僧虎關の稱

庭秋【畫】下野の人なり雪舟の畫法を慕ひて人物及び松竹を畫けり

庭柏子 酒井抱一の別號なり其門人鈴木其一も亦た此號を用ふ

益繼【畫】姓名詳ならず嘗て十二支の動物、人間の事業を作るの圖を畫き其後に書して曰く寳德三年八月益繼筆と倭畫の法を守れり **益之**【畫】佐藤氏、字は士龜、水石と號す、浪花の人、人物を畫くに巧みなり文化年間 **益宗**【畫】呂勢氏第九代の人なり、宗義の子、畫を以て家を繼ぐ出羽守に任ぜらる其畫風唐畫ならむといふものなり永久年中の人 **益信** 狩野洞雲の名 **益信**【畫】田中氏、柳文朝の門人にして浮世繪を能くす文政年中 **益尙** 近藤洞蕭の號 **益壯** 大原重德の號 **益翁** 吉川君溪の別號 **益城** 松崎慊堂の別號

恭齋【畫】市川氏、名は三千、三千太郎と稱し、桃翁と號す、米菴の男なり書法を父に受く天保四年六月廿七日歿す年三十八 **恭信**【畫】狩野氏、養川の二男、白川と號す世に名あり文化年中

恭默齋 關思恭の號

晃彩【畫】御手氏、下總佐倉の人、畫を谷文晁に學ぶ文政年中 **晃敬** 淺野西湖の名

晃有輝【畫】淺岡氏、名は豐興、字は詩叔江戸の畫家文化八年七月四日歿す

茶山【畫】菅氏、名は晋師、字は禮卿、太沖と稱す備後神邊の人、家世々農商を業とす茶山學を好み少き時備中西山拙齋と同じく京師に入り那波魯堂に従ひて洛閩の學を受け佐々木良齋、中山子幹及び浪華中井竹山、葛蠡菴、篠崎安道等と交遊し已に歸りて鄕里に教授す後其宅の東北に就て一塾を築き黄葉山に對するを以て黄葉夕陽村舍と號す西山拙齋同門の故を以て往來尤も親し拙齋歿して後ち山陽南海諸國の子弟率ね茶山に就て學ぶ詩名尤も高し福山侯初め其名を聞かす後ち江都に在り林祭酒述齋を見る祭酒話次詩を論じて曰く方今海内の詩は菅晋卿の右に出づるものなしと侯之を聞き初めて其采邑の人たるを知る是に於て之を擢用せんと欲す茶山病を以て辭す乃ち俸五口を給して優禮す時に寛政四年なり享和元年侯命じて儒員に準じ時々召對せしむ晩年生徒益々進み塾充實して容るゝ能はざるに至る乃ち藩に請ひ登して鄕校となし名けて廉塾といふ鄙僻に居ると雖も名一時に重し嘗て東遊するや諸侯爭ひて延見す又た昌平黌の儒官柴野尾藤古賀の三博士より諸藩の儒雅に至る迄交りを結はざるなし平生安藝の賴春水兄弟と尤も善し毎月音信絶えず文政六年秋大目付に進む之より先前後三度俸を加へて三十口となる十年宿病を以て終に起たず時に八月十三日なり年八十、私謚して文恭公と云ふ

夏嶽【畫】牧世儀、字は升菴、又周平、通稱新兵衞新興、蒙所に従ひて書を學び後ち新興氏を冒せり **夏桂**【畫】祥啓に學びて山水人物及び花鳥を能くせり

殊牧【畫】殊牧一に珠牧に作る、北條氏直の號なり畫を狩野元信に學ぶ弟玉樂とゝもに北條氏政

に仕へて書事を勤む早世せしを以て遺蹟の後世に傳はれるものなし

浚明【書】【畫】五十嵐浚明、姓は呉、字は方德（德一に篤に作る）弦峯又穆翁と號す浚明は其の名越後新潟の人故ありて佐野氏を冒す浚明幼より學を好み壯年京に入り山崎闇齋の門に從て儒學を學ぶ又宇士新等と遊ぶ詩を善くするを以て稱せらる又書を嗜しむ江戸に來りて狩野良信に學ぶ後ち宋人梁楷及び張平山等の遺跡を追慕し遂に一家をなす山水人物草花共に之れを能くす最も設色に長ず嘗つて一樓を建てゝ畫を學ぶの所とす而して其樓を下らざること四十日兼ねて書を善くす故に其名海内に振ふ平生財を輕んじ己れを棄てゝ人の急を救ふ寶暦中州大に饑ゆ乃ち家貲を傾けて賑濟す嚢篋既に竭く更らに傳寳書畫古器を鬻ぎて之に繼ぐ爲めに全活するもの甚だ多し是時郷の有司凶荒を濟ふの意なし乃ち府に至りて百姓の爲めに之を請ふ有司愧謝大に廩を發す天明元年八月十日歿す年八十二、三子あり皆書を學ぶ長を子謹と云ひ其畫父に似たり又書を能くす仲を元誠と云ふ人物に長ず叔を元敬と曰ふ詩書畫共に美なり浚明平生飲を嗜まず人或は之を勸めて曰く酒は愁を掃ふの帚なりと浚明曰く予幸に太平に生れ六經の敎に薫沐し詩書及び畫に優游す其樂餘りあり未だ曾て愁を知らず故に帚を用ゐる所なしと

珠長【畫】長谷川氏、筆法古風を能くし墨畫の山水に巧なり好みて戯墨を作す其渡唐天神の像の如きは家法を脱し能く雪舟の筆意を得たりといふ元和年間の人

珠賢【畫】畫風雪溪に似たり而して筆意は雪舟より出づ

珠雀齋【畫】浮世繪師なり殊に俳優の肖像を能くす年代詳ならず

珠光菴【畫】大和奈良光明寺の僧なり茶技に達し兼て畫法を能阿彌に學ぶ足利義政珠光菴の號を授くと云ふ珠光一に周光に作る

荊石【畫】魚住氏、名は毅、字は子剛、越後の人にして大坂に住せり文人畫を能くす安政年中

荊溪【畫】柴田義董の門人、文政年中

浩然【畫】名は良雄、薩摩の人、晩年野州に住す其昌を慕ひて能くす

浩雪　坂本香村の別號

悟心【畫】名は元明、悟心はその字なり、嬾菴、又た逍遙と號す伊勢正端寺の住僧なり京師洛東一兩菴に住す畫に巧みに又た詩文に妙なり

晃山【畫】石川晃、字は士晃、通稱は宗助、鬒髮山人、東毛墨客の號あり下野の人當時幕府外國と開港互市の議あるや晃山悲憤慷慨江戸を去りて水戸に遊び後ち又た江戸に出でゝ谷文晁に畫を學ぶ又た九州に遊びて鐵翁逸雲と交り畫法を極む備中倉敷に客居して歿す時に明治二年十二月二日年四十九

栲亭【書畫】村瀬氏、名は之熙、字は君績、嘉右衛門と稱す、栲亭は其號、又神州と號す自から土岐中書と稱せり京師の人、幼にして穎悟詩を善くす才思敏贍是の時江村北海の子乘年十二三計り聰慧超倫一時與に抗するものなし獨り栲亭年齡相齊し與に交り厚し嘗て五言排律三十韻を作りて押すに三江を以てす唱和數回に至る人以て駭異す長ずるに及びて武梅龍に從つて秋田侯の召に應じ其治所に赴く侯待つに賓師を以てし國政を諮詢す晚に致仕して京師に歸る栲亭博學治聞詩文を以て稱せらる又書畫を善くす書を讀みて暇あれば則ち古法帖を臨模し矻々倦まず尤も東坡を崇む特に草書は妙なり畫は尤も蘭竹に長ず著はす所の藝苑日抄世其博雅を稱す文政元年十二月六日歿す年七十三

容齋【畫】菊池武保、量平と稱す、容齋は其號、其先は肥後守武時に出づ武時十九世の孫を武長と曰ふ江戸に移居し幕府の先手與力となり子なし其弟河原武者の子を養ひて嗣となす即ち武保なり武保幼にして穎悟好みて書を讀む年十八にして高田圓乘の門に入りて狩野派の畫を受け研精力を致して夙夜懈るなし圓乘曰く畫を學ばゝ須らく博く古法に徵して之を精選し一家に泥む勿れと武保服膺す是に於て廣く先哲の遺蹟を研究して遂に一機軸を出す其畫く所の有職衣冠の人物官女遊女雅俗の人物山水草木鳥獸蟲魚或は神社佛閣等の畫圖悉く眞に逼る筆意は狩野探幽圓山應擧谷文晁三傑の雅趣を拔き圖は有職古土佐の法に倣て更に新意を出す常に人に語て曰く凡そ物を寫すは實に據らざるを得ず山水を寫さば宜しく先づ勝景を探討すべし古人を寫さんと欲せば宜しく先づ當時の衣服器玩宮室の制を探るべしと是に於て京畿に漫遊して博く古祠舊刹及び閥閱名家藏むる所の圖書器物考證を捜す此の如くする多年にして益々精確を加ふ嘗て吉野に遊び如意輪寺に詣りて後醍醐天皇の陵を拜す寺僧謂て曰く聞く子は畫を善くして南朝忠臣の裔なりと請ふ天皇の神像を畫かんことを武保激感して之を諾し乃ち復た京師に至り天皇の遺衣冠を拜觀し齋戒すること七日にして然る後ち筆を下す復た賢輔良弼忠臣烈士百餘人の像を作る可美手命に始りて細川賴之に終る名づけて前賢古實と曰ふ凡三十卷關白藤公之を孝明天皇に献ず天皇深く感ずる所あり既にして和氣清麻呂は神號を追贈せらる或は曰ふ圖畫の致す所なりと今上又た其の畫を嘉尙し日本畫史の稱號を賜ふ明治十一年六月十六日歿す年九十一

容軒　佐久間洞巖の別號

宸平【書】原氏、字は士萠、古處山樵と號す筑前秋月の人、天資瓢逸詩書を能くす享年六十一

宸鷺亭【畫】猪刈氏、烏居與兵衛と稱す江戸の戲作者なり畫を烏居清長に學びて戲著多し後ち川崎に移り書法を敎授す文化四年酒に醉うて溺死す

兼冬【畫】藤原氏、關白房道の子、資性書を好む年甫めて十四、輪攝政、光明寺攝政、善光院攝

政、洞院攝政、圓明寺關白の遺像を書きて一卷と爲せり筆法清雅にして上世の遺風あり天文二十二年正月關白となり氏長者內覽兵仗等の命あり左大臣となり牛車を聽さる翌二十三年二月父に先だちて薨す年二十六

兼房【畫】藤原氏、畫を能くし元文元年六月修理太夫顯季卿東洞院亭にて人丸の供養をなす即ち兼房其像を書く

兼好【畫】卜部兼好は吉田兼顯朝臣の子なり幼にして穎悟文才あり和歌を能くし後宇多天皇に仕て左衞門佐となる薙髮逃禪し其名を以て法號となし常に好て天神像を畫けり觀應元年二月伊賀國田中莊に歿す年六十八其著す所徒然草汎く世に行はる

兼康【畫】姓氏を詳にせず蓋し明慧上人と同時の人なり遺蹟存するものは兼康畫本あり

兼信 狩野福信の初名

兼信 鶴澤探山の初名

兼英【畫】氏名年代詳ならず其畫く所半身文殊の像あり

特峰【畫】丹波の慧日寺の開基なりと傳ふ能く觀音達摩の像を畫けり

桃川【畫】優遊齋と號す大坂の人浮世繪を畫く享和年間の人

桃溪【畫】丹羽元國浮世繪を能くす畫くところ河內名所圖繪蜻蛉の卷等あり

桃溪【畫】福井氏、自菴と稱す和泉の人、南宗畫家なり天保年中

桃林【畫】永正頃の畫人なりといふ

桃靑 松尾芭蕉の別號

桃源子 狩野山樂の別號

桃浪【畫】名は鼎、字は士德書及び畫を善くす京都の人、偏く本邦名賢の法を酌み自ら一家を立つ世に之を河北體といふ門に入るもの五千人寬政六年六月二十七日歿す年七十一

乘昌【畫】沼津氏、狩野永德に畫を學びて後一家をなす人物花鳥に巧なり多くは屏風を畫く世々屏風を朝廷に調進し又春日神社の御神寶師に定補せらる寬永十八年四月二十六日歿す

乘天【畫】沼津氏、乘昌の男なり父及び狩野永德に就いて畫を學ぶ

乘臺【畫】法然上人一夕夢中に淨土を見又善導大師を見る覺めて後に乘臺をして其見る所を圖せしむ其後宋朝より善導大師の畫像渡來せしかば之れを觀れば則ち夢中に見し所のものと毫も異なる所なし世に所謂夢中の善導大師と云ふもの則ち是れ也と之に由つて見れば乘臺は畫工なるべし

乘淳【書畫】瀧本坊松花堂の嗣なり書法に達し畫も亦妙なり

乘圓【書畫】山城國五智山の開祖なり俗姓岡本、字は朗然大坂に生る書畫を松花堂に學びて能くせり寬文十三年五月二十一日寂す年四十

乘貞【書】藤田氏、松花堂の門人にして同門の高足たり能く其風を得たり

乘鎭【畫】男山瀧本坊の住職にして不生軒と號す松花堂四世の傳統なり能く其法を得たり

乘圓【畫】智積院の僧なり三密に通じ一寺を開創す畫を狩野山雪に學び後ち自ら一家の風を成せり其水墨人物花鳥は世人甚だ之を珍愛し大着色のものに至ては最も佳なり男山萩坊と同名

なるを以て或は混して一人となすは誤れり慶安年中の人

乘龍【書畫】京都の浮世繪師なり文化頃

乘彦【書】名は周長、字は策彦天龍寺の住詩文に名高し

能惠【書畫】中御門正二位內大臣宗能の次男にして權大納言宗家卿の弟なり東大寺に入り法相兼眞言の學を修し得業に至る馬道の大般若二百卷の闕を書寫し供養せんとの願を發し病を得て中途に死し蘇生して宿願を遂ぐるの後猶ほ存命す又た繪畫の道に長じて神に入る戒壇院扉の畫を畫きて世に賞せらる仁安四年十一月歿す

能阿彌【書畫】名は眞能、鷗齋、又た春鷗齋と號す足利家に祿仕せり畫法を周文に學び人物山水花鳥を畫く後ち宋人牧溪を追慕して筆力大に進み周文の畫風を一變す筆する所濃淡の墨畫にして緻密なり又傍ら連歌を好くし古書畫茶器幷に刀劍の鑑定に精し又點茶の法を能くし庭園を作るに妙なり寶德年中の人

能庵【書畫】狩野元信の門人なり

峰信【書畫】狩野氏、名は峰信、又友淸といふ、隨川覺柳齋等の號あり、幼名は吉之助、後主稅と改む常信の二男、木挽町狩野の族、筆意父に似たり德川家宣の寵遇を受け氏を松本と賜はる後又狩野氏に復す寶永五年十二月三日歿す年四十七

峰雲【書畫】字は大學、良高禪師の法孫、悟有和尚の法嗣となる書法磊落にして神氣自ら備はれり

泰純【書】和田璉、字は韞卿、東郭と號す、別號合章齋、攝津の人にして京師に住す醫を以て當世に鳴る傍ら書を能くす後ち法眼に叙せらる享和三年卒す年六十三

泰菴【書畫】曾我敬、字は子發、泰菴は其號、京師の人、醫を業とす傍ら書を好みて善くす固より師を求めず自ら畫譜に依り或は古人の名畫を臨摸し終始一貫遂に大成するに至る而れども名を售るを好まず故に醫を以て稱せらるゝの外世に知られず遺墨も亦甚だ稀れなり文久元年五月歿す年七十九

泰信【書畫】狩野氏、名は泰信初め四郎次郎と稱し後永賢と號す高信の長男寬政十年九月歿す年三十二、狩野氏第十三世

時信【書畫】狩野氏、初め四郎次郎と稱す、後右京と改む、安信の長男畫法を父に學び家を嗣がずして歿す時に延寶六年十月二日也年三十七

時文【書】紀氏、歌聖貫之の子なり和歌を善くし兼ねて書を善くす大膳太夫內藏助を歷て從五位上に陞る

時範【書畫】平氏、尾張守家定の子なり畫を善くせり天和二年二月十日歿す

時賴【書畫】北條氏、相摸守入道最明寺、道崇覺了房、佛像を畫く弘長三年薨ず年三十七

時敏 金井烏洲の名

時敏 紀梅亭の號

時喬 加藤眞營の名

時成 新井草春の名

高雲【書畫】神足氏、通稱善左衞門、幽讃又た高雲と號す狩野探幽に學びて畫を能くし上杉家に仕

ふ寛文年中の人

高泉【畫】名は道敎、字は高泉、明人なり木庵と同じく來朝して終に歸化し黃檗山五世の住職となる善く觀音像及び蘭竹を能くす元錄八年十月寂す年六十二廣惠國師と謚す

高陽 仲山廷冲の號

高信 狩野永德の名

高信【畫】三宅氏、高野山に藏する繪卷物あり其事歷等詳ならず

高軒【畫】宮本氏、名は士正、字は誠卿、高軒は其の號、奧州の人なり能書を以て聞ゆ天明年中

高麗繪師麿【畫】齊明天王七年高麗の人鼈皮一枚を持して其の價四綿三十斤と稱す市の司笑うし去る高麗繪師麻呂同姓の賓を私家に延く此の日繪師官の鼈皮七十枚を借りて賓席となす客羞怪して避くと

高潔【畫】藤堂氏、伊勢津の城主なり二洲と號す性書を好み渡邊華山の書法を慕ひ能く其眞趣を得たり筆力温雅氣韻高逸にして殊に花卉に長ず後ち從三位に敍す明治二十二年歿す年五十九

高旭【畫】中根氏、高嵩谷の門人、嘉永年中

高溪【畫】澤山高溪は高嵩谷の門人なり嘉永年中

高雅【畫】森氏、左門と稱す尾張の人、森祖仙の畫法を受く天保年中

高岳【畫】和田高岳は高嵩谷の門人なり嘉永年中

高步 山岡鐵舟の號

高丘親王 眞如法親王の名

高倉天皇【畫】諱は憲仁、後白河天皇の皇子、好て圖書を能くせりと云ふ養和元年正月崩ず年二十一

祖酉【畫】狩野氏、初名は秀家、後秀信と改む、祖酉は其の號（一に祖祐に作る）工藤伊賀守の二男、永德及び松榮を師として學び畫に巧みなり其子素川信政能く其業を修む文和三年十二月十日歿す年六十二

祖圓【畫】信濃長池の人、大明國師の法嗣南禪法席を繼ぐ規菴と號す書を善くし畫に巧みなり南禪寺藏する所國師自畫贊度江祖師の圖あり正和二年四月二日寂す年五十一

祖榮【畫】雪村に學び設色の花鳥を能くし又た能く水墨に巧みなり

祖仙【畫】森守象、字は叔牙、祖仙は其號後ち狙仙と改む初め狩野派の畫家如春齋に學びて如寒齋又た靈明菴といふ猿を畫くに妙を得たり筆意圓山及び四條風より出づ猿の畫の外雜畫を見ず門人多し就中金田蘆江、森祖雪、森春溪、森玉仙等世に名あり平生篤行にして其遺蹟並に世に稱譽せらる文政四年七月二十一日歿す年七十五

祖辰【畫】字は南宗東福寺の住僧なり正德年中に寂す世其の墨跡を稱す

祖億【畫】名は祖億、玉洲と號す釋氏なり

祖濱 僧德俊の號

祖繼【畫】氏名詳ならず能く觀音像を畫けり筆力は明兆に似たり黑色清潤にして工緻餘あり

祖足【畫】續日本紀に曰く天平寶字元年五月、河內畫師授外從五位下賜姓御杖連、祖足魏陳思王曹植之後也とあり

祖門 僧鐵翁の名

祖雪【畫】森祖雪は祖仙の門人文政年中

鬼武【畫】前野曼助と稱す、江戸の小説家なり某侯に仕へて算學擊劍を能くす後致仕して專ら戲作に從事す蔓亭、又感和亭と稱す文晁に就て畫を學ぶ

鬼玉【畫】浮世繪師柳文朝の門人なり文政頃

鬼神齋曾我蕭白の別號

峨山【畫】山田氏、琢舟の門人にして畫を能くす

峨眉【書】近藤氏、名は正信、字は國寶、通稱正平、峨眉山人と號す京師の人なり趙松雪を學びて楷書を能くす寛政年中に歿す

書林【畫】雪舟に學びて能く其風格を得たり

袖蘭【畫】女史は吉田佐登、平安の人、笠山の配也幼より詩を能くし又能く書に巧みなり其の他諸技に通ず細香女史と時を同じうして友善し

剛雪【畫】壽靜と號す書を善くす

晋陽【畫】北山通良、江戸の書家なり享和元年十一月十六日歿す

晋子寳井其角の別號

晋齋【畫】張卯之吉と稱す嘉永年中の人

晋齋【畫】菅原由章と稱す天保年中の人

晋師菅茶山の名

烏石【書】葛氏、名は辰、一の名は曇一、字は君巖又た龍仲、或は神力と云ふ烏石は其の號、江戸の人、居を古川に卜す其地に烏き石あるを以て此號あり別に金粟、又東海陳人と號す姓は源、松平氏、書札に於て又た氏を葛と云ふ少き時游蕩飲を好みて家產を治めず後稍々節を折りて書を讀む初め細井廣澤に學ぶ後更に歐陽詢を祖とし意に一家を爲す又服部南郭の門に遊びて奇愛せられ名一時に高し晩に故あり江戸を去り京師に入りて本願寺の賓師となる安永八年十月二十二日歿す年八十烏石書を摸する甚だ巧み也嘗て古帖を僞作して細井廣澤に示す廣澤以て眞物とす烏石笑て告ぐるに實を以てす廣澤意平かならず遂に隙を成すと云ふ金石韻府、七才詩集、唐詩聯選、正讀書譜、中書楷訣等を校して上木す筆する所墨帖頗る多し

烏洲【書】金井氏、名は時敏、字は子修、又た林學、烏洲は其號、別に雨笠、晩泰翁の號あり通稱は左忠太、其先は新田左中將の同族なり世々上野島村に居る父を萬古翁といふ烏洲は其次子なり長じて春木南湖に書を學び又た宋元明諸家の筆跡を觀研礪精勵遂に一家をなす又た詩に巧みに文を能くす其友大館某嘗て烏洲が梅花書屋の圖を以て肥人某に贈る時に逸雲、鐵翁の諸名家大に之を賞し筆法梅關鶴崖の上に出づとなす安政四年正月十四日歿す年六十二、數子あり杏雨又た書を善くし金洞書を以て稱せらる弟硏香又た畫を能くす

栗山【書】柴野氏、名は邦彥、彥助と稱す、栗山は其號、又古愚軒と號す讚岐高松の人初め後藤芝山に學ぶ後東游して業を林門に受く英邁不群經籍に耽思し傍ら詩文を善くす學成り阿波侯に仕へて儒員と

なり祿四百石を食む京師に住して朱學を唱ふ西依成齋赤松滄洲、皆川淇園等と相善し天明八年栗山年五十三幕府に召され江都に來り昌平黌の敎官となり幕命を受けて林祭酒、岡田寒泉と共に學政を料理し世の學者をして一に程朱の説を奉せしむ當時伊東藍田、市川鶴鳴、冢田大峰、古屋昔陽、豐島豊州、龜田鵬齋等ありて伊物若くは其他の古學を崇尚し都下書生皆其敎に薰染すること久し故に示論下る毎に衆言囂々として皆咎を栗山に歸す赤松滄洲亦書を寄せて之を責む然れ共栗山毅然として動かず唯學政を修むるを以て務とす國學の規模一新して都下の學風稍程朱に向ふを知るは栗山等の力多きに居る後布衣班に進み公子の侍讀となる朝に大議ある毎に謀詢亦少なからずと云ふ文化四年十二月朔日歿す年七十四

栗山【畫】長野氏、名は宗臣、畫を平野五岳、帆足杏雨に從つて學ぶ最も山水に長ず

笑嶺【書】名は宗訢、大德百七世天正十一年十一月寂す祖心本光禪師

笑翁　釋大鵬の名

笑巖【書】名は法閣、字は笑巖、建仁寺の開基なり千光國師を賜ふ高德世に高し

栢堂【書】名は、景森、字は栢堂、妙心寺の住職たり詩名高し

家增【畫】源氏、洛東青蓮院の什物に鎌足、定恵、不比等の三像あり一幅となる家增の書く處にして其の筆法土佐風に類す墓所は南禪寺中天授菴にあり其碑面には元龜二年正月十二日と刻せり京師に住せし人なるべし

家熙【畫】近衞氏、太政大臣關白基熙の子、官左大臣攝政關白に至り、太政大臣に進む享保十年詔して三宮に准ず明人の風を慕ひて墨竹を書くに妙を得其他茶道及び典故に精通す元文元年十月薨ず年七月

家光【畫】徳川氏、大猷院、書法を狩野探幽に受く多く富士山を書く慶安四年薨ず年四十八

家綱【畫】徳川氏、嚴有院、書法を探幽に受く延寶六年薨ず年四十

家治【畫】徳川氏、浚明院、書法を狩野榮川に受く山水花鳥を能くす妙手に至る天明六年薨ず年五十一

家信【畫】大炊御門家信は經久の子なり從二位左大臣たり和歌を能くし且つ墨畫を能くす明治十七年薨ず年六十七

家信　狩野尚信の初名

家續【畫】狩野元信の門人なり花鳥草實を書けるあり其彩墨甚た清潤なり永祿年中の人

家經【畫】藤原氏、太政大臣兼平の子なり好て丹青の技を能くす永仁元年薨ず

祚連【畫】本朝畫史に曰く白鳳八年十一月皇后病む敕して藥師寺を建て冥救を祈る時に營構の規を知らず連入定して龍宮伽藍の規矩美を盡せるを見る出定して圖を摸し奏進す乃ち其の式を用ゐて藥師寺を營む尤も妙麗を極む云々と

草盧【書】龍草盧、名は公美、字は君玉、中年名は元亮、字は子明と改む再び舊に復す小字は衞

門、草廬は其號、又別に竹隠、松菊主人、吳升翁、明明窓、綠蘿洞の號あり初め彦二郎、伏見の人、彦根侯に仕ふ國學に精しく又和歌和文を善くす彦根に在ること十八年安永四年秋致仕して鴨河四條の畔に居し草堂を下鴨河菊谷にトせり寛政四年二月二日歿す年七十八
妾の菅氏、名は貞香、字は芳卿、小蘭と號す河内の人草書を善くす又詩歌に巧み也

草坪【畫】高橋氏、田能村竹田に從つて畫を學ぶ天保年中の人

草宗【畫】護國寺の什物に談議の御影と稱する弘法大師の影像あり即ち草宗法眼の筆にして名畫と稱す其の贊辭は仁和寺宮守覺親王の書なり之に依て考ふれば建久年間の人たること疑ふべからずといへども其氏名事蹟を詳にせず

經草【畫】佐久間氏、名は顯、字は叔德、京師の人、畫を松村月溪に學びて山水を能くす後ち法橋に叙せらる文化十一年十月二日歿す

草春【書】新井時成、字は白一、山城伏見の人醫を學び傍ら諸藝に達し書は雲流に學びて名あり延寶九年歿す年七十六

草雲【畫】田崎氏、名は芸、初め瑞白と號す、又白石生と號し又硯田農夫、七里香草堂、蓮岱山人等の別號あり下野足利藩士なり其父恒藏戸田侯に仕ふ故あり藩を出て江戸に市居す草雲幼より畫を嗜み初め川崎梅翁に從ひ梅溪と號す後谷文晁、春木南溟に就き又沈周、徐渭を宗とし山水花鳥善くせざるなし人となり狹氣ありて頗る擊劍を嗜み常に劍客に交る安政中足利町に退き畫學を敎授す維新の際志士に交はり力を王事に盡す後足利蓮岱山に艸堂を建て硯田農舍と云ふ皇居御造營の時御杉戸を畫き又第一回繪畫共進會には武藏野の圖を出品し大に賞せらる後出品毎に銀銅牌を受くること多し帝室技藝委員となり明治三十一年九月一日歿す年八十四

悅峰【書】黄檗山の僧來朝の人なり名は道章、字は悅峯、

悅山【書】名は道宗、字は悅山、萬福寺七代目の住職たり後慈福院に住居せり

涼珉【畫】池田氏、初め狩野探幽の門に學び後主信に就いて其の畫風を能くせり

眞濟【畫】畫僧なり紀氏、洛陽の人、弘法大師に從つて密敎を受く後に高尾の峰に居る承知の初年勅を奉じて唐に入る大同帝子僧眞如もまた弘法を師とす弘法如道の後深く之を慕ひ之が爲めに其肖像を寫し高尾山上に建てしが正曆久安の頃火災にあへど像龕のみ燒けざりしと云ふ

眞海【畫】善坊と稱す醍醐三寶院の住僧にして畫を能くす連藏院實染の弟子なり後年宋に航して留ること數年毛幡十二天圖彩具等を携へ歸り十二天屏風山水屏風等を畫く皆三寶院の什物たり後僧都に任ず又名を犇海とも云ふ

眞寂【畫】眞寂法親王は寛平法皇の皇子にして園城寺宮と號す、俗名齊世、延喜元年十月二日出家す三品兵部卿となる因て又法三宮といふ眞言宗深秘の蘊奥を得法驗の譽れ高く餘暇を以て繪畫を學ぶ其遺墨東寺に傳はれり延長九年十月薨ず

眞佛房【畫】太郎兵衞入道と稱す、太夫法眼尊智の弟子なり、

八幡の書師にして能書なり法華曼陀羅兩界曼陀羅八幡菩薩等を書きし事石清水本社末社堂寺院の記に載す

眞虎【書畫】大石氏、幼名門吉、太郎、衛門七、又小門太といふ、尾州の人也、月樵の門に入りて書を學び書風土佐派に出でゝ一派を開く後江戸に居る嘗て多く古書畫卷を閲し一々これを臆に留む故に史事を寫す皆據る所あり故ありて浪華に去る天保四年四月十四日歿す年四十

眞益【書】岩本氏、通稱八右衛門、狩野安信の門人なり

眞說【書畫】狩野氏、初名は元秀、後元松と改む眞說と號す、宗秀の男、畫法を父に學び後法橋に敘せらる

眞如【書畫】眠如親王初めの名は高岳親王と云ふ淳和天皇の皇太子となりしが讒を蒙り佛門に歸し弘法大師と共に法を修し其十弟子中に入る書畫共に長ず東寺醍醐寺に收むる所は實に其遺墨なり元慶五年十月三日唐に航し尙ほ求法の爲めに天竺に至らんとし途次流沙河の畔に於て遷化す

眞漁【書畫】巽正音、字は子聲、蒙所に學びて能く其風を得

眞笑【書畫】狩野氏、名は信正、眞笑は其號、別に眞乘とも號し治部と稱す季賴の子なり法眼に敘せらる慶長年中の人

眞梁【書畫】薩摩の人、京師に入り蒙山明公に禮して落髮す後ち通幻に參す禪機に通じ又圖畫を能くす應永三年五月十七日歿す年七十九

眞賴【書】黑川氏、東京の人春村の長子なり夙に國學に通曉し和歌に巧みなり大學內務農商務等の諸官を經歷し文科大學敎授に任じ御歌所寄人となり東京學士會員に擧げらる文學博士たり晩年空海の書風を能くす明治三十九年八月三十日歿す年八十三

眞淵【書】加茂眞淵は通稱岡部衛士、縣居と號す遠江國濱松加茂社の祠官定信縣主の子なり若年にして梅谷某の養子となる出でゝ京師に來り荷田東滿の門に入りて苦學勉勵す延寶三年江戸に出て益硏鑽し遂に古學を以て天下に唱ふ門下英材輩出す田安侯召して俸祿若干を賜ひ寵遇甚だ厚し寶曆中仕を致して益古語の難義を解き其學愈昌なり詠歌の古に復し國學の世に普きに至れるものは實に眞淵の力なり明和六年十月三十日歿す年七十三

眞龍【書畫】吉原眞龍は豐後の人なり畫を以て法橋に敘せらる天保年中

眞齋【書畫】眞齋名は世龍、字は玉鱗、眞齋は其號、又た櫻園と號す、晩に雲山叟と稱す豐後岡藩の人、淵野宇吉の三子にして寶曆十年六月家に生る幼より書を嗜み邑の師友に乏しきが故に或は古書を模仿し或は山水翎毛等其眞を寫し稍自得する所あり長じて各地を漫遊し益其技を修む藩主其志を嘉賞し寬政五年二月苞米十七俵祿一口を給し別に學資を與へて江都に遊學せしむ因て渡邊玄對、笹山養意の二家に從ひ刻意黽勉業大に進み狩野派なる笹山氏の風を廢し專ら渡邊玄對に學び其門に留ること四年同八年五月鄕に回る文化二年正月藩主特命を下し繪事の爲めには隨意漫遊することを許す眞齋因りて海內諸州を周遊し再び江都に抵り當時の名士と大に書畫筵を百川樓に開く江戸に在ること約三年又た國に歸る畫法益精熟す同七年六月俸祿を增加

し藩の書員に命ぜらる文政六年六月家に歿す年六十四田能村竹田初め此人に從つて畫を學ぶといふ

眞菅【畫】加藤氏、名は時喬、尾張の人なり初め書を沼田月齋に學び師歿して後ち專ら土佐の畫法を學び有職古實を研究す明治二十一年東京に歿す年五十余

眞能 能阿彌の名

眞琴【畫】三草眞琴は筑後の人なり安政年中

眞宰 松本交山の名

眞淵 彭城百川の名

眞鐵 藤本鐵石の名

眞哉【畫】池田眞哉は柴田是眞の子なり畫を父に學ぶ安政五年生

眞室 僧友梅の諡

眞淑齋 鈴木鳴門の號

眞治齋 狩野旭信の別號

眞實庵 守村抱儀の別號

海屋【書畫】貫名氏、名は苞、字は子善、又た君茂海屋は其號、晩に菘翁と號す通稱は泰次郎、阿波の人京師に住す儒を以て業とし傍ら書を嗜みて善く山水を畫けり所謂る文人畫にして雅朴を旨とす初め其舅某に從ひ狩野家著色の畫を學ぶ後錢穀が山水帖を見て大に喜び飜然其風を變ず其名世に轟く近年其遺墨を賞翫するもの日に多し文久三年五月六日歿す年八十六

海潤【書】名は雪摩、字は海潤、曇所と號す

海舟【書】勝氏、名は安房、初め義邦、通稱鱗太郎、海舟と號す幕府に任ふ海軍の兵術に長じ安房守に任ぜられ專ら力を海防の策に致す幕府政權を奉還するに當り大久保一翁、山岡鐵太郎等と共に俗論を排して恭順の實を顯し德川氏封を駿州に受くるに至りしものは海舟の力多きに居る明治中興の後海軍卿兼參議に任ぜらる又勳功を以て華族に列し伯爵を授けらる晩に樞密顧問官となる詩歌及び書を能くす明治三十二年一月十一日薨ず年七十七

海石【畫】村田氏、名は壽、字は樂山、海石は其號、通稱浩藏、大坂の人、本と商家に生る秋原秋巖の門人なり書を以て著る

海莊 菊池溪琴の別號

素眼【書】時宗の僧なり京師四條道場金蓮寺に住す能書の譽れ世に高く遂に素眼流の一派を起す

素性【書】素性法師はもと良峰朝臣といふ左近衞少將宗貞の子なり俗名を玄利といふ和歌に巧みに書を能くす初め清和天皇に仕へ左近衞將監に任ず後ち身を沙門に投ず雲林院また石上の良因院に住す寛平八年閏正月宇多天皇雲林院に行幸し大納言源朝臣をして勅を奉じて宣せしめ素性大法師を權律師となし弘延素性兩法師に度各一人を賜ふ昌泰元年宮瀧遊覽のとき良峰朝臣を改めて良因朝臣と賜ふ住所の名に由りてなり歿年詳かならず

素川【畫】狩野氏、名は政信、通稱外記、素川また祖仙と號す祖酉の男、畫法を父に學びて善くし東福門院に仕ふ

素仙【畫】狩野成信、素仙と號す伯圓の男なり

素鏡【書】上田氏、通稱與五郎、字は思夫、隨古堂と號す、信濃上田の人、書を能くし後ち江戸に居るまた內藤素水に從ひて俳諧を學び時に名あり明和八年正月二十八日歿す年七十四

素軒【書】安藤

爲實、字は亮、素軒は其號、朴翁の長子にして丹波國千年郷小口村の人なり父の後を繼ぎて伏見宮に事へ右兵衛尉に任ぜらる博雅淹通最も本邦の典故に通ず弟とともに水戸義公に仕へ彰考館の史局に參與せり義公の儀類典を撰するや擢じられて其の總裁となる和歌を好みて能くし又た能書の聞えあり

素白【書】荒木光辰、通稱三次、後ち内膳と改む、九歳にして補山城主水野勝成に仕ふ年十九同僚某と爭ひ遂に去つて伊勢に赴むき津の城主藤堂高虎に事ふ後ち勝成高虎を訪ふ高虎爲めに酒饌を設く素白給事周旋す勝成見て大に怒り高虎に請うて之を獲んとす高虎肯ぜず素白去つて京師に遁る勝成之れを追うて又た得ず嚴に國に入るを禁ず素白竄匿すること數年遂に備後鞆津に至り勝成に書を上りて首罪を乞ふ勝成哀れみ宥して京師に歸らしむ是に於て剃髮して禪を靈隱寺一絲に問ひ名を虛空素白と改む勝成之れを聞き復た召して祿を與ふ勝成、勝俊、次ぎて卒するに及んで辭し去る後ち高虎の嗣子素白を招げとも辭して應ぜず素白常に書を好み藤本敦道を師とし其名頗る高し世之を稱して上代風の中興とす其書體三跡の室に入ると云ふ晩年病むに及びて權大納言藤原弘資使を遣して慰問懇到す又た慰問するもの陸續絕へず是れより先き後水尾天皇素白に詔して團扇及び色紙に書せしむ素白書し上つる大に旨に愜ひしと云ふ貞享二年春歿す年八十六

素松堂【書】平安の人、松花堂の門人にして能書の譽あり

素絢【書】山口氏、字は伯後、山齋と號す、通稱武次郎、京師の人、書を圓山應擧に學びて其秘訣を得、又た我邦俗の婦女及び雜書に巧みなり文政元年十月二十四日歿す年六十

素軒【書】山本氏、名は守常、素軒と號す狩野風の書を能くす

素程【書】山本氏、名は守次、素程と號す狩野探幽に學び妙手と稱せらる京師の人、元祿年中に歿す

素川【書】山本氏、素程の男にして父の書風を善くす

素琴【書】三宅氏、字は柴桐、芝園と號す竹窓四君子を書けり

素菴【書】吉田氏、名は光昌、字は玄之、素菴又は蘇庵と號す、角倉與一と稱し了以の男なり法橋に叙せらる儒學を惺窩に學び書を光悅に學びて遂に一家を成す世に角倉流と稱するもの即ち是れなり寛永九年六月二十二日歿す年六十三

素安【書】伊藤氏、風竹軒と號す和樣の書を能くす醫を以て時に行はる元祿年中の人にして常に京師に住せり

素平【書】渡邊氏、名は正信、後ち素元と稱す水野家の家臣たり素白の門人にして能筆と稱せらる最も假名に妙なり

素軒【書】野村氏、幼名純輔、後ち素介と改む、山口藩士、天保十三年五月生る華族に列せらる詩書を能くす

素軒 小栗伯圭の別號

素明【書】林元と稱す肥後の人、書を以て世に名あり

素宅【書】園井氏、富元の子、書を父に學ぶ早世の故を以て家絶ゆといふ天保年中

素園 千代尼の號

素丘【書】山口氏、素絢の子也書を父に學ぶ天保年中

素

眞【畫】山形素眞は安政年中

素眞【畫】新井氏、富八郎と稱す下野足利の人、文政年中

素人 柳澤淇園の一號

素雲 池田雲樵の別號

素行 宮脇有景の名

素耕【畫】前田氏、通稱久治、嘉永年中の人

素碧【畫】林氏、江戸の人、書を狩野素川に學ぶ

秦山【畫】土方氏、名は久元、高知藩士、天保四年十月生る弱冠江戸に遊び若山壯吉、大橋訥庵の門に經史を修む後國事に奔走し明治中興功を以て江戸府判事に任せられ諸官を經て宮內大臣に任じ伯爵を授けらる

桂詰【畫】萬壽寺の畫僧なり嘗て明國に遊歷すといふ好みて大黑像を畫き又た八景の圖及び扇面雜畫を畫けり文龜年中の人

桂久【畫】徹書記の門人にして和歌を善くし名聲一時に鳴るまた書を能くす

桂川【畫】名は道倫、字は桂州、間雲と號す

桂舟【畫】武內氏初め狩野永悳に畫法を學ぶ研鑽數年遂に一家を成す門人に秀才多し曾て薩摩焼の陶器畫に從事し新機軸を出せりといふ

桂園【畫】藤田仲達と稱す越中の人なり天保年中

桂堂【畫】增田武右衛門と稱す南宗の畫法を學ぶ嘉永年中

桂舟 板谷長利の號

桂甫【畫】菊地七兵衛と稱す文政年中の人

桂屋【畫】下田氏、通稱重次郎、嘉永年中

桂意 板谷廣隆薙髮後の號

桂僊【畫】淵野桂僊は文久年中の人

栖鳳【畫】和泉堺の人墨竹を善くす後僧大宅の妻となるといふ

栖鳳【畫】竹內氏、京都に住す、慶應元年生る幼より畫を好み年十四土田英林に就て學ぶ尋で幸野梅嶺の門に入る後ち又た北宗派を研究すること數年明治廿八年美術學校敎諭に任ぜらる後歐米諸國を漫遊し大に得る所ありて其技益々進む

耕雲【畫】長雄氏、通稱半左衛門、畫を能くす寛延二年正月二十三日歿す

耕山【畫】船山氏（一に船田に作れるあり）江戸の書家なり名は雅、通稱幸四郎、松平周防守の臣なり寶曆十二年十月三日歿す

耕天【畫】上田氏、名は華、平安の人、應擧及び月溪の風を慕ひて能くせり

耕甫【畫】山田光德、字は正助、耕甫は其の號、人物を能くす南都の人なり

耕石【畫】中西氏、名は壽、字は龜年、筑前の人、畫を小田海僊に學び後自ら一家を爲す山水に妙を得、日根對山と並稱せらる明治十七年歿す年七十二

耕靄【畫】女史は武村氏、通稱千佐、嘉永五年正月生る山本琴谷、春木南溟、川上冬崖等の諸家に就きて畫法を受け傍ら泰西の畫法を研究す東京女子師範學校畫學の敎官となる南宗派にして花鳥を能くす

耕梅【畫】耕梅道人は五山の僧なり善く墨梅を畫く淸奇

甚だ愛すべし寛文頃

耕雲【書】林八郎兵衛と稱す安政年中の人

耕雲【書】高橋氏、越後の人、書を富取芳齋に學ぶ天保元年生

耕雲【書】神田氏、通成と稱す伊賀の人、書を中西耕石に學ふ明治年中

耕巖【書】木村耕巖は安藝の人なり安政年中

耕煙【書】小林耕煙は陸前の人なり文政年中

耕齋【書】柴田一作と稱す江戸の人なり文政年中

耕雲齋 武田如雲の別號

耕雲齋 春木南溟の別號

耕好齋【書】並岡氏、小柴守直の門人、安永年中

貢村【書】山田氏、名は正、字は子誠、貢村と號す通稱立夫、阿波の人萬延元年十一月生る詩文に長じ書に巧み也

厚李【書】山本氏、字は文治、南都の人也最も獸類を書くに長ず文化年間

厚信【書】狩野氏、永加の子、祖軒と號す本氏に復し日比厚信と稱す寶永年中

格安【書】山本氏、通稱伊兵衛、天野信景の門人なり博覽を以て聞ゆ著す所燕石雜錄、齊東談、書燕說、南柯夢談等數種あり書を能くす寶曆中の人なり

茗溪【書】戸塚氏、通稱門吉江戸の人、天保年中

茗澗 武市半平太の別號

晏川【書】狩野氏、寛静良信の子、書を狩野榮信に學び幕府の書師となる

晏信 狩野友甫の名

晏春【書】長命晏春は江戸の人、書を狩野晏川に學ぶ明治二十二年七月歿す享年五十七

孫二【書】堤孫二は雪峯の子、書を父に學び二代目孫二と稱し雪丘と號す文化年中

孫郎【書】日東孫郎と稱す馬書に巧みなり年代詳ならず

孫四郎【書】岸氏、孫四郎は其通稱なり狩野右京進光信の門人、慶長年中

孫右衛門【書】渡邊氏、孫右衛門と稱す京都の人文化年中

神州 村瀨栲亭の別號

神通堂 中島來章の別號

神速軒【書】飯島氏、敬喜と稱す信濃の人、天保年中

破笠 小川笠翁の別號

破鞋子 釋江雪の別號

破草鞋 釋明兆の號

桑桒 桑山玉州の稱

馬嶺【書】中川氏、讃岐の人、天保年中

馬溪【書】田中氏、豐後の人、初め岡本豐

彦に書法を學び復た唐宗元明の古法を研究して一派の漢書を成す天保年中

馬孟熙 北山巖の寒稱

拳石小師 釋雪室の別號

息梅〔書〕曹洞宗の僧にして越前の人なり書を雪舟に學び多く墨書を作る

息遊軒 熊澤蕃山の別號

息心齋 趙陶齋の號

峻嶽 司馬江漢の名

盈信 狩野墨川の名

盈科齋 依田竹谷の別號

十二畫

惟信〔書〕狩野氏、幕府の繪師長官たり、法印に叙せられ養川院と號す畫道の筆に成れる觀音の粉本を藏す殊に禁秘となし門人といへども之を見ることを許さず然るに火災に罹りて消燼す當時某侯其原本を藏す惟信請うて之を寫さんとす侯許さず因りてしばしば侯の邸に至り之を觀ること數回家に在りて其像を書き携へて侯に之を示す侯一見驚きて曰く我が書は外に出さず何に依りて之を書きたりやと答へて曰く熟視數回にして諳記すと是に於て侯其志の厚きに感じ惟信の書く所を取りて其原本を與ふといふ文化五年正月十三日歿す年五十六

惟一〔書〕名は道寶、字は惟一、黄檗山の僧たり明人にして隱元と共に來朝す

惟德〔書〕白井惟德、一に赤水、字は元藏、養素園と號す本と紀氏、平安の醫師にして書を善くす來り學ぶもの多し天保九年十一月十七日歿す年七十七

惟中〔書〕岡西氏、一時軒と號す元と鳥取の人、浪花に出でゝ醫を業とす俳諧を能くし書も亦佳なり元祿五年八月十日歿す年五十四

惟馨〔書〕横山氏、京師の人、華山の父なり書を江村春甫に學びて能くせり

惟德〔書〕荷田氏、字は子馨、御風の嗣子なり父の小字を受けて東之進と稱す本氏は藤井、有職の學を修め又た詠歌を善くす文政十年二月歿す年六十三

惟亘 尾琳光琳の名

惟久〔書〕飛驒守惟久は武者書の名手なり其書く所後三年繪巻は世に著名のものなり元享年中の人

惟寛 賴春水の名

惟強 賴春風の名

惟柔 賴杏坪の名

鳥羽僧正〔書〕名は覺猷、源隆國の子、少にして僧となり天台の座主法務及び三井の長吏大僧正となる嘗て鳥羽に居る故に鳥羽僧正と號す倭書を能くし一家をなし戯書人をして笑倒せしむ方今世俗に呼ぶところの鳥羽書なるものは即ち僧正の書風より出でたるものなり保延六年九月十五日寂す年

八十八

鳥鱗 石川丈山の別號

鳥佛師 推古天皇時代の繪師なり

蛇足【畫】曾我氏、式部と稱し後薙髮して夫泉と曰ふ越前朝倉氏に仕へて世々武臣たり性書を好み周文を師とす然れども筆力粗にして其の師に似ず畫くところの山水人物花草鳥獸悉く濃墨を以てす皆豪邁活動の勢ありて氣韻蕭疎なり又た密畫は宋明人の筆意に似たり時に大德寺一休和尚畫を蛇足に學ぶ蛇足曾て一休の像を畫く今尚ほ世に存す世人太だ賞譽す又た布袋大黑對奕の圖あり一休之に讃す筆力尤も勇健と稱す應仁年中の人

蛇玉【畫】葛城氏、名は季原、字は子明、蛇玉は其號、浪花の人

蛇足軒 狩野山雪の別號

蛇足軒 曾我蕭白の別號

國華【畫】西川氏、名は瑚、字は子璉、國華は其號元章と稱す江州の人、儒を東皐の門に學び江戸に住し醫を吉田桃源に學び綾部侯に仕ふ平生詩豪を以て稱せらる遺詩三萬八千首に至る文政の初年歿す年七十餘

國松【畫】狩野氏、祐勢の季子なり山水花鳥を善くす早世す

國弘【畫】姓は大中臣、畫くところのもの大嘗會主薄の屛風ありと傳ふ

國華【書畫】南部景春、字は國華、南山の男なり詩文書畫に巧みなり享保二年歿す年二十三

國雄【畫】酢屋國雄は通稱平十郎、皎天齋と號す、守國の門人、浮世繪を畫けり文化年間の人

國重 二世豐國の初名

國貞 三世豐國の初名

國政 四世豐國の初名

國滿【畫】歌川氏、通稱は熊藏、一世豐國の門に入りて浮世繪を學び一翁齋と號す畫く所の繪草紙錦繪の類尤も世に行はる芝口三丁目に住す安政年間の人

國直【畫】歌川國直は俗稱鯛藏、浮世庵畑柳樓と號す信州の人、豐國の門に入り浮世繪を學ぶ草雙紙、讀本錦繪の類を描き國貞と肩を比ぶ別に一機軸を出さんとし刻板の畫を廢し明畫を學び又北齋の風を慕ふ後ち氏名を改めて吉川四郎兵衛といひ寫眞齋と號す安政元年六月二十八日歿す年六十二

國安【畫】歌川國安は一世豐國の門人にして通稱安五郎一鳳齋と號す、江戸の人なり少より畫を好み文化の初より錦繪を出し大に世に行はる後ち故ありて西川安信と改名せしが後幾何もなくして又た舊名に復す天保七年歿す年三十餘、門下より出でたるものにて二代目國安、安信等最も著はる

國政【畫】歌川國政は通稱甚助、一壽齋と號す、奥州會津の人、江戸に出で豐國に就いて畫を學ぶ研精年あり其技大に進む專ら俳優の肖像を描く偶々團扇問屋某國政をして俳優半身の像を畫かせ團扇に張りて發賣せしに大に行はれたり其畫、師の豐國も及ばざるものあり故に人或は豐國は國政の門人ならんといひしとぞ文化七年十一月晦日歿す年三十八

國長【畫】歌川國長は豐國の門人、一雲齋と號す、通稱梅干之助、江戸の人、俳優似顏畫、讀本插畫は其長ずる所にあらず專ら組上げ燈籠畫、又は細工物に組立つる錦畫を書き又た名所

遠景の浮き書を巧みにせり常に游藝を好みて音曲に巧なり文政年中歿す年四十餘

國丸（書）歌川國丸は、俗稱文治、一圓齋と號し又た五彩樓、馦蝶庵と號す豐國の門人にして國安と並び稱せらる俳優の似顏畫及び繪草紙等を畫きて名聲甚だ高し又た俳諧を好み鶯笠庵に學び名を龍尾といふ風流に身を委ね俗事を顧みず優游世を終ふ文政年間に歿す年三十餘

國芳（書）一勇齋と號し別に朝櫻齋の號あり一世豐國の門人、錦畫を以て名聲世に高し最も武者繪を能くす書法後ちには土佐、狩野、四條、圓山諸家を慕ひ又一蝶、北齋、春英、丹鳥齋等に據り又た元明諸家を窺ひ西洋の書法をも研究して遂に一家を成せり文久元年三月四日歿す年六十五

國芳女（書）女史は名は鳥、歌州國芳の長女なり書を父に學ぶ未だ嫁せずして歿す

國芳女（書）女史は名は吉、歌川國芳の次女なり書を父に學ぶ田中其英に嫁せり安政年中

國爲　國勝　國彦　國近
國彙　國時　國宅　國英　國虎
國景　國信　國種　國忠　國照
國松　國盛　國春　國一　國與
國玉　國瀧　國峰　國周　國綱
國輝　國清　國弘　國安　國次
國壽　國麿　國宗等皆三世豐國の門人にして歌川を稱す安政、萬延、文久、元治年間の書家也

甫田（書）山崎氏、字は無競、甫田と號す又槐雲堂と號す本と井戸氏、通稱は其華、書を能くす天保八年正月二十九日歿す年五十二

悠山（書）今大路源秀、聖護院宮の坊官なり法眼に叙せらる書を中林竹洞に學びて山水を能くす當時文人書の名甚だ高し嘉永二年十一月六日歿す年六十

偸閑齋（書）名は與悅、周文の門人なり花鳥を能くす

透軒（書）鈴木孟陽、字は元辰、通稱辰之助、詩及び書を善くす慶應元年五月歿す年二十二

研齋（書）松本氏、京都の書家なり董其昌を學び後ち變じて別に一家を成す從ひて學ぶもの多し天保三年四月二日歿す年六十五

研堂（書）星氏、會津の人、藩侯の右筆となり日新館書學教授を兼ぬ安政年中の人

理齋（書）早瀬氏、狩野派の書人にして狩野常信の弟子なり

理豐尼（書）後西

院天皇第十九の皇女なり徳巖と號す書法を狩野周信に學びて能くすといふ延享二年五月十二日薨ず年七十四

理信【畫】狩野氏、名は理信、長吉と稱す隼人信之の門人なり元文頃

理兵衛【畫】天和年間の浮世繪師なり

淡窓【畫】廣瀬氏、名は建、字は子基、求馬と稱す豊後日田の人、幼にして神童の稱あり而して温恭篤敬言語苟くもせず是の時に當り鎮西文化未だ洽ねからず二三の家塾ありと雖ども生徒寥々數十に過ぎず淡窓幼にして龜井元鳳に從て游ぶ其徒を延き業を授くるに及び前後藉に上る者四千餘人家塾の盛んなる未だ嘗て有らざる所なり淡窓其規約を嚴にし其課程を密にす又其業級を設け鼓するに月旦を以て評す乃ち人材彬々一時知名の士多く其門より出づ大村府内の二侯皆禮を厚うして之を延き待つに賓師を以てす安政二年歿す年七十四門人私に諡して文玄先文と曰ふ

淡園【畫】戸崎元明、字は哲夫、初名は計、五郎太夫と稱す淡園は其號、常陸の人、儒を平金華の門に學び守山侯に仕へて上大夫となる物徂徠の學を奉じ著書甚だ多し且書を能くす文化三年十一月歿す年七十八

淡堂【畫】近江の人 安政年中

淡雅【畫】大橋氏、江戸の人、天保頃

淡然 狩野主信の別號

袋河【畫】三宅氏、蝶々舍と號す、其諺の門に俳諧を學び京都に住す書に巧みなり元文元年五月十七日歿す享年四十一

基光【畫】春日氏、初め名は盛光、藤原清隆の男なり巨勢金持より畫傳を受け佛畫に巧なり南都東大寺に住し藤原を改めて春日と稱す始めて畫所預りとなる從五位上に敍し内匠頭に任せらる又越前守と稱す實に土佐家の開祖にして後昆の連續すること殆んど九百年其間俊傑交々出でゝ家聲を墜さず土佐、住吉及び其支族各々古則を守りて畫事に精しきもの皆基光の之が處をなしゝ也寛弘年中の人或は曰ふ寛仁年間の人なりと

基光【畫】藤原氏、左大臣魚名の孫なり畫を能くす寛仁年間の人

基隆【畫】佐伯基隆は武藏國大師河原平間寺の住職なり畫法を小林寒林に學ぶ明治年中

基熈【畫】近衛基熈は尙嗣の子なり書畫並び能くす享保七年九月薨ず年七十五

勘亭【畫】勘定流書風の祖、岡崎屋勘六といふ劇場中村座の手代にして劇場看坂等の書法を改め今の如くせし者は勘六なり故に其書風を稱して勘亭流といふ文化二年二月三日歿す年六十

勘兵衛【畫】山本氏、浮世繪を能くす寛永年間

勘助【畫】望月氏、浮世繪を能くす天明年間

細香【畫】江馬氏、名は裊、字は細香、湘夢と號す美濃の人、醫生江馬蘭齋の女なり畫を竹洞に學び又梅逸に往來して畫名高し年若くして粉華を事とせず綺羅を用ゐず曾つて京に上り梅逸の家に宿す其妻

怪み問ふて曰く女史こゝに來る日未だ幾ならず然るに其結ぶ所の帶破れて裏を露はすは如何細香答へて曰く褻帶は發途の際に已に破る然れども繕綴を加へず直ちに京に上る其破れは素來のみと其裝飾の爲めに意を用ひざる率ゐ斯の如し賴山陽嘗つに江馬の家に寓し細香の才學あるを知りて聘せんと欲す細香常に以爲らく萬人に卓越する者に非れば醮せずと是時山陽の伎倆未だ著はれず故に竟に辭して應ぜず後山陽の名世に顯はるるに及びて細香耻ぢ且つ之を悔いて終身他に嫁せずと云ふ文久元年九月四日歿す年七十五

巣兆【畫】建部英親、菜翁、秋香菴、小簑菴等の別號あり武藏千住驛の人なり父は山本就齋といひ書家なり巣兆初め谷文晁に就いて學び技大に進む其密なるものゝ如きは恰も應擧に類せり蕪村風の俳畫を能くし俳諧に長するの故を以て畫名却て其の掩ふ所となる文化十年十一月十七日歿す

巣南【畫】畫風眞相の風に雪舟の法を兼ね好みて墨畫を作る

巣雪【畫】雪舟の畫法を慕ひて山水に長ず

巣丘道人 增山雪齋の別號

啓拙齋【畫】相模の人なり專ら祥啓を學ぶ畫く所の枯木花鳥等みな風致あり逸氣紙上に溢るゝもの多し

部鳥【畫】鞍作氏、遺跡南都にあり其の圖は土に畫くものにして巧妙云ふべからず

偃武【畫】吉田氏、初め市川君圭に就いて學び後ち岸駒を師とす

笠翁【畫】小川宗宇、平助と稱す、笠翁は其號、又破笠、卯觀子、夢中庵等の別號あり初め露言を師とし後芭蕉の門に入りて俳諧を學ぶ畫は一蝶に學び一蟬と號す狩野の風を慕ひ彩色を巧にす又漆器を作るに工みに世に笠翁細工と稱して之を珍重す弱冠放蕩家を出て木曾山中に露宿し敝衣破笠落魄して「乞食にもかくはならればや桑山子哉」の句あり破笠とは是より號すといふ延享四年六月三日歿す享年八十四

笠山【畫】大倉氏、名は轂、字は國寶、義邦と號す山城笠城の人京師に住し畫を竹洞に學ぶ其名當時に高し嘉永三年歿す年六十六

敏行【書】藤原氏、富士麻呂の子なり從四位上左近衛中將となる和歌を善くしまた書に工みなり村上天皇嘗つて小野道風に古今妙書の最なるものを問ふ道風答ふるに空海と敏行とを以てす其能書なりしこと知るべし延喜七年卒す

敏信 狩野主信の初名

敏愼齋 木下順庵の別號

許六【畫】森川氏、名は百仲、字は羽官、五老井、又菊阿佛と號す江州彥根井伊家の給人なり俳諧を好みて芭蕉の門に入り上達して遂に蕉門十哲の一に居る又畫を嗜み狩野安信の敎を受けて頗る妙手に臻り畫を芭蕉翁に敎へてより俳士皆許六の畫風を慕ふ其文藝に達するを以て芭蕉之に許六の名を與ふと云ふ晩

年癩を病みて人に面せず正德五年八月二十六日歿す年六十

淨賀【書画】淨賀法眼は信濃國白鳥村康樂寺の住職にして父は木曾義仲の功臣太夫房覺明後信賀となり信賀晩年親鸞上人に從ひて眞宗の高僧となり康樂寺を開創す淨賀は丹青の技に長ずるを以て本願寺三世覺如上人と相謀り親鸞上人繪傳四卷を畫く實に眞宗無二の重寶たり永仁三年五月二日寂す

淨耀【書画】淨賀法眼の子、信賀の孫、父に繼で畫を能くす文和三年十月其畫くところ親鸞上人合掌の圖一幅京都本願寺前常樂寺に藏す稀世の能畫と稱す

淨慧【書画】愚溪と號す、筆意牧溪を學び且つ戲畫を能くす禪僧なり成は曰く漢土の僧なりと

淨賀【書画】宅磨家に就いて學び畫を能くせり元享年中の人

淨宏【書画】宅磨淨宏、宅磨派の畫家なり、法眼に叙せらる嘉慶年中の人鎌倉法華堂の地藏尊は此人の畫くところなりといふ

祥啓【書画】僧祥溪、雪溪と號す、別に貧樂齋、休月齋、龍杏、榮普齋等の號あり下野宇都宮畫師丸良氏の子なり鎌倉建長寺に入りて書記となる世因て啓書記と稱す資性畫を好み遂に妙手に至る殊に佛畫に巧みなり山水人物之に次ぐ後ち宋人牧溪の畫風を慕ひ深く研究して畫格墨色殆ど牧溪に似たり墨畫に長じて彩色を好まず本朝の畫家巨勢、宅磨の外漢畫風を以て世に鳴るものは啓書記を以て始めとす貞享元年歿す

祥山【書】名は宗瑞、羅月と號す大德二百十四世元祿六年十二月寂す年七十五

祥庵　藤井西洞の別號

陶齋【書】趙陶齋、名は養、字は仲頤、陶齋は其號又息心居士、息心齋、拘杞園、或は清暉閣等の號あり長崎の人清人趙氏の胤なり幼にして父母を喪ひ落魄す適々笠禪々師海に航して歸化す乃ち之に投じて弟子となり釋服を服する二十年後又初服に還る嘗て深見玄岱の家に在り故に或は深見を氏とす平生游歷を事とし足迹殆んど天下に遍ねし書法を善くす初め江戸に住し中ごろ大坂に徙り最後に界府に寓す居る處業を受くるもの多し森田士德鑒識あり陶齋の書を稱して曰く趙承旨祝允明と鑣を並べて馳すべし文徵明董其昌の如きは其後に瞠若たりと界府に居る十八年天明六年四月二十日歿す年七十四陶齋音吐沈靜に容貌温雅然れども氣宇傲兀酒を好みて不羈敢て人に屈下せず武人の氣習多し又文武の典故に諳練すと云ふ

陶所【書】池內氏、名は秦時、陶所は其號、京都の人詩文に長ず

陶居【書画】横川安定字は文辭、通稱愿三郎、白蘭舍と號す浪花の人書畫を能くせり

陶丘【書】內田氏、名は延輝、渡邊玄對の男、江戸の浮世繪師なり文化五年三月七日歿す年四十八

陶隱　尾形乾山の別號

鹿山【書画】北條氏、名は泰、字は一原浪花の人、書畫を善くす文政年間

晦山【書】佐々木氏、志頭磨の男、書法を父に受けて能くす

終南【書】名は終南、介石と號す黃檗山の僧たり

規禮【畫】龜岡氏、字は子茶、規禮と號す通稱喜十郎、圓山應擧の門人、花鳥に巧なり

教禪【畫】佛師定禪の父なり後冷泉天皇の御祈に法成寺に於て百二十一體の仰佛を圖せり治曆四年三月繪佛師僧綱に任せらる此職たる教禪を以て始めとす承法二年三月歿す年七十三

敎懷【畫】左中將藤原敎行の子、與福寺の林戒和尚に從つて唯識の旨を究め後ち高野山に居ること二十餘年寬治七年の夏不動尊の像數百枚を圖す歿する年九十三

曼公【書】戴曼公、明の歸化僧也其先は晉の戴安道より出づ世々山陰の會稽に住す祖父に至つて始めて杭州に居る初名は觀胤字は子辰又中頂後ち名を鼎立、字を則之と改む後に又名を笠、字を耘野とす晩年僧となるに及びて天外戴笠人と號す又就菴天外老人獨立一間人愒芳等の諸號あり又た名を性易と曰ふ曼公は其一の字、明の杭州の人博學にして詩を能くす長篇巨作筆を下せば立ところに成る兼ねて篆隷に工みなり書法王履吉より出で筆法眞に迫る故に其片紙隻字と雖ども人得て之を珍とす又醫に通じ尤も痘科に長ず承應二年明亡ぶ亂を避け薙髮して僧隱元に從ひ長崎に來る尋て洛南菟道萬福寺に移りて隱元の書記となる居ること凡そ七年辭して長崎に歸り文墨を以て自から娛しむ傍ら醫事を行ひ醫神と稱せらる寬文十二年八月隱元を菟道に省す途に病を發して寂す時に同年十一月六日なり年七十七

紫式部【畫】越前守藤原爲時の女なり丹青の技を好み手づから自像を描き近江石山觀音堂に置く其の畫上に二首の歌を題す中頃其の畫散失せしかば近衞信尹之を惜み工に命じて彼の像を倣圖し題字和歌一に舊の如くし再び之を置けりと云ふ

紫翠 尾形乾山の別號

紫狐庵 與謝蕪村の別號

紫石【畫】宋紫石、初め氏は楠、字は君赫雪溪又た霞亭と號す江戸の人初め熊代熊斐に學び後ち清人安紫岩を師とす花鳥に長じ又た墨竹に巧みなり安永三年七月十八日歿す年七十八

紫石【畫】名は淨介、字は紫石、肥前の人

紫山【畫】宗氏、紫山の子、畫を父に學びて能くし當時に稱せらる寬政年中

紫岡【畫】宗氏、雪溪と號す紫山の男なり嘉永三年六月歿す年七七十

紫陽 釋雪舟の號

紫陽 新井白石の別號

雪村【畫】名は周繼、如圭と號す又儉篇齋、鶴仙老と號す雪村は其稱、俗名平藏と云ふ佐竹家の族にして常州常垂村田鄉の人なり其父雪村を廢して其庶子を立てんと欲す雪村乃ち薙髮して曹洞の禪僧となる性畫を嗜み周文の筆意を慕ひ中頃雪舟の筆意を學ぶ因て周雪の二字を取りて周繼雪村と云ふ深く雪舟を慕

ひて畫風能く似たり福祿壽の像及び山水の畫に到りては殆んど雪舟に近し晚年又宋元の名家牧溪顏輝等の風を學び終に新意を出だして一家を爲し周雪二子の筆意を離れて精妙に至る故に當時の人稱譽し爭ひて畫を乞ふ故を以て遺蹟少なからず實に雪舟に次で本朝の能畫と謂ふべし常に唐紙を用ふる事稀にして那須紙を料紙とす世に雪村紙と云ふは之れなり墨畫に長じて彩色之に次ぐ元龜天正の際雪村常陸に流寓す國人其善工たるを知らず往々兒童の爲めに畫を覓む雪村の畫能く其啼を止むと其能畫たることを知るべし時人評して曰く雪村は雪舟が畫く所の氣韻には及ばず雪舟又雪村が畫く所の精巧に及ばずと或は謂ふ雪舟は洞雪を師として雪舟の畫法を得と又た曰ふ雪舟は西邊に在り雪村は東極に居り未だ嘗て遇はず只畫跡を見て師弟となると然れども白井梅泉曰く雪舟は永正三年寂す元龜三年雪村常陸に流寓す永正三年より元龜三年に至る迄其間相距る六十餘年なり故に雪舟に學ぶと云ふよりは洞雪を師とすと云はゞ或ひは是ならんかと雪村貞和二年十二月二日寂す年五十七

雪舟

【畫】名は等楊、雪舟は其號、又た備溪齋、米元山主人、楊智客、雪谷軒等の號あり本氏は小田、備中赤濱の人、年十二三の時同州寶福寺に入りて僧となる天恐畫を好て經卷を事とせず師僧之を戒むること數次終に聽かず一日師僧大に怒り雪舟を堂柱に縛す曉に及びて親ら堂上に到り將に縛を解かんとす忽ち雪舟の膝下に鼠の驚て起る者あるを見る師僧驚きて急に之を逐ふ然れども動かず師僧怪んで之を熟視すれば雪舟の自から脚の拇指を以て堂上に滴る涙痕を點し以て鼠形を畫きたるものなり是に於て師僧其妙に服して復畫を作るを責めず壯年に及びて相國寺の僧洪德禪師の弟子となり又鎌倉に赴き建長寺の玉隱永璵に從ふ永璵雪舟の爲めに漁樵齋の記を作る雪舟以て別號とす常に周文、如拙の繪を慕倣す寛正年中（一說に應仁元年とあり）便船を求めて明に入り四明山に登りて天童禪寺第一座となる故に畫後に四明天童第一座と記せるものあり又扶桑紫陽等楊とも書せる者あり雪舟明に在る時當時の能畫を求めて師とせんと欲す其畫を視るに悉く意に適はず即ち曰く大明國裏師とすべき人なし唯だ明國名勝の地は我が師なりと是れより山水遠寺晚鐘瀟湘の風景を摸して怠らず遂に奇觀を爲す明主其美を賞し敕して禮部院の壁に畫かしむ又其國人の請に應じて本朝田子の浦の景色を畫く留ること五年にして歸朝し周防山口雲谷寺に住す故に雲谷或は雲谷軒と號す後ち去りて石見の大喜菴に居る其畫の妙處は即ち之を天性に得て更に古人の蹤跡を踐まず最も山水に長ず殊に釋尊出山の圖觀音達磨等の圖に至りては筆格粗なりと雖ども其筆力豪俊なること畫工の及ぶ所に非ず凡そ人物牛馬に於ては筆を一點して成る減筆の法蓋し雪舟より始まるなり相傳ふ道元禪師宋に入り自から水墨白衣大師の圖を摸して而して歸る其後歸化の僧に亦た水墨の畫を作るものあり然れども盛んに行はれず如拙周文に至りて專ら水墨畫を作る而れども雪舟別に一格を創するに由て水墨の畫大に行はると雪舟專

ら風致を尙びて形似を求めず書せんと欲する時には先づ醾醪半盃を傾け後尺八數聲を吹き或は詩を吟じ歌を唱へ箕踞盤礴而る後筆を執るに意揚々として恰も龍の水を得るが如し後大內義興書を明に求む明雪舟の書を擇みて之を贈る義興之を雪舟に示す雪舟曰く是れ老衲明に在りし日嘗つて畫く所なりと義興大に怒りて以て己れを欺くとし之を放つ後畫絹物に觸れて汚る因て工に命じて洗除せしむるに雪舟の署名隱々として見ゆ義興始めて其欺かざるを知りて召還す又足利家の命を受けて蘆屋釜の下繪を畫く此圖後世に殘りて世人賞翫す濡れ鳥の類是れなり茶人の賞翫特に厚し永正三年二月十八日歿す年八十七

雪峰【書】小倉氏、名は文熈、雪峰は其號、別に巒觸居と號す江戸の人漢畫を善くす

雪臣【書画】垣本氏、名は雪臣、又莊町、通稱は貢、伊勢の人也伴蒿溪加茂季鷹に就いて和歌を學び又た龍草廬に漢學を學び狂詩狂歌詩文に精し書法又一體をなし畫も亦月溪に學びて能くす天保十年十一月三日歿す年六十三

雪典【書画】桂常政、眉山と號す又通神道人の號あり通稱左司馬 字は雪典、畫を月岡雪鼎に學び花鳥を能くせり

雪山【書画】別所則房、通稱は權右衛門、雪山は其の號なり先哲の遺墨を法として狩野風を能くす

雪城【書】中澤俊卿、字は子國、通稱は行藏、越後の人、長岡藩に仕ふはじめ市河米庵に學び後ち卷菱湖に從ひて書法を學び筆蹟流麗出藍の稱あり資性豪宕磊落奇行多し慶應二年二月朔日歿す年五十九

雪江【書】關氏、名は思敬、字は鐵卿、通稱忠藏、江戸の書家なり鳳岡以來書を以て常陸土浦侯に仕ふ雪江に至りて衣鉢相受くること五世なり雪江人と爲り醇謹にして奇氣あり常に淨瑠璃を好み混堂に至るごとに必ず暗所に蹲踞し得々として一二節を謠ふ人其の雪江たるを知る既に出づれば即ち凝坐沈默與り知らざるもの丶ごとくおほむね以て常となす明治十年十一月二十四日病みて歿す享年五十一

雪蘭【書】大串氏、名は元善、字は子平、平五郎と稱す京師に生る幼にして聰悟絶倫目を過ぐれば誦をなす年十三にして武江に至る水戸侯之に稟祿し小野懋齋に就て業を習はしむ雪蘭經義を研覃し史鑑を咀嚼す孤往獨契にして議論遙かに人の意表に出で藻思敏贍咸な謂ふ出藍の才と既に長じて彰考館の史書を修むるに與かり淹貫密察發明する所多し傍ら皇朝の典故に通じ詞意深邃事實捉摸す可からざる者と雖ども考究硏覈能く其の要領を得櫛比縷折歷々目前に覩るが如し義公其の能を知り能く之を遇す元祿九年鳳山公擢んじて近侍と爲し編輯の事を掌らしむ素と玩羸多病なりしかば是に至りて復た劇事を視る能はず十二月を以て終る時に年三十九

雪山【書】北島氏、名は三立、雪山は其號、又雪山と號す初め花隱、又た蘭隱と號す肥後熊本の人長崎に遊びて來舶人愈立德より文徵明相傳の筆法を得て大に妙所を究む加ふるに張瑞圖を以てす後ち東都に遊びて書名大に鳴る都筑道乙細井廣澤等其門に入りて敎を受く又林春齋、同春德、木下順菴、人見友元等

の諸鴻儒と友とし善し才學共に進む甚だ藏書に富む時人稱して書厨と云ふ素より王陽明を崇む嘗つて岡藩に仕へて祿四百石を食む侯國中の陽明學者に令して其學派を改めしむ雪山性豪放仕途に局促たるを屑しとせず遂に祿を辭し自適を以て事とす家常に貧嘗つて大字を書するに筆なし乃ち薦簾を折りて揮掃す字體遒逸にして奇骨あり清人之れを見歡賞して曰く我邦書を能くするものと雖ども亦之に過ぎずと年老て崎陽に住す性劇飲を好む人其書を得んと欲すれば毎に置酒して之を延く雪山欣然拒まず興酣なるに及びて狂吟放浪立ちどころに揮毫す數百紙其煩を厭はず士大夫と席を接し身に襤褸を纏ふも嘗つて愧る色なし元祿十年十月二十二日歿す

雪溪 宋紫石の別號

雪香齋 松野梅山の別號

雪操【畫】金子大美、字は不言、各半また有情痴者と云ふ南宗畫を善くせり嘉永年中の人なり

雪鼎【畫】月岡昌信、雪鼎は其號、別に信天翁と號す近江の人、移りて浪華に住す初め敬輔を學び後ち變じて能く邦俗の美人を寫す又雜畫に巧なり天明六年十二月歿す年七十七

雪齋【畫】月岡氏、雪鼎の長男にして法橋に敍せらる父の畫風を得たり

雪溪【畫】月岡氏、雪鼎の二男にして雪齋の弟なり父の畫風を學びて能くす後ち法橋に敍せらる

雪山【畫】山崎氏、名は吉、能登の人、平安に住す山水梅竹を能くし大雅の風致あり又書に巧みなり

雪溪【畫】山口氏、名は宗雪、梅菴又白隱と號す平安の人、雪舟及び牧溪を學びて自ら雪溪と號す晩に一格を成す花鳥の如き雪舟の風致を得たり享保十七年九月四日歿す年八十九

雪齋【畫】增山氏、勢州長島の領主なり、名は正賢、字は君選、雪齋は其號、又灌園、玉園、長洲、雲旅、巢丘山人、愚山、石巓道人、蕉亭、括囊、松秀園等の別號あり沈南蘋の畫法を好みて其妙處に至る又詩文に巧なり文政年中の人

雪旦【畫】前川良顯、雪旦と號す京師の人京師法要寺天井の畫龍は其畫くところなりといふ

雪岑【畫】福王雪岑、名は盛勝、雪岑は其號、又た白鳳軒と號す通稱茂右衛門、初め英一蝶の畫風を學び後ち土佐家に移り能及び狂言の圖に巧なり其遺跡世に散在すといへども山水花鳥及び水墨の畫は未だ之を見ず天明五年三月十八日歿す

雪館【畫】櫻井氏、山興と號す江戸の人なり、畫法雪舟より出でゝ多く人物を畫く筆力强健時人に稱せらる寛政二年二月二十一日歿す年七十四

雪鼎【畫】名は慧實、玉韓と號す、圓德寺の僧なり詩を能くし書に巧なり古書古法帖及び文房古銅器を愛し貲を傾けて之を購ふ又好みて山水名勝の地を探討す江村北海と方外の交を爲す年五十に至らずして寂す

雪圓【畫】雪舟の畫法を學びて花鳥を畫がけり

雪澤【畫】奥州の人佛像を畫く雪村の筆意を宗とす

雪丹【畫】雪舟の畫風を慕ひ八の鳩を以て八幡大菩薩の像を作る異作なりと雖も人をして儼然敬畏の念を起さしむ

雪舫【畫】雪舟の筆意を能くす雜

畫を能くするを以て名聲あり

雪洞【畫】會津の人なり雪舟に學びて半身の達摩及び花鳥等を巧にす

雪蓬【畫】小栗十洲の母にして東洲の女なり墨竹及び墨梅を畫くに巧なり

雪匡【畫】雪舟の畫風を學びて墨竹畫を作るに巧みなり又た朝鮮畫風を學ぶ然れども風韻に乏しと云ふ

雪山【畫】雪村の畫風を學び墨畫の梅竹及び花鳥並に山水を能くす

雪休【畫】畫風を雪舟に取る

雪汀【畫】竹に燕雀の圖あり雪舟の畫風に依れり

雪宋【畫】雪村に學びて能くす奥州の人なり

雪津【畫】畫を雪舟に學ぶ永享頃の人

雪江【畫】雪舟に學びて師の風格を得渡唐天神の像あり永享頃

雪心【畫】雪舟の門人なり畫く所出山の釋迦の圖なり墨色枯稿筆意雪舟に似たり

雪林【畫】雪林又た春月と號す畫を雪舟に及ぶ永享頃

雪峰【畫】悟有和尚の法嗣にして高道の人なり曾て小林寺の祖像及び富岳の圖を作る筆意磊落にして生氣あり

雪深【畫】筆澤と號す畫を雪舟に學ぶ雪舟曾て明國より携へ來る所の秘書を以て之に授くと永正頃の人

雪工【畫】雪舟の門に入りて學び師の畫風を能くす

雪信【畫】清原氏、通稱雪、雪信は其號、また匠貴と號す久隅守景の女にして狩野探幽の姪孫なり清原氏に嫁す畫法を探幽に學びて巧みなり元祿十一年歿す

雪信【畫】清水氏、狩野探幽の姪女、探幽に學びて其法を得たり女畫中の巨擘と稱す子春信又畫を學びて頗る巧みなり

雪閑奥州岩城平の人書法を雪村に學べり

雪鮮【畫】櫻井氏、名は絢、字は孟素、雪鮮は其號、字を以て世に知らる雪館の姪にして其家を繼ぎ江戸に住す昌平黌の吏員たり櫻花を愛し其品種一百を選し之を描寫して卷を成す又嘗て丁祭圖を作る傳へて臺覽に供せりと云ふ寛政中の人なり

雪峰【畫】江戸神田大工町に居る初代等琳の門人にして其俗稱を雉子定と云ふ能く師の筆意を傳へ又師の俗稱を傳へて堤孫二郎と稱す二代目孫二郎あり雪丘と稱す俗稱筆安と云ふ

雪耕【畫】名は石心、雪耕と號す

雪樵【畫】名は景莊、字は雪樵、南禪寺に住す

雪峰【畫】名は大覺、字は雪峰、黃檗山の僧たり

雪機【畫】名は定然、字は雪機、黃檗山の僧たり

雪貢【畫】長谷川氏、名は等英、別に茗箒菴、德々齋の號あり江戸の人法橋雪嶺の男にして山水人物花鳥に至るまで皆精妙を極め其の名都下に鳴る

雪旦【畫】長谷川氏、名は宗秀、巖岳齋、又た一陽菴と號す法橋に叙せらる此の家累代長谷川氏を唱へ雪舟の畫風を慕ふ雪旦に至りて特に其風を能す天保中齋藤月岑の江戸名所圖繪を稿するに當りて雪旦其圖を草し月岑及び同志一二人と日々に諸名勝を探り僧寺及び故家に就きて其事蹟を質し隨ひて聽けば從ひて錄す獨り雪旦或は坐し或は立ち出入徘徊其眞景を摹す御茶の水の邊に鰻亭あり守山と呼ぶ一客來りて酒飯を命じ鰻を啗ひ深

く亭榭の結構と山川の位置とを觀悉く寫して去る其夜亭に盜あり主人思へらく畫間圖をなし去るもの丶所爲なりと他日その客復た來る主人之を捕吏に訴ふ吏鐵棍を揮ひて入り將に之を縛せんとす客駭然として大に驚く吏中客を識るものありて曰く是れ畫師雪旦なり平生篤實謹厚何んぞ賊をなす者ならんやと乃ち問うて曰く叟何を以て屢々來て此家を窺ふや答へて曰く頃者老友齋藤氏江戸名所圖繪を編し其附圖を余に囑す故に來りて勝地の眞景を寫すのみと乃ち稿本を出して吏に示す吏の意解く主人之を聞きて深く其粗忽を謝す滿坐一大笑をなして別ると江戸名所圖繪の一たび出るや聲聞大に藉く天保十四年正月二十八日歿す年六十六

雪堤【畫】長谷川氏、名は宗一、雪堤と號す、別に梅紅、松齋と號す江戸の人、父雪旦に學びて雲谷派の畫を能くす明治十五年三月十五日歿す年六十四

雪斧【畫】吉澤氏、小造化盧と號す東京の人、遠坂文雍の門に學び善く山水花鳥を畫く明治二十二年歿す年八十餘

雪江【畫】堀江氏、岡本豐彥の弟子なり天保年中の人

雪齋【畫】佐藤氏、出羽の人、安政年中

雪齋【畫】吉田氏、文久年中の人

雪山【畫】提氏、俗稱を諸岡千代松と云ふ雲舟の畫法を慕ひ遂に一家をなす天保年中の人

雪山【畫】松平氏、水戸の人、雪舟の畫法を學ぶ天保頃

雪麿【畫】元越後高田の藩士にして田中善三郎と云ふ畫を喜多川月麿に學び後ち畫事を廢して專ら戲作を業とし黑川亭と號す天保年中の人

雪圭【畫】岡本氏、鶴澤探鯨の門人、安永年中

雪境【畫】北尾氏、鶴澤探鯨の門人、安永年中

雪信【畫】北村雪信は江戸の人なり嘉永年中

雪信【畫】葛飾の北齋の別號

雪虹【畫】花澤氏、奧州の人なり畫法を山本梅逸に學びて最も山水花鳥を能くす安政六年三月歿す年八十五一に小梧山人と號す

雪虹【畫】長鹽氏、雪山の子、書を父に學ぶ天保年中

雪谷【畫】仙石氏、信濃の人、漢畫を能くす文政年中

雪峰【畫】二代目等琳の子、提孫二の號なり畫を父に學び江戸神田大工町に住す文化年中

雪居【畫】尾張の人、鑑賞に精しく收藏甚だ富む嘗て臨模を能くす常に中林竹洞と友善し文政年中

雪研【畫】八木氏、逸十郎と稱す播磨の人、天保年中

雪海【畫】櫻井豐彥と稱す文久年中

雪屋【畫】窪田氏、縫殿助と稱す越中の人、天保年中

雪庵【畫】三谷雪庵は文久頃の人

雪窓【畫】小磯前氏、菊地容齊の門人、安政年中

雪堂【畫】藤井氏、京都の人文政年中

雪翁【畫】遠阪文雍の號

雪圭齋【畫】岡本氏、鶴澤探鯨の門人、安永年中

雪下園【畫】鈴木鳴門の別號

雪閑齋【畫】狩野永德重信の三男なり僧となり京都妙覺寺に住し圓藏院と稱す畫法を父に學ぶ慶長年中歿す年四十四

雪蕉菴【畫】大岡春川の子なり畫法を父に學び法橋に

叙せらる天明年中

雪靜齋 大岡春朴の別號

雪月書屋【書畫】田能村竹田の別號

雪耕山人【書畫】下野の人文化年中

雪月嘯廬 宮本高軒の別號

寂本【書畫】長谷川氏、雲石堂と號す紀伊高野山の住僧にして山城深草の人なり天資明敏少時高野山に登り應盛阿闍梨に從ひて落髪す幾ばくもなくして應盛寂せしかば快雲阿闍梨に就ひて法を修す螢雪の功空しからず妙法玄理に通ず又外典に精しく詩を賦し書を善くし書に巧みなり又彫工の技に長ず元祿十四年十月十五日寂す年七十一

寂窓【書畫】世繼寂窓、名は眞員、字は伯周、希仙と號す初め台六と號し晩に寂窓と改む俗稱岐阜屋八郎兵衛京師の豪商なり初め月僊に學びて後元明の古法を慕ひて其技大に進む又和歌連歌に通じ茶道に精し又茶碗を作るに巧みにして世に平安の六本杉と稱し頗る世の稱譽を博せりといふ

寂源【書畫】藤本敦直の子にして高良山の座首なり大僧正となる兼ねて書傳を本莊道芳より傳はり特に能筆の聞えあり

寂濟【書畫】土佐光顯の次子、後六角氏と改む畫法を父に受けて妙手に至る前兵部少輔と稱す永德中の人

寂傳【書畫】名は寂傳、字は道本、竹林又莊亭と號す黃檗派の僧なり

寂道【書畫】名は寂道、字は太玄龍井と號す詩文をよくして世に稱せらる

寂嚴【書畫】名は爲歡、字は寂嚴、松石と號す

寂蓮 藤原俊成薙髪後の號

寂譽【書畫】土佐光則の二男にして光起の弟なり僧となり攝州寶樹寺に住し曉天和尙と稱す畫法を父兄に學べり萬治三年寂す

寂超【書畫】藤原爲隆の號、寂念、寂然、寂超此三人を世に右京の三寂と稱す寂超爲隆は即ち藤原隆信の父なり皆書を能くす

寂室【書畫】元美作の人、約翁の法嗣にして永源寺の開基たり書畫を能くす貞治六年寂す年七十八

梵芳【書畫】相國寺の開山普明國師の弟子にして腕玉子また山林知足軒といふ書は明の雪牕を學び蘭花に妙を得たり牧溪の風あり

梁盛【書畫】盛孝の門に入りて和歌を修め又書を能くす享祿中の人

梁益【書畫】渡邊氏、大坂の人、畫を夏目梁祐に學ぶ天保年中

梁祐【書畫】夏目氏、京都の人、天保年中

野亭【書畫】山田氏、通稱啓藏、案山子と字す大坂の人、戲作者なり狂歌狂詩を能り又戲書を善くす晩年薙髪して意齋と號す

野宮【書畫】牧溪の畫風を慕ひ周文に學びて能くせり

將監【書畫】岩本氏、卓次郎、又孤松と稱す後に競兵衞と改む又大隅守と稱す信濃諏訪の人なり德川忠輝に仕ふ大坂の役に忠輝大和口にあり逗撓して進まず孤松諫爭すれども忠輝聽かず東照公大に怒り信州

高島に竄す時に寛永三年丙寅四月二十四日なり扈從するもの正木左京進、千木内匠等四十餘人なり乃ち兄正範の家に寄食し時に畫に志し山水草木鳥獸花卉を見る毎に其形を摸し其狀を寫し奕々眞に迫る嘗つて梅花枝上の鶯を畫く奇姿翩々將に翅を張り飛ばんとす京師の人永井某今猶ほ其畫幅を藏し其鶯の足に結ぶに針を以てす或る人其故を問ふ某曰く此鶯眞に逼り時々綿蠻戶外に飛び泥を啣み來るの想ひあり故に其をして飛ぶ能はざらしむるなりと故に人其畫を稱して泥鶯と曰ふ寛永十九年七月十七日歿す

將監【畫】相馬氏、奥州相馬中村の人、中村の地初めて陶器を作るや將監馬を描き大に世に行はる今に相馬燒の馬を描くは將監より始まると云ふ

乾山【畫】尾形乾山、光琳の弟なり名は深省、尙古と號す又紫翠、陶隱、習靜堂、靈海等の別號あり京都に住す其家居は皇城の乾に當れるを以て乾山と號す畫を兄に學びて能くす又巧みに陶器を製す其器風韻あり世之を乾山燒と稱す又和歌及び點茶をよくす後江戶に出でゝ入谷の里に住す寛保三年六月二日歿す年八十二

乾山【畫】倉石氏、米山の子なり山水に長じ又た蘭竹を能くす

清信【畫】鳥居氏、通稱を庄兵衞と云ふ江戶難波町に住す初め菱川風の畫を學び後一變して遂に一家をなす常に江戶歌舞伎劇場の看板を畫く爾來今日に至るまで皆鳥居風を以てす又當時江戶繪と稱して一枚摺の繪を發行す又た草双紙の板下繪を巧みにす享保十四年七月二十八日歿す年六十六、鳥居派の開祖なり

清倍【畫】鳥居氏、江戶の人、庄助と稱す初代清信の子、父の畫風を學びて能くす世に大和繪師と稱す寶曆十三年二月歿す年五十八、鳥居派第二世

清滿【畫】鳥居氏、通稱半三、清信の男、家風を守りて畫を能くす江戶歌舞伎の繪看板及び一枚摺の江戶繪又た草双紙の板下等を畫く天明五年四月三日歿す年五十一鳥居派第三世

清長【畫】鳥居氏、關氏、俗稱市兵衞一に新助書肆白木屋市兵衞の男にして三世鳥居清滿に就き畫法を學びよく古格を守り夙に出藍の譽ありしが後畫風を一變し一機軸を出だし元祿寶永以來の名手と稱せらる時に其師清滿死して後なし清長深くこれを痛み終に師家に入り鳥居四世と稱し其家傳來の芝居看板を畫き清滿の女婿松屋龜次の一子を養育し終に鳥居家を繼かしめたりこれを五世清峰とす此事當時の一美談となり人皆清長が已の意を枉げて幼稚を養育し師家を繼がしめたるを嘆賞せり彼の清長が金太郎畫の大に行はれしも蓋しこれが爲めなるべし其の所長は風俗美人畫にして殊に武者繪に長じ筆力健剛にして艶麗なり世に有名なる喜多川歌麿に比して優るとも劣るを見ず鳥居派六世中第一の名手と稱すべし文化十年八月二十日二歿す、鳥居派第四世

清峰【畫】鳥居氏、清滿の孫、後ち名を二世清滿と改む實は清滿の女婿縫箔師某の男關清長の門に入りて鳥居派の畫を學び江戶三歌舞伎の繪看板及び番附

繪双紙等を畫けり江戸和泉町に住す明治元年十一月二十一日歿す年八十二、鳥居派第五世

清滿【畫】鳥居氏、五世清滿の次子にして初め清房と稱せしが父の後を繼ぎ清滿と稱し鳥居家第六世となる明治二十七年歿す或は曰く二十五年八月十九日年六十一鳥居派第六世

清經【畫】鳥居清經大三郎と稱す清滿の門人明和年中

清正【畫】鳥居清長の門人なり俳優の似顏又は劇場の看板を畫けり文政中

清勝【畫】鳥居清長の門人、俳優の似顏劇場の看板を畫く天明頃

清政【畫】鳥居派の大和繪師なり鳥居清長の門に入りて學ぶ俳優の似顏又は劇場の看板を畫けり

清忠【畫】鳥居氏、一世鳥居清信の門人なり兩國米澤町に任せり

清眞【畫】奥山氏、狩野安信に學ぶ後法橋に叙す慶安頃

清友【畫】奥山氏、清眞の男、父及び狩野安信に學ぶ正保頃

清拙【畫】名は正澄、字は清拙、明國福州の人大鑑禪師と號す來朝して南禪寺にあり

清巖【書】名は宗渭、自笑子と號す大德百七十世寬文元年十一月寂す年七十四清淨本然禪師

清俊【畫】中原氏書を善くし右史生に任ぜらる詔を奉じて主基の屛風を畫きたりと傳ふ

清亮【畫】月峰の弟なり書を能くし双林寺內に住し大雅堂の跡を襲げり

清忠【畫】書法を直能より學び墨畫の山水を能くす

清閑【畫】河井氏、姓は伴、清閑は其號、狩野安信の門人なり後ち洞雲益信に從ひて學ぶ貞享の年中

清盛女【畫】平氏、七條隆信の室なり和歌を善くし圖畫に長ぜり應保中の人

清春【畫】近藤氏、助五郎と稱す江戸の浮世繪師なり鳥居清信の門人にして當時風俗の人物美人遊女等の畫に巧みなり又草双紙の版下を畫く又傍ら戲著をなし自から畫き又自から之を開板し大に弘む始めて泥畫を畫けり正德享保の頃の人

清暇【畫】玉堂清暇、法を明晁にとる花鳥をよくす

清勝【畫】鳥居清長の門に入りて學ぶ俳優の似顏又は劇場の看板を畫けり天明年中

清信【畫】狩野氏、元信の遺法を學びて一派をなし周文の筆意あり古內記と稱す寬永年中の人

清溪【書】山本氏、原と藤原氏、名は正臣、字は欽若、清溪は其號、京都の人、家世大炊御門家に仕ふ從四位に叙し近江守に任ず國學に精しく又た和歌を善くし書に巧みなり晚年江戸に遊び文政六年九月十四日を以て江戸の旅客中に歿す年七十

清暉【畫】横山氏、通稱詳介、京都の人、江村春浦に學びて終に一家を成す天保中歿す

清暉【畫】小幡氏、通稱與三右衛門、美濃の人、文政年中

清元【畫】鳥居清滿の門人、享保年中

清政【畫】鳥居清滿の門人、寬政年中

清高【畫】鳥居清滿の門人、寬政年中

清方【畫】鳥居清春、の門人、正德年中

清定、清久、清時、清之、清房等鳥居清信に學び天明寬政年間の人

清

崇 大槻盤溪の名 **清淑**【畫】女史は中林氏、通稱くに、竹洞の女なり書を父に學びて山水に長ず天保二年生 **清暉閣** 趙陶齋の別號 **清日居士** 平林靜齋の別號 **清風堂** 古賀穀堂の別號

康西堂【畫】鎌倉建長寺の西庵に住す書を能くするを以て名あり祥啓之に從て學びしといふ **康房**【畫】其畫頗る上古の風あり醍醐寺の報恩院の藏する所に山水の畫あり

盛信【畫】河野氏、本と源氏、通稱七兵衛、肥前長崎の人、安藝嚴島に揭ぐる所の蘭人入港の圖は其畫くところなり承應年中の人 **盛雲**【畫】越後法眼の門人なり享祿年中 **盛儀** 松本董堂の名

深江【畫】巨勢氏、公望の子なり父の業を受けて畫を能くす **深省** 尾形乾山の別號

淑幹【書畫】藤原氏、下總守櫻麿の男内麿三世の孫書畫に巧みなり

庸守【畫】關氏、東渠と號す浪花の人、山水を能くす **庸山**【畫】濱池任重、伊勢の人、元人の法を模し其畫格雲泉と略相同じ

紹祥【畫】曾我氏、宗譽の男なり家風を學びて花鳥を畫けり **紹叔**【畫】曾我氏、紹祥の男なり家風を守りて畫を能くせり **紹覺**【畫】禪僧なり十六羅漢の圖を畫けり至德元年九月寂す **紹仙**【畫】曾我氏、一に玄仙と云ふ宗丈の男也畫風父に類す筆力も亦父と相伯仲せりと **紹等** 僧墨齋の名 **紹貟** 雨華庵鶯一の名 **紹貟** 鍬形政美の名 **紹俊** 曾我直庵の名 **紹益** 海北友松の名

常氏【書】飯尾氏、鳥羽宗慶の門に入りて其技に達す **常房**【書】飯尾氏通稱彥六左衛門、室町家の書史たり又た和歌を能くす **常山**【畫】小栗氏、名は愼、直之進と稱す、常山は其號、宗栗の後裔、畫を能くし詩に巧みなり天明四年正月歿す年二十二 **常知**【畫】片岡氏、狩野常信に學びて畫法を能くす **常竹**【畫】可兒氏、畫法を狩野常信に學びて能くせり **常則**【畫】飛鳥部氏、天喜延曆の二朝に仕へ畫を以て厚祿を食めり曾て獅子を畫く犬之を見て吠ゆといふ巨勢公望等と其名を等しうす **常曉**【畫】佛畫を善くす貞觀七年十一月三十日歿す **常慶**【畫】日比氏、通稱權十郎、狩野安信の門人也 **常貞**【畫】日比氏、狩野安信に學び後法橋に叙せらる **常繼**【書】藤原氏、葛野麻呂の子、資性明幹にして威儀あり少うして大學に游び史漢に通じ文選を諳誦し能文家の聞えあり又書を巧みにす特に隷書に長せり承和七年薨ず年四十五 常

行〔畫〕狩野常信に學びて書を能くす

常信〔畫〕狩野氏、通稱右近、養朴と號す又た青白齋古川叟、寛耕齋等の號あり中務卿法印に叙せらる尙信の長男なり父に就いて畫法を學び硏精怠らず遂に大家となる又た古畫の鑑識に富み兼て俳諧を善くす正德三年正月二十七日歿す年七十八、木挽町狩野氏第二世

常昭土佐光起薙髮後の號

常覺土佐光芳薙髮後の號

常山土佐光成薙髮後の號

常尹御園中渠の名

常方〔畫〕野矢氏、通稱與八、蓼園と號す少壯武術を好み最も槍技に長じ志賀與三兵衞の後を繼ぎ寶藏院流師範となる又た澤田名垂に從つて和歌を學び其後を繼ぎて和歌所の師範たり傍ら茶を好みて茶器を作るに巧み也慶應四年即ち戊辰の難に力戰して斃る年六十七

淳信〔畫〕狩野淳信、壽石と號す、一に又敦信、外記と稱す彰信の長子永德に就いて畫法を學べり文政十三年十一月歿す年四十九

淳信狩野松林の名

曹洞〔畫〕其筆法眞相より出で墨畫の人物に巧なり天文年中

笛浦〔畫〕野田氏、名は逸、字は子明、俗稱を希一と云ふ丹後國田邊藩主牧野氏の臣、父母に事へ純孝奉養至らざる所なし年甫めて十三江戶に遊び古賀精里の門に入る當時家貧しく備さに艱苦を嘗め精志勵行學問文章大に進む藩主之を聞き學資を給し其志を成さしむ文政九年清國の商船得泰船號駿河の清水港に漂着す駿府代官羽倉簡堂その措置を掌どり幕府の儒員古賀侗庵に謀り其才筆談に任ふるもの一人を擧げ該船を長崎に護送せしめんとす笛浦時に年二十八昌平校にあり侗庵乃ち笛浦を薦む由てその官差に應じ清人に接し筆談するに及んで才辨縱橫大に清客江芸閣、朱柳橋等を敬服せしむ船を同うして長崎に回航するの間六十日唱和の文詩海內に傳播し名聲頓に顯はる載せて泰得船筆語にあり前後藩主の知遇を得拔擢せられて執政に任す藩治文教に於て裨益する所尠なからず晩年屢々骸骨を乞へとも聽されず安政六年七月二十一日病を以て歿す年六十一

荷汀〔畫〕村上椒、字は其聲、秀一郎と號す荷竹は其號、又半牧と號す、慷慨家なり幼にして書を能くす明治元年六月十四日自殺す年四十四

魚彥〔畫〕揖取氏、初の名は景良、後ち魚彥と改む通稱茂右衞門、幼より讀書を好み又た丹青の法を寒葉齋凌岱に學びて能くす天明三年三月二十三日歿す年六十

魚大〔畫〕佐藤氏、字は士部、水石と號す浪花の人畫風自から一家をなす

崧岳〔畫〕鳥山宗成、字は世章、宇內と稱す越前府中の人、宇士昻の門人、初め醫を學ばんと欲して京師に遊ぶ士昻一見して其詩才あるを知り儒者たるべきを勸む竟に之に從ひて經史を硏究し早に時流に

稱譽せらる後ち年五十を過ぎて大坂に徙居し混沌詩社に加はり詩を以て業とす常に耆宿を以て自ら居り詩社の飲會毎に必ず自ら上頭に坐し葛子琴賴千秋を視ること小兒の如し然れども其人となり質實謙虛音容温雅安永五年三月二十五日歿す年七十餘

淇園【書画】柳澤淇園、本姓は曾根、名は里恭、字は公美、淇園と號す、竹桂また玉桂の號あり初め下野と稱す後權太夫と改む郡山の世臣文武の才あり諸藝に通ず人となり磊落不羈常に客を好み一時の名賢を周旋す又野老乞兒を延き飲食を與へて快談す故に得る所の俸祿は皆以て人に貸し毫も遺すなく食客常に數百人に及べり業を物徂徠に詢ひ經史に通じ傍ら書畫を善くす書は最山水墨竹に長ず寶曆八年九月五日歿す年五十三

淇園【書画】皆川氏、名は愿、字は伯恭、淇園は其號、又有斐齋、筇齋の號あり文藏と稱す京師の人生れて穎異四五歳にして能く字を識る其父試みに杜甫秋興の詩八首を書して之を授く日ならずして誦を成す父之を異として書を讀ましむ一過すれば即ち記す父其學をして大成せしめんと欲し經史百家の書其需めに隨ひて之を給す又當時の宿儒耆老と交通往來せしめ年甫て十五韓客を見て席上唱和す詩句甚だ工みなり韓人歎異遂に名を揚ぐ長ずるに及びて恒に謂ふ字義を知らざれば則文作る可らず書解すべからずと是れより思ひを字書に潛め又古人用字の例を類集し之を象形に求め或は聲音に徵し始めて名物の義は聲音に生じ聲音は易經に本づくを知る乃ち音記象式の法を定めて曰く此を以て名物の義を聞かば則ち精微の極と雖ども亦以て通曉し得べし字義既に通じ天理始めて明らかにして而る後古人の書を讀めば則ち明白なること日を掲ぐるが如しと是に於て心を著述に用ふ或は義を思ひて得されば則ち終宵寢ねず之を六經語孟左國等の書に徵して旁引曲證以て孝悌忠信仁義道德の諸名物を審釋して名疇六篇を作る又た字義を推して文理を晰かにし章句を追ひて篇次を繹ね述作の本旨を厚ねて易詩書禮儀周禮學庸語孟の釋解を作る遂に以て一家の學を立つ弟子門籍に登るもの凡そ三千餘名平日人を待つに貴賤一の如く一室の内に在りて迎へず送らず臺閣公卿諸侯中弟子の禮を執るもの衆し而して平戸侯最も敬重すと云ふ淇園傍ら書畫を能くす書は圓山應擧に學びて終に其妙所を得（一說に云く淇園は初め書を望月玉蟾に學ぶ其父賞監を善くす元明の名蹟に遇へば淇園をして謄摹せしむ因て其格を得たり應擧松村月溪等と相親しみ善しと）山水人物花鳥に長じ特に設色を工みにす其山水の密なるものは應擧に劣らず世人甚だ稱譽す文化二年學堂を建て弘道館と云ふ晩年書畫大に進む同四年五月十六日歿す年七十四京都京極阿彌陀寺に葬る私論して弘道先生と云ふ

淇水【書】那珂氏、通稱物助、安政年中

筑波【書】石島氏、名は正猗、字は仲綠、筑波は其號、左仲と稱す初名は藝、字は子遊、穎川と

號す進稱與右衞門、遠州濱松の人父を正數と曰ふ濱松侯に仕ふ筑波幼にして絶倫六歳にして書を讀む書及び詩を江戸の徂徠に寄せて業を請ふ年十二韓客に客舍に會して唱和響の如し是に由りて名稍々顯る父致仕して後ち其祿を襲ふ然れども其人と爲り卓犖豪邁仕進の間に俯仰する能はず遂に臣たるを致して去る京攝に遊び歸途名古屋に滯留すること四年從遊極て多し後筑波山下に隱居す蓋し曾祖正敝下館侯に仕へ舊田宅此に在るを以てなり居ること二年復た江戸に來り服部南郭に從ひて遊ぶ詩才を以て一時に雄視す寛保壬戌徒を聚めて教授す業一時に振ふ諸侯屢々徵せども皆辭して應せず詩は嘉萬七子の風を祖述すと雖ども專ら李王の緒論を墨守せず博く衆家の長ずる所を採る寶暦四年八月十七日歿す歳五十一

筑後【畫】筑後法師は豐後法橋の門流巨勢流の畫家なり其姓氏を詳らかにせず應永年間の人

筑陽【畫】姓氏年代詳ならず雜書を描く

訥庵【畫】大橋氏、名は正順、字は周道、順藏と稱す訥庵は其號、兵學家清水赤城の子なり志氣倜儻頗る讀書を好み經史子集を涉獵し詩文に工み也佐藤一齋の門に遊び學書益進む嘉永癸丑以來國事を慷慨し遂に幕府の獄に繫がる後ち赦されて宇都宮藩邸に幽せられたれとも爲に病を獲て歿す時に文久二年七月十二日年四十七

訥言【畫】田中痴、字は虎頭、大孝齋と號す法橋に叙せらる尾張の人、平安に住す古書の格に詳にして其右に出づるものなし嘗て曰く我若し明を失せば則ち死すべしと晩年盲人となる即ち死せんと欲して食を絶つこと數日未だ死せず依て舌を嚙みて死す時に文政六年三月二十一日時人悼惜せざるはなし

訥菴【畫】宗丹の門にして水墨の花鳥を善くす寛政年中

探幽【畫】狩野家中興の祖、名は守信、幼名四郎次郎と稱す又た采女と云ふ剃髮して探幽齋、又た白蓮子と號す永德の孫にして孝信の長男なり畫を以て宮内卿法印に叙せらる探幽生れて三歳父孝信試みに筆を授くれば啼止む見るもの皆之を異とす四歳にして自から筆を把りて紙に點するに殆んど習熟する者の如し元和四年孝信卒す探幽年僅かに成童を過ぐ其母佐々木氏光信の門人興以（或は意に作る）と共に之を教育す後ち宋人牧溪其他宋元の古蹟を追慕し又可翁及び雪舟の筆意を學び勉强研究遂に一機軸を出す故に畫く所の山水人物草花鳥獸蟲魚悉く其巧妙を窮む而して密畫眞圖に至ては宋の舜擧本朝の古土佐に劣らず故に時人稱して畫仙となす慶長十七年年十一にして德川家康に駿府に謁し爾來屢々柳營に召され畫を以て寵遇を受く元和七年鍛冶橋外に居宅を賜はる寛文二年召に京師に應じて太上天皇の聖容を拜畫す之に依りて筆峰大居士の印を賜はり法印に叙せられ食邑を加賜せらる一旦仙臺侯伊達正宗探幽をして金屏風を畫かしむ探幽仙臺の邸に適き大に墨を硯池に湛し馬履を其中に浸し金屏を延ばして數處に馬履を押し筆を把りて點綴すること數

條正宗憚ばずして入る闔坐皆疑危す探幽徐ろに筆を揮ひて補出すれば即ち履跟は蟹と爲り竪條は蘆となる畢りて之を觀れば即ち蘆間の蟹なり又他の一畫は唯々墨點を數處に散亂するのみ然れども畫を補ふに迨びて終に數千の飛燕を成すと云ふ狩野家數代相續きて畫業盛んなりと雖も吉信に至りて大に衰ふ然るに探幽出でゝより又再盛の徵を顯はし遂に狩野氏を中興す其鍛冶橋に住するを以て世に鍛冶橋狩野と稱す又古畫の鑑定に通じ後證を遺す書は弘法の風を慕ひ高野山の僧春深に學びて大師流を善くす又た小堀宗甫の門に入りて遠州流の點茶を善くし傍ら和歌を能くす京師に生れ後ち東都に住す延寶二年十月七日歿す享年七十三

探信【畫】狩野氏、名は守政、又た忠淵、幼名は圖書、探幽の長子なり畫法を父に學びて能くす享保三年十月四日歿す年六十六

探船【畫】狩野氏、名は章信、探信の長男なり鍛冶橋の家を繼ぐ享保十三年七月二十五日歿す

探常【畫】狩野氏、名は守富、探常は其號、探信の次男、探船の養子となり探幽の後を襲ぐ寶曆六年五月三日歿す

探林【畫】狩野氏、名は守美、探常の長男、父の畫風を學びて能くす安永六年四月七日歿す

探牧【畫】狩野氏、名は守邦、探牧一に探朴と號す探林の長男なり探幽家を繼ぎて幕府の畫事を勤む天保三年正月十九日歿す年七十三

探信【畫】狩野氏、名は守通、興齋と號す探牧の長男、當時名手と稱す屢々抑營の畫事を勤む前に探幽の子に探信あり同名なるを以て之を分つが爲めに世に之を守通探信と稱す天保六年五月五日歿す年五十一

探淵【畫】狩野氏、名は守眞初め探文と稱す守通探信の長男なり將軍家の寵愛を蒙り近侍となり後法眼に叙せらる嘉永六年九月四日歿す年四十九

探原【畫】狩野氏、名は守經、探淵の子慶應二年十一月二十日歿す享年三十八

探雪【畫】狩野氏、名は守定、幼名圖書、探雪は其號なり、又た孟隣齋の號あり主殿と稱す探幽の二子、畫法を父に學び能く其體を得たり父探幽探雪を分家して其の錄を別つ子孫探牛に至りて家絶す正德四年七月十三日歿す

探牛【畫】狩野氏、名は守睦、探牛は其號、探雪の長男なり家法を守りて畫を能くす正德四年八月四日歿す

探淵【畫】狩野氏、名は守尙、探雪の三男なり文久年中

探葉【畫】狩野守安、探葉は其號、寛政年中

探圓【畫】狩野胤信、探圓は其號、探葉の養子也

探淵【畫】山本氏、名は守紀、湖南と號す狩野派の畫家、天保中

探仙【畫】吉村元興、周山と稱す、探仙は其號、狩野派の畫家なり法眼に叙せらる初め西川充信に就いて學ぶまた振付を彫刻するに巧みなり山海經、列仙傳中の人物の狀貌の怪異なるものに至つては到底他人の得て模倣すべからざるものあり其の作すべて彩色なり後ち幾ばくもなくして彫刻を廢す故に世に其眞作多からずといふ安永年間の人

探索【畫】鶴澤氏、狩野派の畫家にして探鯨の男なり父に就いて其家風を受け世に

稱せらる書伯圓山應擧の如き初め探索の門に入りて學びしといふ

探梁【畫】松原氏其の名を詳かにかず狩野探幽の門人なり延寶の頃

探山【畫】鶴澤守見、一に良信又た兼信と曰ふ、探山は其號、又た探泉、探春の號あり東都の人、狩野探幽に學び幽力壯健にして氣骨あり後ち一家をなして法眼に敘せらる

探鯨【畫】鶴澤守美、探鯨と號す探山の男にして父の畫風を能くす

探泉【畫】鶴澤守之、探泉と號す探索の男なり

探美【畫】狩野氏、名は守貞、探淵の四男、皇居御造營の時繪畫御用を命ぜられ又繪畫共進會の審査員となり全國寶物取調掛の職を奉ず明治二十六年歿す年五十四

探香【畫】民形氏、筑前の人なり嘉永年中

探龍【畫】鶴澤氏、名は守昭、探索の子なり畫を以て幕府に仕へ法眼に敘せらる文政年中

探春齋 小柴守直の號

探景【畫】佐久間氏、通稱兵吉美濃の人なり安政年中

探元【書】狩野探信の門人、元祿年中

探幽門下四天王 久隅守景、桃田柳榮、鶴澤探山、神足高雲をいふ

梅隱【畫】有川氏、薩摩の藩士、傍ら畫を善くす明人の法に則つとり墨梅に巧みなり

梅山【畫】松野氏、名は榮輿、梅山は其號、又た雪香齋無我道人、純惠等の別號あり尾張商估の家に生る幼より畫を好みて岩井正齋に學び悉く狩野の奧旨を究め式部卿法目に敘せらる薙髮の後ち岐阜の淨導寺に住す富岳の圖は獨特の妙をなし世に稱せらる安政四年八月四日歿す年七十五

梅堂【畫】小澤敬明字は標七、吳龍軒と號す、別號綾丸書畫に巧にして經學和歌を能くす

梅玄【畫】信州の人なり狩野梅笑の門に學びて出藍の稱あり越後高田侯に仕ふ最も山水に得意にして傍ら義太夫茶道活花に精し荻原才二、望月章齋等其の門に出づ

梅山【畫】尾張犬山常滿寺に住す旭翁の門人なり後美濃古市場天壽庵に退去す墨竹を善くして其の名最も高し

梅軒【畫】雲州の法を學びて世に名あり出山の釋迦畫に巧み也姓氏不詳文安頃

梅信【畫】服部梅信は京師に任じ浮世繪を書く延享の頃の人なり

梅里【畫】名は卯、字は仲己、江戶の人畫を能くせり寬政十年六月二十八日歿す

梅溪【畫】西村梅溪、名は中和、字は士達、梅溪と號す法橋に敘せらる人物を能くし又名所圖に巧みなり大和畫師と稱す文政年中歿す

梅樓【畫】淺井置良、字は士俊、梅樓は其號、淸田君錦の門人にして能書を以て聞ゆ明和九年十月歿す年五十三

梅洞【書】林氏、名は懿、字は孟著、一の字は春信、又三郎と稱す梅洞は其號、又勉亭と稱す、春齋の長男、幼より聰慧にして博く群書に通ず最も詩を善くす寬文四年父春齋命を奉じて本朝通鑑を修す梅洞與りて大に力あり寬文六年九月朔日父に先ちて歿す年僅かに二十四

梅崖【書】【畫】十時氏、名は賜、字は子羽、初め名は業、字は季長、小字は半藏、梅

崖は其號、又顧亭、清夢軒の號あり浪花の人、宋學を好み經義を以て稱せらる又書畫を善くす其餘技藝頗ぶる多し一歲江戸に下る一文士の誘引に從ひ增山侯雪齋の第に到る酒中艶曲をなし且つ歌ひ且つ舞ふ所謂手妻輕業の技に至るまで皆之を能くす坐中の客其妙に驚かざるなし侯意らく是れ牽頭なりと因て纏頭を投じて之を與ふ梅崖笑ひて之を置きて未だ收めず時に客中或は醺酣に乘じて書畫を弄して合作をなす梅崖亦たこれに預る書を寫し書を題す其妙又席中の巨魁たり侯益々驚歎す是より梅崖侯家に往來し遂に聘せられて其家の儒臣となる後辭して浪花に住し文化元年正月二十五日此地に終る年七十三（正念寺過去帳に二十三日歿す年五十六とあり）

梅岳【畫】村上氏、東旭の男也父に就いて畫法を學べり

梅逸【畫】山本氏、名は亮、字は明卿、梅逸は其號、尾張の人、京師に住す明清及び我が先哲の遺法を研究し遂に一大家となる當時中林竹洞と名をうふするに至る山水人物花鳥筆を把れば立ろに成る又燒筆を用ゐずして畫く重疊錯雜の山水及び名花十友等の圖に至りても其位置亂れず布置精巧人をして嘆賞せしむ晩に故鄉に歸る安政四年正月二日歿す年六十八

梅亭【畫】紀時俊、九老と號す、蕪村に就いて山水を學ぶ文化九年七月七日歿す年七十

梅溪【書】李梅溪、名は全直、字は衡正、梅溪は其號、又た潛窩と號す、父一恕、字は眞榮、朝鮮靈山の人、文祿の役年二十三我軍に捕はれて紀州に來り住し敎授を以て業とす梅溪父に從ひて學ぶ父歿するに及びて業を永田善齋に受く學已に成りて紀州侯に仕ふ天和二年歿す年六十六

梅閑【畫】御厨屋梅閑、伯耆と稱す、梅閑は其號、相摸の人、畫法を狩野元信に學び設色の山水花鳥に巧なり永祿頃

梅谷【書畫】十時氏、名は順、字は伯祐、小字は五助、梅谷樵夫と號す梅崖の男なり父の風を繼ぎて書畫に巧みなり

梅癡【書畫】名は秦閒、字は臺純、小蓮社主人と號す、僧雲室の男、人と爲り清淡學に遠し常に文人を愛し交遊多し初め江戸深川本誓寺に住し後擢でられて增上寺に入り其學頭となる晩年に至りて北總弘經寺の主となる書及び詩に巧にしてまた畫を能くし山水墨梅に妙を得たり歿年等詳ならず

梅園【書】三浦氏、名は晉、字は安貞、梅園は其號、又李山、洞仙、孿山の號あり豐後杵築の人、父義一醫を業とす梅園幼にして穎敏初め綾部齋に從ひて學び年十七豐前中津に往き藤貞一の門に游ぶ俊才を以て稱せらる自ら奉する節儉餘あれば必ず施す又米錢を貯へ歉歲に貸出し豐年に息を入る是に由りて飢寒を免るゝもの多し此類の德行少なからず夙に嘉遯を尙ぶ藩侯連りに招聘すれ共皆々之を辭す天明癸卯の歲杵築侯新たに立ち梅園を召見し待つに家老の禮を以てす是より進見每に輙ち政事を諮ふ眷遇益々厚し詩に巧みに書を能くす寛政元年三月十四日歿す年六十七

梅溪【畫】鏑木世胤、字は君胄、長崎の人、移りて江戸に居る沈南蘋に法とり花鳥に長ぜり享和三年正月二日歿す年五十四

梅

嶺【書】名は道香、字は梅嶺、黄檗山の僧たり詩文に名あり　**梅谷**【書】名は道用、字は梅谷、臥龍と號す黄檗山の僧たり　**梅軒**【書】狩野富信、梅軒と號す爲信の子、光信の門人なり寶暦八年五月二十九日歿す　**梅壽**【書】狩野胤信、梅壽と號す光信の門人なり明和八年三月十日病歿す　**梅榮**【書】狩野知信、一學と稱す梅榮は其の號、春雪の二男、能く家法を守る徳川五代將軍に謁し其畫師となる元錄年中　**梅雪**【書】狩野爲信、主水と稱す梅雪は其の號正徳五年三月二日歿す　**梅雪**【書】三谷氏、名は澄、字は士淸、梅雪は其の號、江戸の人、書を廣澤に學ぶ享保年中　**梅春**【書】狩野旭信、一學と稱す梅春、又た眞治齋と號す春笑の二男、後ち梅榮の嗣子となる　**梅舟**【書】狩野民信、梅舟と號す光信の門人なり　**梅潭**【書】杉浦誠、徳川幕府の士也、壯年にして武術を好み劍法に長ず大橋訥庵に從ひて文學を修め詩は初め横山湖山に學び後大沼枕山に從ふ幕府開成所頭取より目付に遷り慶應元年箱館奉行に補す明治元年靜岡藩公議人となり二年外務省出仕となり開拓判官に轉じ累進して同三等出仕に補し正五位に叙す十年職を辭し十二年晩翠吟社を創し吟詠以て樂む三十三年五月病あり從四位に叙せられ同三十日歿す年七十五　**梅外**【書】長氏、名は允文、字は世文、梅外は其號、又南梁と號す豐後國日田郡五馬市村の人、文化七年四月六日を以て生る始め醫を學び又書を修す後ち廣瀨淡窓に從ひて儒學を受く淡窓の父長春菴の遺業を繼ぎて生徒を堀田村に教授す天保年中豐前の彥山に上りて山主に仕ふ山中の僧侶皆梅外に從ひて學ぶといふ安政中外使軍艦を率ゐて我が邦に來航し通信貿易を請ひて已まず而して幕政漸く衰へ尊王攘夷の議論天下に勃興す梅外亦た深く尊攘の志を抱き大に爲す所あるを期す而して長子亦夙に父と志を同くし長州に入り攘夷の軍に與みするを以て大に幕府の嫌忌する所と爲り逮捕甚だ急なり既にして次子黃と云へるもの幕吏に捕はれて終に日田の獄中に死す梅外植田に在り禍將に及ばんとす僅に妻兒と與に逃れて長州に入る是に於て長侯聘して賓師と爲し藩學を督せしむ後ち時勢一變王政古に復す梅外明治五年を以て東京に遷る斯文學會の起るや梅外大に力を盡す所あり其の講師と爲り以て學事に勉む十八年七月天皇參議伊藤博文の邸に幸するや梅外召に應じて書を御前に作り羽二重を賜はる是より先き梅外詩集の刻成る每に之を天皇及び皇后に上り每に絹匹を賜はると云ふ十八年十月四日病に罹り二十八日を以て歿す年七十六　**梅紅**長谷川雪堤の別號　**梅緣**【書】中川氏通稱五郎左衛門、駿河の人、文久年中　**梅甫**【書】長谷川氏、伊豫松坂の人也書法を岡本俊彥に學ぶ安政年中　**梅關**菅井東齋の別號　**梅翁**【書】肥後の人、書を谷文晁岡田閑林に學びて能くし細川家の畫師となる天保年中　**梅溪**田崎草雲の別號　**梅里**徳川光國の號　**梅**

宇 伊藤長英の號 **梅莊** 釋大典の別號 **梅曔** 廣瀨旭莊の別號

得庵【書】鳥尾氏、通稱は小彌太、得庵居士と號す山口藩士陸軍中將に任じ子爵を授けらる又た樞密顧問官となる禪學に通じ詩文書を善くす明治三十八年四月十三日歿す享年五十九

得菴【書】狩野氏、狩野元信に從ひて學びて其家風を得たり

得所【書】佐瀨氏、名は恒、字は子象、得所は其の號、別に松城と號す通稱八太夫、會津の人、幼にして書を嗜む嘗つて長崎に赴き清客錢少虎、江元曦等と筆法を論ず後遂に清國に航し遍く名家を訪ひ質正研鑽二年にして還る東京に寓し名日に振ひ弟子益々進む其書する所修齊廉節の四字曾つて御覽を經描金梅花筆一壽金龍墨両筋を賜はる蓋し異數也得所是に於て其居に命じて梅龍書屋と曰ひ宴を河東の一樓に張り大に賓客を會し御賜を拜觀し席上鶩龍の二字を作る方一丈有餘腕力輕健潑墨淋漓観る者驚歎す得所書に於て學ばざる所なし而して尤も歐陽率、趙松雪を喜ぶ清人と遊ぶに迨びて遂に大に悟る所あり能く一家を成す左院に官し幾くもなくして罷め專ら教授を以て業となす門下殆んど二千人縑素摺帳室に滿ち案に堆かし得所其間に起臥し日夜筆を停めず腕痺れて猶ほ肯て休まず蓋し嗜篤の存ずる所自から其勞たるを知らず然れども遂に此を以て疾を獲て起たず時に明治十一年一月二日なり年五十七

得樓【書】佐久間氏、仙臺の人、雅方の子、書を父に學ぶ明治二十二年歿す年五十

梨堂【書】三條實美、書を能くし歌を詠ず從五位侍從より進みて權中納言に任ず嘉安以降海內漸く多故の時に當りて鞠躬王事に勤勞す文久中朝議一變一旦勅勘を蒙りて長州に下り大宰府に移居す明治中興の際出でゝ輔相となり尋ぎて右大臣を歷て太政大臣に任ず門地高く勳功偉なるを以て百僚之に服す後ち內閣總理大臣內大臣と爲り二十四年二月十九日正一位に敍す此日薨ず

梨雲 狩野舜川の別號

通女【書】井上氏、京極氏の家臣井上儀左衞門本固の女、萬治三年六月十一日讃岐國丸龜に生る幼にして敏慧特に書を能くす年十八にして京極氏の婦人に侍し江戶に至る京極氏は丸龜の藩主なり初め船に上る風荒れて舟漂流す歌を詠じて曰く「しるべせよ浪間をわけて行く舟の心しられぬ八重の潮風」九年を經て歸る今出川前內府、藤堂泉州、酒井雅樂頭、宗對州等の諸侯其奇才を賞し數々之を招致す既にして三田茂左衞門宗壽に嫁す其舅姑に事ふるに婦道をつくしよく勤勉家事を理さむ寛永七年宗壽歿して後ち家事細大となく之を悉く長子某に委し自ら閑に就きて詩歌を賦し以て自ら樂しむ元久二年六月二十三日歿す年七十九

通尹【書】龜谷氏、久我晴通の子、從五位下兵部少輔に任ず墨畫に長ず筆法妙趣あり元錄年中

通圓【書】大慶庵と號す茶道を善くす洛南宇治橋の南岸に住す又書に巧みなり遺墨今尙ほ大德寺中に藏せりといふ

通曉【書】和泉守邦貞と稱す通曉、覺智、隆盛、隆昌の四人合作して信州諏訪

社の繪卷物を書けり或は曰ふ後世之を書ける也と何れか是なる詳ならず

通女【書畫】小野氏、水戶の城主常陸介信吉の子、小野和泉の女、初め織田信長に仕ふ信長亡ぶるに及び隱退して田舍に閑居す後豐臣秀吉の室淀君之を聞き召して侍女となす通博學洽聞善く文を屬し兼ねて書を善くす當時其手跡を學ぶもの多し又書に工みに多く人物を書く筆法狩野光信に出づると云ふ嘗つて淀君通を召して曰く古女の才藝あるものは皆其德を末世に殘す汝亦文を善くし才人に過ぐ何ぞ腕を奮ひて其名を後世に殘さゞるやと通辭するに其の及ばざるを以てす聽かず乃ち舍那王（源義經の幼名）淨瑠璃姬（矢矧驛長者の女）に通ずその事蹟十二段を作りて之を上つる淀君大に感歎し瞽人澤角檢校を召して譜を下し和して以て之を唱へしむ（或は云岩船保校又丹波七左衞門及び橋本筑後なりと未だ其孰れか是なるを知らず）後秀次の家人鹽川志摩の妻となり死別の後德川千姬に仕へ又東福門殿に仕へ後ち其汝河圓（一に淨閑に作る）に依りて信州松本に僑居す元和二年三月五日歿す年五十八

通禧【書】東久世氏、幼名は保丸、竹亭と號す天保十四年十一月京都に生る弘化四年三月元服昇殿を聽され安政六年十月左近衞權少將に任じ尋で國事參政となり三條梨堂等と共に皇威の振張を圖り幕府の忌む所となり梨堂等六卿と難を長州に避く大政復古歸京の後ち議定外國事務掛となり偉勳を以て永世祿一萬石を賜る明治元年外國に使し開拓長官、元老院幹事等に歷任し後樞密院副議長、華族會館長となる詩歌及び書を善くす

梧堂【書】石川總明、字は錫我、一に龜甫、知秋菴と號す德川幕府の旗下、書に巧なり嘉永五年正月歿す年六十餘

梧門【畫】三浦氏、惣助と稱す、南畫の名手にして木下逸雲、僧鐵翁と共に長崎の三大家と稱せらる萬延元年歿す年五十二

梧竹【書】中林氏、名は隆經字は子達、劍書閣主人の別號あり、文政十年肥前に生る秦漢六朝の書法に精通す

梧樓 金井金洞の別號

專定【書】池坊專定、瓢菴と號す平安の人、六角堂內立花の家元なり岸駒に學び巧みに梅花を描け

專尊【畫】大岡氏、男龍五世の孫書を巧にす天智天皇之れを嘉賞し給ひ倭畫師と姓を賜ふ

專念居士 佐々木志津磨の別號

船山【書】草場氏、名は廉、字は立大、肥前の人、佩川の男なり篠崎小竹に學び詩書を能くし又墨竹に巧み也明治二十年一月十六日歿す年六十九

逍遙 三世豐國薙髮後の號

逍遙軒 松永貞德の別號

帶岳 山內林齋の號

章信 狩野探船の名

連山【畫】岩氏、名は昌德、字は士進、縫殿助と稱す岸駒に學びて後ち其養子となる安政六年十月十四日歿す年五十八

累々觀 佐脇嵩之の別號

修紫樓 柳亭種彥の別號

貧樂齋 释祥啓の號

釣雪 释百拙の號

筇齋 皆川淇園の別號

祭魚【畫】喜多川氏、岡本豐彥に畫を學ぶ天保年中

御楯【畫】川邊氏、名は御楯、花陵と號す筑後の人初め畫を父に學び後ち土佐派の畫法を究めて一家を成す

雀山【畫】笠間氏、通稱小隼人、嘉永年中

張竹石 長町竹石又た張竹石と稱す

麻谷【畫】伊豆原氏、通稱橘造、嘉永年中

習齋 堀南湖の別號

習靜堂 尾形乾山の別號

斜月【畫】青山氏、越後高田の人明治二十三年歿す年六十二

混齋 野呂介石の別號

爽軒【書】星野氏、通稱善助、文政年中

琇齋【書】杉村氏、通稱又左衞門、對馬侯に事ふ雪舟の筆意を慕ふ元治元年十月歿す年六十三

第五隆 野呂介石の別號

頂信 狩野休補の名

漢陰 百々俊德の號

移韓 石井潭香の別號

梓山 石原鼎鹿の別號

彪 藤田東湖の名

崋山 渡邊崋山四十歲以後に至りて此の崋字を用ふ

犀潭【書】木下氏、名は業廣、字は子勤、通稱宇太郎、後ち眞太郎を改む又た韓村、澹翁の號あ

り年二十二府學の考試に優等を以て氏を稱し帶刀を許さる天保乙未伴讀に擢じられ中小姓となる轉じて世子の伴讀となり江戸及び京都に在勤す嘉永戊申歸りて府學の訓導を兼ね物頭に進む慶應三年五月歿す年六十三

十二畫

勝川【畫】狩野雅信、素尙齋と號す、晴川の長男なり法印に叙せられ勝川院と稱す父に書法を學びて其蘊奥を極む殊に筆勢遒逸時人に賞せらる嘗て某の需めに應じ千枚書といふものを筆す其の書悉く奇絶感嘆せざるものなし明治十三年八月九日歿す年五十八、木挽町狩野氏第八世

勝山【畫】江戸吉原巴屋三郎左衞門の娼婦なり和歌に巧みに書を能くせり時人大に之を珍重す初め神田雉子町丹後侯邸前津の國風呂市郎兵衞の嫖客接待婢たり當時湯屋みな婦女を蓄へ浴客に侍して其意に從はしむ之を稱しゝ湯女といふ勝山即ち之をなす風呂屋遊女廢せらるゝに及び明曆三年巴屋に移る資性頗る活潑且つ驕奢異風を好み當時流行せしところの俠客の裝を模し刀を帶びて徘徊す其丹前勝山の名あるものは曾て丹後邸前に居住したるの故を以てなりまた毎に髮を片髷に結ぶ其風現今に存し勝山髷と稱するもの是れなり丹前踊も亦是れより出づといふ

勝法坊【畫】法然上人の高弟なり資性書を好み嘗つて上人の像を寫す左右の手に明鏡二面を持ち又水を器に盛り自から之に臨み形容の疑似を考ふ少しも違ふ所あれば則胡粉を加ふ是を以て勝法坊に授くと

勝賀【畫】宅磨勝賀、爲久の子、澄賀の弟なり書を以て法眼に叙せらる書家宅磨の宗家なり也

勝興【畫】福富氏、通稱仁右衞門、最上家の臣なり人物及び鳥獸を善くす元久年中の人

勝以【畫】京師の人、土佐家の門に入りて學ぶ世人呼んで土佐勝以といふ筆力雄健にして戯書に巧なり慶長年中の人

勝道【畫】若田氏、下野芳賀郡の人夙に塵俗を厭ひ修道を事とし傍ら佛像を圖す弘仁の末寂す年七十餘歲

勝尊【畫】醍醐寺の座主なり書畫を善くす時に名聲あり仁治元年四月寂せり年六十九

勝重岩佐又兵衞の名

勝重【畫】歌川國武の門人、浮世繪を能くす文久年中

勝玉【畫】昭信、狩野氏、梅春の男、名は勝玉は其號、狩野勝川に學び書を以て幕府に仕ふ明治二十四年歿す年五十二

勝永鍬移惠林の名

勝永【畫】北島氏安政年中

勝園橋本雅邦の號

勝知宅間爲遠薙髮後の號なり

勝政【畫】歌川國武の門人文久年中

勝秀【畫】歌川國武の門人文久年中

勝信【畫】歌川國武の門人文久年中

勝芳【畫】歌川國武の門人文久年中

勝雲齋【畫】狩野氏、玉圓永信の子、書を父及び勝玉に學ぶ明治中

勝汲齋勝川春亭の別號

勝寂【畫】陶山氏、陸前の人、狩野派の畫を能くす元治年中

爲氏【畫】宅磨爲氏、姓は藤原、巨勢弘高と名を齊ふす是れ宅磨家の祖なり

爲成【畫】宅磨爲成、爲氏の子なり畫所の長者となる永承六年三月歿す

爲遠【畫】宅磨爲遠、藤原氏豐後守に任せられ近衞天皇に仕ふ晩年剃髪して勝知といふ法印に叙せらる佛畫に巧みなり

爲行【畫】宅磨氏、爲久の子なり畫を能くするを以て左近衞將監に任せらる畫家宅磨の宗家寛喜年中の人なり

爲久【畫】宅磨氏、爲遠の第三子、家を繼ぎて下總守に任せらる畫書に巧にして當世無双と稱せらる

爲家【畫】藤原氏、定家卿の男、和歌に名あり薙髪して名を融覺と改む世に民部卿入道と稱し又中院禪門と號す畫を能くし歌仙の像を畫けり建治元年五月一日薨ず年七十九

爲信【畫】藤原氏、父伊信に就いて畫を學び能く其風格を得たり後入道して法名を景融と云ふ嘉元年間の人なり

爲重【畫】藤原氏、爲冬の子なり、和歌に長じ書畫に名あり能く歌仙の像を畫く白描なり至德二年二月十五日薨ず年五十二

爲繼【畫】藤原氏、歌人なり、又た畫を父信實に學びて之を善くす歷官して中務大輔に至る文永二年薨ず

爲龍【畫】平岡氏、通稱澤右衞門薩摩の人、狩野派の畫を能くし筆力遒逸時に稱せらる文政年中

爲恭【畫】岡田氏、名は爲恭、京師の人、初め冷泉三郎と稱す狩野永岳の養子となり後一家を起す宮殿古實位冠の人物を善くし設色甚だ緻密なり書も亦古代の風を能くせり文久三年五月五日歿す年四十二

爲信【畫】狩野氏、休山の子、民部と稱す天明年中、

爲信【畫】狩野氏、大學氏信の子、主水と稱す書法を父に學ぶ正德年中

爲一　葛飾北齋の別號

爲澄　高寸田の名

爲隆【畫】藤原氏、爲正の第三子從五位下長門守に任ず寂超と號し書を能くす安元頃

爲理【畫】藤原氏、爲信の子、初名は爲業右馬權頭に任し從三位少納言に遷る書法を父に受く祖隆信より爲理に至る六代を藤原家と稱す

爲業【畫】藤原氏丹波守爲正の子、從五位下伊賀守に任ず寂念と號し書を能くす安元頃

堅覺【畫】藤原澄憲の子、通憲の孫、安居院法印と號し天台宗の碩德たり法然上人大原問答の席に列し其說く所を聞て大に之に服し遂に淨土宗に入れりと云ふ又文筆に達し餘暇畫事を弄し畫けるもの巧妙なり嘉禎元年三月五日歿す

堅石【畫】萩原氏、通稱鶴夫、安政年中

散木【畫】尾崎氏、蒙所に畫を學びて能くす

登々斉【畫】武元氏、備前の人、漢學に精しく詩文を能くす畫を以て專門とし時に賞揚せらる文政元年二月二十二日歿す

棋一【畫】谷口氏、雪峯と號す、浪花の人、山水を能くす文化年中

菁藻齋【書】山中幸直、字は常坦、鴻池善五郎と稱す鶴澤探泉の門人にして能書の聞え高かりしといふ

菘廬【書】松田顧之、字は多助、菘廬は其號なり、幼にして字を書くことを好み弱冠にして能書の譽れあり長ずるに及んで蘐園諸家の學を修め既にして其非を悟り古賀精里の門に入りて學ぶ精里門下少なからずといへども宏覽强記古今に通じ心を經世の學に留むるもの菘廬の右に出づるものなし能く藩侯を輔けて國政を改むる所多く重用せらる侯の歿後流離沈抑以て老ゆ嘉永五年六月朔日歿す年七十

菘翁 貫名海屋晩年の號

幾齋【書】若槻氏、名は敬、字は子寅、本と京師角倉氏の屬吏なり後ち辭して儒師となり聖護院村に住す篤學を以て聞え又た能書の譽あり文政九年十一月歿す年八十三

惺窩【書】藤原氏、名は肅、字は斂夫、惺窩は其號、又た北肉山人、柴立子、廣胖窩、竹居等の數號あり、播磨の人、其實は下冷泉參議爲純の子なり初め相國寺清叔壽泉和尚の室に入り舜妙壽院と號す後儒に歸し洛北市原邑に住す因て北肉山人の號あり我邦に於て始めて宋儒性理の學を開く又た詩賦を善くし好みて和歌を詠ず元和五年九月十二日卒す年五十九文集二種あり一は八卷、一は十七卷後者は水戶義公之を校し後光明帝の序を以てす希世の榮耀と謂ふべし

惺齋【書】川口氏、名は幽、字は玄道、文化年中

惺々翁【書畫】瀧本坊猩々翁は俗稱式部、惺々翁と號し後ち松花堂昭乘と改む南都一乘院の坊官中沼左京の弟なり書體空海の筆法を修め自から一體をなせり世に松花堂流と稱せられ寛永三筆の一に列せり名聲海內に鳴り從ひ學ぶもの頗る多し書は狩野山樂、同山雪に學びて風韻最も高し又和歌を好みて能くす寛永十六年九月十八日歿す年五十六

惺々 河鍋曉齋の別號

黃山【書】關口氏、名は忠貞、字は世篤、通稱貞助後ち嘉平と改む、黃山は其の號、金鷄の子なり太宰春臺の門に入り未だ弱冠ならずして學大に進み十七史を涉獵し尤も魏晉六朝の典故に精しく名物の稱謂考覈せざるなし人呼びて六朝史童といふ又關鳳岡に從ひて臨池の技を學び六書に精通す父其筆札を以て世に顯れしめんと欲し勤めて止まず黃山亦之れに從ひ是より專ら書を學ぶ遂に一家をなす延享二年四月十八日歿す年僅に二十八

黃山【畫】田黃山は大阪の人、畫を鼎春岳に學ぶ文政年中

黃文 推古天皇の世に來朝せる畫工なりといふ

黃裳 石王塞軒の別號

琢眼【畫】勝山中起、琢眼は其號、又鶴齡子と稱す琢舟の子後法眼に叙せらる

琢舟

【畫】狩野氏、山崎如流齋を師とし學ぶ其畫格狩野風なり後按察使法橋に叙せらる

琢文【畫】狩野氏、琢眠の子なり、家法を繼ぎて書事を能くす

琢華堂 椿椿山の別號

舜川【畫】狩野昭信、舜川と號す、融川の長男、畫法を父に學びて能くす文化十三年三月歿す

舜瑛 谷秋香の名

舜朗 横山華山の別號

舜水【書】朱之瑜字は魯璵、舜水は其號、明の浙江餘姚の人なり、穎悟夙成、九歲父を喪ふ哀毀禮に過ぐ長ずるに及びて業を吏部左侍郎朱永祐、東閣大學士張肯堂、禮部尙書吳鐘巒に受け六經を精硏し特に毛詩に通ず少うして經濟の志を抱く擢ひられて南京松江府の儒學生となる天啓以降政理廢弛し國是日に惡し故に志を仕進に絕ち高踏の風あり崇禎の末恩貢生に擢ひらる考官吳鐘巒の貢劄に稱して開國第一とす屢々徵辟を蒙むれども就かず弘光元年又徵されて重職を授けらる而れども大學士英要路に當り舜水姦黨の爲めに思はるゝを欲せず故に辭して受けず遂に論劾に遭ふ乃ち避けて舟山に行く是の時に當りて淸兵江を渡り天下靡然として滿洲の風に變ず舜水之を惡む乃ち海に浮びて直に我國に來り轉じて交趾に抵る復た舟山に還る適々監國魯王驛を舟山に駐む文武の諸臣交々舜水を薦む舜水豫じめ其の敗を料り上疏固く辭す崇禎年中より徵辟を蒙る前後十二回皆な固辭す監國九年魯王特に勅して之を徵す舜水適々交趾にあり勅を奉じて歔欷慷慨之に應ぜんと欲す會々安南國王舜水を國に用ゐんと欲し召見逼りて任命を拜せしむ舜水長揖して拜せず君臣大に怒り將に之を殺さんとす舜水毫も懼れず面折彌々勵むこと久し安南の君臣其義烈に感じ却つて相敬重す既にして舟山に還り其の己に陷るを聞き進退據を失ふ是に於て時勢己に去り亦爲す可らざるを察し乃ち魯仲連が奏を王とせざるに倣ひ遂に來りて長崎に居る實に我が萬治二年なりはしめ窮困して自ら支ふる能はず柳河の濡員安東省庵之に師事して毎年祿の一半を贈る寬文五年水戸侯光圀其の學識を聞き禮を厚うして之を聘し以て賓師とす禮遇甚だ渥し舜水人と爲り嚴毅剛直動くに必らず禮を以てす風望稜々見る者敬畏す造見毎に談論經により義を守る啓沃備に至る學者に敎授する孜々倦まず老て疾むと雖も卷を釋かず學は實用を尙ぶ凡そ古今禮義の大典より宮室器用の制、農圃播殖の業に至るまで通曉せざるなし義公常に舜水の多能に感ず嘗て曰く無人の國を開くの時に先生一人衆男女を具し其地に至らば學問及び百工の師となり事に缺く所なかるべしと平生潔居猥りに言笑せず唯々邦讐未だ復せざるを以て憾とす明室の衣冠終始改むるなし魯王の勅書奉持身に隨ひ嘗て人に示さず初め舜水國姓爺鄭成功と相議し恢復を謀る是に於て鄭成功遙に書を寄せ告ぐるに日本の援を乞ふを以てす而れども舜水卒に其の志を遂ぐる能はず天和二年四月十七日江都駒籠の邸に歿す年八十三

巽齋【書】【画】木村孔恭、字は世肅、初の名は鵠、字は千里、壺井屋太吉（亦吉左衞門とも云ふ）

と稱す浪花の人、酒造を業とし古堀江の地に居り家甚だ富めり嘗て井を鑿ること數仞偶々古蘆根を獲巽齋喜で曰く此れ豈に古の所謂堀江の蘆かと遂に其堂に名けて蒹葭と曰ふ巽齋人と爲り博學多藝書畫を善くし詩に長じ又た物産の學に精し五六歲の頃大岡春卜に從て狩野派の畫を修め後ち柳澤里恭の漢畫に名あるを聞き其粉本を得て之を學び又た漢學を片山北海に受く十二歲の頃會々熊代熊斐の弟子僧鶴亭浪華に客居す乃ち就て南沈蘋風の花鳥を受け又た池大雅に山水を學ぶ十五六歲の時京師に出で本草學を津島桂菴に受け後ち小野蘭山に從て益々之を究む性素より奇を好み多く珍籍古圖書金石器物書帖を儲ふ故に四方好事の士羨慕來訪するもの多し是に於て交通日に廣く蒹葭堂の名海内に聞ゆ平生酒を好まず茶を用ふ故を以て特に賣茶翁と善し後事に座して家産を蕩盡す因て文房具を鬻て以て業とす享和二年歿す年六十七

巽甫【畫】鳥山氏、名は輔忠、字は巽甫、鶴仙と號す通稱孫兵衛、後若狹守に任ず書體二王、三跡の古風を好みて尤も名あり延寶七年五月二十七日歿す

巽所【畫】八木廸、字は孟津、通稱平太、南畫を善くす大阪の人

閑川【畫】狩野昆信、閑川また青坡齋と號す、幸信の男、木挽町狩野の族、畫法を父に學べり寛政四年四月二日歿す年四十六

閑齋【畫】谷等氏、通稱源兵衛、越後新潟人なり狩野氏に學びて畫を能くし其筆力呉俊明といへども及ぶ能はず然れども妄りに翰を染めず故に其名世に顯れず呉元瀛嘗て此人に就きて少林祖の像を學ぶといふ

閑齋【畫】有坂氏、狩野常信の門人なり元祿頃

閑林【畫】岡田氏、名は武功、字は子豊、閑林と號す江戸の人、谷文晁に學びて畫を能くす嘉永二年十一月歿す年七十

閑齋【畫】林氏、越後新發田の人天保年中

閑齋【畫】三好氏、通稱清彦、文久年中

閑々居 島北嵩の別號又た閑々樓

閑徒老人 中根半仙の別號

棄之【畫】稲原氏、字は舉旃、東岳と號す浪花の人、能く人物を畫けり文化年間の人

超秀【畫】姓氏詳ならず虎竹石を畫けり

菊麿【畫】北川氏、通稱六三郎後ち月麿と改む江戸の人、文化年中草双紙を畫けり

菊子【畫】卜部氏、柴山老人の配なり字は金瑛、詩及書を能くす

菊亭 北尾政演の別號

菊潤 釋月峰の別號

菊阿佛 森川許六の號

菊如亭 秦星池の別號

琳玄【畫】芝琳玄は宅間信春の子、世に芝法眼と稱す奈良に住して春日繪所となり佛畫に巧なり慶長年中

富景【書】土岐家傳へ云ふ美濃の諸侯なり好んで畫を愛し周文の筆意を模し鷹を書くに妙を得たりと其鷹畫の外世に傳はるもの甚だ稀なり應仁年中

富信【書】狩野氏、梅雲爲信の子、書法を父に學びて能くす元文年中

富望山人 三世豐國の別號

富眺庵 三世豐國の別號

富元【書】園井氏、通稱吉之丞、肥後の人書法を狩野探幽に學ぶ延寶年中

富春 百々俊道の號

棠洲【書】玉手氏、人物名所の圖を能くし一家を成す大城の人、明治四年十月二十二日歿す年七十七、子に梅洲あり父に學びて書を能くす

棠隱 伊藤仁齋の別號

尊氏【書】足利氏、始め高氏、法名仁山、地藏の像を書き自贊す筆法緻密なり正平十三年薨す年五十四等持院

尊意【書】姓氏詳かならず畫僧なり洛東智恩院に圓光大師の像贊あり其記に曰く永享八年四月十五日沙門尊意書すと當時の人たるを知るに足る

尊俊【書】有名の畫僧なり文筌と號す官僧正に至る和州菩提山報恩院に住す狩野元信に就いて畫法を學び能く其風骨を得たり最も佛像を畫くに長ず俗に呼んで菩提山の古僧正と稱す龍虎、墨梅、竹、半身の達摩等皆雅趣ありまた和歌及び倭字の書に巧みなり俗姓柳原氏、德行あり享祿年中の人

尊海【書】尊海法眼、大山崎寶積寺より出てたる佛眼曼荼羅の裏書及び軸書にては大永年間の人にして書を善くせりといふ

尊賢【書】伊豫法眼と號す書を能くせり

尊海【書】佛像を畫けり文祿年中の人、芝法眼と名聲を等うす世此人を以て芝法眼となすは誤れり

尊智【書】法眼に叙せらる巨勢派の畫人なり建久年中の人

尊善【書】狩野元信に學びて能くせり

尊海【書】佛繪師にして世に芝法眼と稱す南都に住して春日繪所となる其の畫けるもの興福東大兩寺に多し嘉吉年中の人

尊純【書畫】尊純親王は圓智院の宮と稱す青蓮院四十三世一品天臺座主に補せらる後陽成天皇の皇子なり書畫を善くす畫は初め狩野の門より出で後ち土佐に移る頗る雅致あり書は粟田流の骨法を得て能手と稱せらる水月集三十卷は其先達の善書を臨寫せるものなり承應二年五月二十六日薨ず年六十三

尊圓【書】尊圓法親王は御家流の元祖なり伏見天皇第六の皇子名は守彥、母は播磨內侍といふ、俊平朝臣の女なり天臺座主に任じ二品に叙せらる青蓮院第十七世の門主なり大乘院宮と稱す延文元年九月二十三日十樂院坊に於て寂す年九十九親王初め世尊寺行房に書法を學び行房南朝に屬し北國に段落せしかば其弟三位行尹を師として學ぶ親王其師家の筆力衰へ結構の流弊を慨き上代の書法を參酌し以て一家の法を出す豐美圓勁、所謂御家流是れなり其後ち菁蓮院に門主となる筆法の奧蘊を傳襲し恰も世尊寺歷代のごとく聯綿として絕えず

尊證【書】尊證親王

は後水尾天皇第廿八の皇子、畫を狩野永納に學ぶ世に青蓮院二品親王と稱す元祿七年十月薨ず享年四十四

尊經堂 林羅山の別號

隆達【畫】隆達節の祖なり其世系を詳にせず自庵と號し嘗て泉州堺に來り顯本寺の寺中に住す後ち還俗して髮を蓄へ高三氏に依りて藥種商となる資性頗る音曲を善くしまた文を屬し書に巧なり天正年中小唄節の一派を起し文祿中大に賞玩せらる即ち隆達節なるもの是れなり

隆光【畫】栗田口隆光は土佐光顯の三子、民部と稱す洛東栗田口に住す世呼んで栗田口法眼と稱す父に就いて畫法を學び佛像人物花鳥に巧みなり應永年間の人

隆栂【畫】藤原氏、長隆の子、畫を善くす刑部大輔に任ぜらる

隆信【畫】藤原氏、正四位下左京太夫越中守又た上野介に任ず父は皇后宮少進爲隆、母は若狹守親忠の女、此母後ち俊成の妻となる時に定家家成の兩子を產む故に隆信は定家の兄なり隆信氏を法性寺と稱す畫を春日光長に學び頗ぶる巧妙なり元久二年歿す年六十四

隆能【畫】藤原氏、大職官鎌足の裔、中納言清隆の子なり畫に巧みに繪所預となる中古以來所謂繪所は此の隆能より始まる子亦た隆能といふ

隆親【畫】藤原氏、隆能の子、初め名は隆成畫を能くす備前守に任じ後伊豫守となり從五位下に叙せらる晚年中務少輔に任ぜらる

隆兼【畫】土佐邦隆の二男後に氏を高階と改め別に一家をなす從五位下に叙し右近衛太夫に任ぜらる延慶年中勅命に依りて春日靈元記十六卷を畫く時人之を榮とす爾後其技益進み精妙に至る

隆盛【畫】土佐隆兼の次子にして光顯の弟なり伊豫守に任ぜらる延文中の人

隆兼【畫】何れの人たるを詳にせず畫所預となり四品に叙せらる加茂の祭の草紙を畫きて世に傳はる

隆能【畫】春日氏、基光の男、父の畫法を受けて人物佛畫に巧みなり承保年間の人

隆賢【畫】巨勢寬信右玄子と號す

隆泉【畫】通稱理兵衛狩野松榮の門人なり

隆忠【畫】野呂氏 介石の男、字は周輔父に畫法を受けて能くす

隆長【畫】鷲尾氏從二位權大納言たり狩野永納に學びて人物花鳥を善くし密畫の彩色に巧なり元文元年九月十八日薨ず年六十五

隆琦 釋隱元の名

隆正【畫】山本氏、通稱安正、江戶の人嘉永頃

隆古【畫】秦氏原と川勝氏、通稱斧四郎、下野の人、高久靄崖の家を繼ぎ後ち故ありて去る初め依田竹谷に從つて畫を學び學梅齋と號す壯にして京師に至り渡邊清、浮田一蕙等に從ひ遂に一家を成し世に稱せらる安政六年歿す年五十九

隆久 高田敬甫の號

敦直【畫】藤木氏、加茂の祠官にして世々書法を傳ふ藤木流正統三十五世なり三跡及び空海の筆意を慕ひ遂に其の妙を極め寬永年間名聲海內に傳播す其門に入りて學ぶもの頗る多く竟に書博士の任を中興

す世に之を加茂流又た甲斐流と稱す其墨跡に落款あるもの少し其言に曰く後世我書と等しき能書出では本道の幸甚し何ぞ落款を要せんやと慶安二年正月四日歿す年六十八

集雲〔書〕〔畫〕名は守藤、集雲は其字、江湖山人と號す東福寺の僧なり書畫を善くす元和中寂す

順專〔畫〕高野山の僧にして高德の聞えあり能く佛像を畫く寛永の末年寂す年九十餘

順定〔畫〕光琳の畫風を能くせり寶暦年中

順信〔畫〕紀氏、奥州會津の人、狩野泰信に學ぶ享和年中畫

順固〔畫〕廣瀨氏、江戸の人なり岸駒に學ぶ天保年中

順香 英一蝶の名

順庵〔書〕木下氏、名は貞幹、字は直夫、順庵は其號、又た錦里、敏愼齋、薔薇堂の號あり通稱平之允、京師の人、幼にして岐嶷五六歳にして善く書を讀み字を寫す聰明卓犖群兒に異なり僧天海一見之を奇とし以て法嗣と爲さんと欲す順庵肯せず年十三太平頌を賦す詞旨順正世以て國瑞とす大納言烏丸公之を後光明帝に上る帝覽て大に稱賞し將に祿用せんとす會々帝崩じて果さず既にして松永昌三の門に入りて性理の學を修め勤苦砕勵學行大に進む昌三期するに大器を以てす既に長じて京師の東山に帷を下して教授すること二十年名聲天下に聞ゆ天和二年將軍綱吉召して幕府の學識に補す順庵時に年六十二門下高材逸足輩出す新井白石、室鳩巣、榊原篁洲、雨森芳洲、祇園南海等其魁たり元祿十一年十二月二十三日歿す年八十八私に謚して恭靖といふ

渡〔畫〕佐野渡、本姓は田沼、名は道信、通稱小右衞門、狂歌師にして書を能くせり江戸青山久保町に住し質商を營めり初め狂歌を朱樂菅江に學ぶ狂名を國府香義と云ふ後に「さのゝわたり」と改む竹を畫くに妙を得書名を統竹亭淇園、看香羅田々、案山子等の號あり又待伴舍、芙蓉樓等の別號あり天保八年正月元日剃髪して元日坊立春と戲號す同年三月病歿す年七十六

渡水〔畫〕小川氏、備中の人、嘉永年中

棕軒〔畫〕阿部氏、福山の領主、字は子純、棕軒は其號、備中守侍從に任ぜらる天性書を好み沈南蘋の畫風を愛し之を臨摹して怠らず遂に其妙所を得たり花卉鳥獸に巧みに殆んど南蘋と相判別しがたきものあり多くは皆設色にして水墨のもの少なしまだ詩文を善くし增山雪齋と其名を等しふす文政九年六月二十日歿す年五十三

棕隱〔書〕中島氏、名は規、字は景寬、文吉と稱す又た道華庵、書餅居士と號す泰志の子、初め二條巷に居る因て樓名を銅駝餘霞樓といふ人となり放縱にして檢束せず文を能くし詩に長ず安政二年六月廿八日歿す年七十七

惠林〔畫〕隱元渡海の時より隨侍し黃檗山第三世となる又た墨色の文殊を畫く其の筆力凡ならず

惠心〔畫〕卜部氏、名は源信、大和の人、每に彌陀來迎の畫を作り且つ彌陀の像を彫刻す遺跡國

内の散在して衆庶之を尊信す其の師傳詳ならずと雖も其の書專修淨業の爲す所にして天然の業なるべし寛仁元年六月九日寂す

惠奯【書】名は鄂隱、字は惠奯、天龍寺の住職、詩名高し

喜左衛門【書】若芝、初代の彫工なり、肥前長崎の人、唐畫の山水遠景の人物又は風竹蟠龍を彫るに渴筆或は寫眞の趣に擬し妙を得たり其の初めは蘭人より書法を傳はれるものなりといふ

喜山 足利義政の號

喜齋 岡本宣就の別號

喝浪【書】名は方淨、字は喝浪、黃檗山の僧住たり詩文を能くす

喝禪【書】名は道和、字は喝禪釋氏なり

喝首座 建部凌岱東福寺の僧たりし時この號を用ふ

善元【書】牧溪を學べり而して其風格周文より出で能く其體を得たり

善玖【書】名は石室、字は善玖知識の名あり

善身堂 龜田鵬齋の別號

善輔 西川爽軒の名

善了 木村永光薙髮後の號

善庵【書】朝川氏、名は鼎、五龍、江都の人、父片山兼山原氏を娶る三男一女を得多病にして中年に歿す三子尙ほ幼原氏依賴する所なし乃ち遺孤を携へて醫人朝川默翁に適く默翁四子を撫育すること所生の如し最も其季を愛し親ら句讀を課す季は即ち善庵なり年甫めて十二に及び學に山本北山に就く北山一見之を偉とし呼で神童となす既にして默翁善庵を拉し京攝間に遊び交を諸名彥に結び居る三年にして歸る寬政戊午長崎鎭臺肥田豐州に從て長崎に赴き又た南肥薩摩を遊歷す五年を經て歸る學益々博く經業尤も精し時に松浦侯其名を聞き之を延て厚く禮遇す列侯贄を取て業を受くるもの十數藤堂氏大村氏尤も親昵する所なり文化十一年默翁即世す歿するに臨み遺言して曰く汝は吾が生む所にあらず實に兼山遺腹の子なり今汝三十余歲學既に成る汝ち當に本姓に復し以て先業を繼ぐべしと善庵これを聞て愕然始めて其の生む所の父あるを知る然れども默翁撫育の恩生む所に過ぐ遂に固く請ひて終身朝川氏を冒す乙亥の冬淸國海舶漂うて豆州下田港に至る異俗言語通ぜず下田は菲山縣令江川氏の管する所なり善庵縣令の召に應じて筆語贈答し國體を辱しめず帛金若干を賞賜す弘化三年丙午閏五月幕府の召を辱うし謁を賜はる世之を希世の榮と云ふ嘉永紀元十二月病に嬰り翌年二月七日歿す年五十九

渤海翁【書】名は保、字は享、北門と號す其先は世々洛西吉祥院村の人なり父の時より京師に住す書を善くして名聲鳴る

統泰【書】窪田氏、藤右衛門と稱す書を業とす天文年中の人

湊水【書】渡邊從、字は周本、甚藏と稱す湊水は其の號、明の文衡山を摸して淡墨の山水を能くす明和四年八月三日歿す年四十

壹岐守【書畫】和久氏、足利義政に仕へて尹京となる平生書を好みて常に馬を書く

智傳【書畫】單菴と號す、相國寺の僧なり周文に學ぶ後牧溪玉澗の筆意を摸し好みて水墨の圖を作す甚だ佳なり

智琢【書】玉峰智琢、字は玉峰、駿州清見寺の住僧なり書を善く又し書を巧にす永享中寂す

逸馬【書畫】葛飾氏、北斎の門人に北馬なるものあり逸馬は乃ち北馬の門人なり

逸齋【書】樋口觀之、字は子順、通稱昌之助、書家なり明治十年四月二十一日歿す年六十三

逸然【書畫】名は性融、字は逸然烟霞と號す黄檗山の僧たり

逸勢【書】橘氏、清友の子、蚊松殿と稱す、本朝三筆の一人なり（三筆とは嵯峨天皇弘法大師及逸勢とす）延暦年中遣唐使藤原葛野麿に從ひ入唐す僧懷素其書を慕ひ就いて學びたりといふ弘仁九年勅を奉じて内裏の北門安嘉偉鑑達智の三門の額を書せり

逸雲【書畫】木下氏、名は相宰、字は公宰逸雲は其號、又た物々子、養竹山人晩に如螺山人の號あり世々長崎に在りて乙名たり書畫俱に董玄宰を法とす慶應年間江戸に下り其友藤堂凌雲を訪ふ凌雲話次其如螺と名づくる所以を問ふ逸雲曰く余近時人の爲めに書を帆足某に索む某曰く一紙にして謝金三兩にあらざれば書かずと余一日書を致し是を詰りて云く京師の書人竹洞、梅逸、岸駒、海僊の輩生前其名高くして多く潤筆を得たり死後價なきは豈耻る所に非ずや先生の書後世果して價を增すや否と故に余は潤筆の幾許に關せず只々意の向ふ所に任じ寫して人に與ふ然れども死後必ず價を加ふべし蓋し螺貝は死後却て聲を發す余是を思て自ら如螺と號すと逸雲江戸より歸る時路を海上に取る會々風波起り船破れて歿す時に年六十八逸雲死後長崎に於て遺墨展覽會を開らく其出品三百餘幅の多きに至るも一として同圖なしと云ふ逸雲兼て篆刻を工みにし詩及び和歌に妙なり墨林今話中逸雲の小僧を記して甚だ稱賞す其海外に名あること知るべし

逸峰【書】名草氏、安藝の人、小田海僊に從つて畫を學び諸家の妙處を研究し遂に一家を成し名聲世に鳴る

逸齋【書】多胡氏、石州侯の老臣、畫を能くす文政年中

逸翁【書】佐藤氏、美濃の人安政年中

喚舟【書畫】多く粉本を藏し其畫くところ皆古法を學べり

疎石【書】名は疎石、字は夢窓、天龍寺の開基傳は世の知る所なり和歌をよくし書に巧みなり夢窓國師を賜はる

疎林外史 高久靄厓の別號

斯英【書畫】周文に學びて文珠の像を畫けり

無墨【書】長尾清、田能村竹田の門に入りて學び後清國に遊びて書法を研究し幾ばくもなくして

歸朝す、雁を畫くに巧みにして我が朝の邊壽民と稱せらる明治二十六年天覽の榮を蒙むる同二十七年十一月三日歿

無外【畫】無外和尚、名は爾然、聖一國師の弟子なり後實相寺の開基となる書を好みて善くす

無學【畫】無學祖元禪師は宋國明州の人、姓は許氏、弘安二年歸化す禪僧なり北條時宗之に參謁すること殊に渥し圓覺寺を創立し師を以て其開祖となす同九年九月三日寂す佛光禪師と諡す書を好み自畫の肖像今寺に藏せりといふ

覺 **無學**【畫】大妙禪師を賜ふ

無幻【畫】名は光塗、字は無幻、專ら普漢の古風を倣ひて畫名高く從ひ學ぶ者頗る多し

無上【畫】名は學尊、字は無上、黃檗山の僧たり詩文をよくす

無心【畫】名は大覺釋氏

無瑕【畫】名は明智、字は無瑕釋氏なり

無染【畫】名は淨善、字は無染、丹崖と號す黃檗山の僧たり

無禪【畫】寺田氏、無禪と號す平安の人上代樣の書法を能くす

無隱【畫】名は道費、無隱と號す釋氏なり

無聞【畫】名は性覺、字は無聞、黃檗山の僧たり詩文に名あり

無關【書畫】名は圓爾、東福寺の開基也書畫を能くす正應二年寂す年八十

無外禪尼 千代能の號

無名 池大雅の名

無邊 吉村蘭陵の號

無二 一谷文晁の別號

無礙齋 久隅守景の別號

無何齋 長命晏春の別號

無名

翁 岡本宜就の別號

無名翁 池田英泉の別號

無腸 上田秋成の號

絕海【畫】名は中津、字は絕海、蕉堅と號す天龍の知識にして詩名高し

費隱【畫】名は通容、異邦經山寺の住たり隱元の師なり詩書を能くす

等楊 雪舟の名

等揚【畫】拙宗と稱す畫風雪舟と相伯仲し何れか判別しがたきものあり日本禪人の落類あり或は曰ふ雪舟の門人なりと或は曰ふ雪舟のことなりと

等歲【畫】高野山に住す九州の人也畫法を雪舟に學び其法を得といへども筆力粗にして師に似ず

等源【畫】東山義政の四男なり香嚴院に住す畫を好みて周文を師とす

等碩【畫】秋月の子なり薩州の太守に仕ふ常に雪舟の風を悅び後ち遂に一家を成す大永年中

等侗【畫】波月と號す大隅の人、薩州の太守に仕ふ秋月を師として學ぶ又た雪舟の風を慕ひて花鳥を能くす後ち僧となりて周德と共に周防に居る天正年中

等本【畫】初め周文を學ぶ後雪舟を法とす遺墨は扇面に多くして概ね山水花鳥なり天文年中

等貴【畫】宗山と號す南禪寺の住僧、伏見宮邦高親王の子、法を梅仙に嗣ぐ丹青を善くし和歌に巧みなり

等悅【畫】雪舟の門人、畫を能くす圓齋の祖先也山水人物に巧みなり慶長年中

等宿【畫】禪祖並に雜畫に妙なり

等牧【畫】筆意雪舟より出で木筆の法に類せり

等

安【畫】雪舟に學びて筆法頗る雅致あり天文年中

等周【畫】京師紫野大德寺中龍源院の壁に書きしものあり群仙猿鶴ともに墨畫にして其其筆格雪舟に似て甚だ巧みなり元和年中

等巳【畫】雪舟の畫風を模して山水を寫す然れども筆致柔鈍なり天文年中

等慶【畫】奥州會津の人、宗湛の風を學び又兼ねて雪村の筆格あり着色の花鳥に巧みなり天正年中

等雪【畫】雪舟の法を學びて人物を善くす天文年中

等耕【畫】周文及び雪舟の法を學びて人物花鳥を能くす

等禪【畫】松浦氏、甫雪と號す肥前の人、雪舟を師として能く其法を傳ふ殊に宋元の畫法を究めて其奥旨を得文明年中

等譽【畫】泉州堺安養寺に住す專念宗の僧なり雪舟の筆法を學び鐘馗の圖に巧み也

等梅【畫】九州の人、修驗者にして高野山に住す雪舟の風を學び其筆力周耕に相似たるところあて墨色山水を書き又た大黒天の像を能くす文明年中

等藝【畫】雪舟を學び筆意等梅に似たり文明年中

等空、【畫】雪舟の法を學びて墨畫の觀音を書くに巧みなり

等雪【畫】雪舟の法を學びて人物を能くせり天文年中

等傳【畫】清良と號す雪舟の風を學びて花鳥を能くす後ち僧となりて周德と共に周防に居る天正年中

等簡【畫】周文に學びて山水花草等に巧みなり文明年中

等清【畫】攝津の人、雪舟の筆格を學び畫に巧みなり天文年中

等顔【畫】雲谷

等顔は通稱治平（一に治兵衛に作る）肥前の人、初め畫を狩野松榮に學び後ち揚門に入りて雪舟の畫法を得たり水墨又たは淡彩を以てし筆意雪舟の風致あり遂に一格を成す雲谷派と稱するもの即ち是れ也毛利輝元嘗て雪舟の筆法を傳ふるものを索む等顔乃ち之に應ず是に於て其名海内に噪く雲谷は雪舟が住む所の寺名なり等顔は雪舟より三世を繼ぐ故に雲谷と云ふ天正年中

等屋【畫】雲谷等顔の嫡子なり畫風父に似たり天正年中

等益【畫】雲谷等顔の二男、法橋に叙す三世雲谷と稱す慶長年中

等與【畫】雲谷等益の子也法橋に叙す元和年中

等爾【畫】雲谷等益の二男法橋に叙す寛永年中

等璠【畫】雲谷等與の季第、等與嗣子なきを以て其家を繼げり法橋に叙す寛永年中

等哲【畫】雲谷氏、後ち法橋に叙す元和年中

等徵【畫】雲谷派の畫を學びて能手なり法橋に叙す元和年中

等春【畫】備前の人、姓氏詳ならず嘗て周文備前に之く一童あり馬を畫く周文之を奇とし携へて京に歸り畫法を授く技大に進む是れ即ち等春なり後雪舟の門に入りて研究す最も山水花鳥を能くせり永正年中

等坡【畫】雪舟に學びて水墨の畫を能くし多くは十牛の圖を畫く文明年中の人

等元【畫】甫周と號す雪舟に學びて能く壽老人を畫く天明年中

等琳〔一世〕【畫】堤氏雪舟の畫裔と稱す一家の畫風を立てゝ雪舟流の町畫工を興せり世に聾等琳と稱す元錄年中

等琳〔二世〕

【畫】月岡玲二と稱す畫を一世堤等琳に學ぶ寛保年中の人

等琳〔三世〕【畫】二世等琳の門人なり初め堤秋月、後ち秋榮、又た雪山と稱す畫風一派を成し安永天明の頃專ら祭幟、繪燈籠、張交繪を描きて大に世に稱せらる門人甚た多し文政年中淺草に於て茶番細工と稱する見せ物を工夫せる人なり

等伯【畫】長谷川氏、名は信吉、通稱久六、雲谷は其號なり能登七尾の人、家世染工たり等伯幼にして畫を好み遂に志を立てゝ京師に至り狩野氏に學ぶ當時狩野派に永德、友松、山樂等相繼ぎて聲譽あり等伯其及び難きを察し遂に雲谷派に入り自ら僧雪舟五世の畫孫と云ふ力量氣局超拔磊落家法に拘泥せず韻致紙外に溢る故に時人寸紙猶ほ珍藏すといふ年七十餘にして辨慶土佐坊昌俊を擒にするの圖及び本邦寺涅槃の像の大幅を書く筆力壯時の如し觀る者之を驚嘆す歿年月詳ならず蓋し文祿年中

等林【畫】長谷川氏本と小野氏、後ち等伯の養子となり畫法を養父に學び名手の稱あり天正年中

等作【畫】長谷川氏雲谷派の畫家なり等林の養子、法橋に叙す元和年中

等雲【畫】長谷川氏、宗圓の子にして雲谷派の畫人なり元和年中

等悦【畫】長谷川氏、雲澤と號す等伯の族なり慶長年中

等的【畫】長谷川等伯の門人にして雲谷と號す能く師の筆意を得たり慶長年中

等重【畫】長谷川等等伯の子なり或は曰ふ等伯の族弟なりと墨畫に巧みにして竹林七賢の圖は其最も得意とするところといふ元和年間の人也

等舟【畫】江戸の浮世畫師なり二世等琳の門人にして一派の畫風を爲し妙手の稱あり別に霞山と稱す文化年中

等觀釋秋月の號

等英【畫】長谷川等英は等伯の門人なり寛永頃

等運【畫】長谷川等運は等英の子なり畫法を父に學び松平右京太夫の畫師となる元祿年中の人

等貴【畫】僧等貴は伏見宮邦高親王の子なり南禪寺に住し畫圖を嗜む正長年中の人

等明【畫】三世等琳の門人なり文政頃

等明【畫】下野の人にして吾學院と稱す等琳の門人なり文政年中

等俊【畫】長谷川氏、等伯の二子、畫法を父に受く筆力父に超ゆ且つ設彩を狩野光信に學び人物鳥獸花卉を能くす清水寺に和田酒宴の圖あり世に板畫の絕妙を賞す元和年中

等隨【畫】下野國吾樂院の住職なり二世等琳に畫を學び法印に敍す天保年中

等學【畫】長谷川等學は等伯の門人なり天正年中

等川【畫】三代目等琳の門人なり文政年中

等揖【畫】北川氏、武と稱す狩野派の畫家なり天保年中

等榮【畫】三世等琳の門人なり文政頃

等船【畫】三世等琳の門人なり文政頃

等覺院【畫】酒井抱一僧となりたるとき等覺院大僧正に任せらる

等閑齋【畫】谷源兵衞と稱す越後の人なり狩野派の畫家なり天保年中

寒殿司【畫】一に湛殿主といふ、東福寺の住僧なり畫を明兆に學び赤脚子の號を受く尤も

人物及び佛像を能くす東福寺山門上樂器の圖は則ち其畫く所なり應永年中

寒竹【書】荒井氏、名は常償、寒竹は其號、津輕家に仕ふ狩野常信に畫法を學びて能くす筆意能く師に似たり

寒雪【書】荒井氏、寒竹の男なり畫法を父に學びて能くす

寒白【書】牧牛を畫くに妙を得たりと云ふ

寒巖【書】北山孟熙、字は文奎、幕府の手先與力なり畫法を漢人に取る文晁の師なり寛政十三年正月十八日歿す

寒巖【書】名は壤灰寒巖と號す

寒山【書】岡田半江の別號

寒泉【書】竹中氏、豐後の人南宗畫家なり弘化年中

寒林【書】小林氏、翠と稱す常陸新治郡の人、初め畫法を椿々山に學ぶ晩年武州大師河原平間寺に隱棲す明治二十年歿す年七十五

寒葉齋 建額凌岱の別號

湛慧【書】名は信培、字は湛慧、詩文をよくす

湛月【書】名は紹圓、字は湛月、詩をよくす

湛殿司 寒殿司の一名

象山【書】佐久間啓、一名は大星、字は子明、通稱啓之助、後ち修理と改む信州松代藩士なり江戸に出で林述齋、佐藤一齋の門に學び渡邊崋山、梁川星巖、坪井信道等と交りを訂す學和漢に精通し亦夙に洋學を究め兵術に精し嘉安以降外艦の事より海内多故を極む象山深く意を海防の策に留め論議する所多し元治元年七月十一日刺客の爲めに殺さる年五十四明治二十二年憲法發布の日を以て特に正四位を贈らる

象先【書】明兆に學びて觀音の像を畫けり或はいふ相國寺の象先ならんと何れが是なるを知らず永亨頃の人

象先 中山高陽の名

堯然【書】【画】堯然法親王は俗名常嘉、後陽成天皇第六の皇子、母は勾當內侍孝子、侍明院基存の女なり親王は妙法院の宮と稱し二品に敍せられ天臺の座主となり慈恩院と號す兼ねて書畫を善くす畫く所の人物花鳥甚だ風致あり書亦一派を成す又石州流の茶法を嗜みて之れに達せり寛元元年閏八月二十三日薨ず年六十一

堯尊【書】巨勢氏、采女正弘高十一代の孫、藏人永有の孫、三河法橋有尊の長子、南都一乘院の侯人となり安藝法橋といふ歷世畫工の名族たり與正菩薩の命を以て釋尊の像を畫けり建長年間の人

堯田【書】大島氏、名は信、字は立卿、本氏は矢島後ち大島と改む世々阿部侯に仕ふ文化二年八月武州忍に生る二歲王父松羊抱きて石川梧堂が書する所の扁額の下に立つ仰ぎ見て笑ふ四歲の時試みに艸書山の字を書せしむ成る王父之を奇とす乃ち筆紙を與へて書を學ばしむ六歲の時能く屛風に大の字を書す文政癸未九月侯封を白河に移す隨從す十七八歲より趙松雪を學び二十五歲に至りて晉唐を學ばんと欲す高遠にして企て及び難し因つて江戸に遊び自から書する所を携へ卷菱湖に就て之を質す菱湖の曰く松雪を學べば以て

一家を成すに足る然れども眞に書を學ばんと欲せば晉唐に如くはなしと是に於て日夜淬勵偏へに古法書を臨摹し益々晉唐書法の妙を知る四十二歳事を以て藩を去る四方に漫遊し遂に居を東京に卜す左院に出仕し廢官の後東京師範學校に聘せられ後之れを辭す明治十八年十月歿す

堯恕【書】後陽成天皇の皇子なり初名を覺圓と云ふ曼珠院宮又た龍華院宮と稱す嘗て山水及野牛を畫けるあり筆力雄勁超越なり寛永廿年七月薨ず年七十三

堯春【畫】林田氏、堯春は其號筑後の人、畫を三谷勝波に學ぶ

菱湖【書】巻氏、名は大任、字は致遠、一の字は起巖、弘齋と號し又右內と稱す新潟の人幼にして怙恃を喪ひ家產稍々落つ菱湖奮然として別に門戶を建て以て家聲を振はんと欲し年十九にして笈を負ひ遠く江戶に來り學を龜田鵬齋に受く鵬齋素と書法を善くす菱湖之れと議論を上下し大に得る所あり是れより專ら六書を攻め兼ねて聲韻訓詁の學を講じ又好みて唐詩を作る其の論法最も嚴森也故に矜愼肯て苟も作らず作れば必ず醇乎たる唐音にして亦た一家を爲す遂に籍を江戶に占め門を開きて教授す從ひ游ぶ者日に多く遠近字を乞ふ者其の門に接し縉紳公侯聘して其の書法を受く業大に振ひ名亦著はる人となり卓犖にして氣を負ひ又酒を嗜みて以て自から放縱す客至れば則ち狂歌拍浮晝を窮めて夜に繼ぎ以て倦をなさず然れども酒間興到れば必ず筆を命じて且つ飲み且つ書し千紙立どころに就る其筆力の放縱なる勢飛動せんと欲す故に書を乞ふ者は必ず酒を載せて往く菱湖嘗つて人の請に應じて即席に數十紙を書す其人嘆賞して曰く咄々眞に松雪に逼ると菱湖更らに其書を取り反覆熟視して曰く余の書誤まらず余の書誤まらず余歷代の名家に於て學ばざる所なし故に形似たる耳心血の注ぐ所は唐人の書法を以て之れを書するに在り彼那んぞ知ることを得んと其自から信ずる所の如し嘗て岳陽諸州に歷遊して府中に駐ること旬餘一日客あり舍の主人に問て曰く館する者を誰とかなす答て曰く江戶書家弘齋先生と客哂ひて曰く豈に僞字を作る弘齋ならん乎と菱湖障を隔てゝ之を聞き意太だ不平乃ち出でゝ之に接し其名を問ふ答へて曰く稻川玄度と試みに字を論ずるに考證精確菱湖大に服すと云ふ天保十四年四月七日病みて歿す年六十七

菱潭【書】巻氏、原と深澤氏、後ち菱湖の養子となる書風養父に類せり明治十九年二月二十九日歿す年四十一

菱華　百々廣年の號

菱渚【書】河野氏、通稱條左衛門、越前の人、書を父幽篁に學ぶ

菱汻【書】森氏、豐前の人、書を兄靜古に學ぶ文久年中

菱雨【書】片桐氏、字忠治と稱す越後の人、嘉永年中

博文【書】伊藤氏、幼名利助後に俊介更に博文と改め春畝と號す長州藩士、天保十二年九月を以て下の關に生る早く國事に奔走して力を王事に致す明治十八年官制を改革し內閣を組織するや始めて內閣總理大臣に任せられ憲法制定征清の役等に就て功勞太だ多く又樞密院議長の顯職に任じ後ち韓國統監となる性

文學を好み詩書を能くす明治四十二年十月二十六日哈爾賓に於て韓人に狙撃せられて薨ず年六十九

湖龍齋【畫】磯田氏、浮世繪を學びて法橋に叙せらる江戸小川町土屋家の浪人なり後兩國藥研堀に住し畫を以て生計を營めり

湖山小野氏、初め横山氏、名は愿、字は長愿、一字は侗翁湖山と號す又嘗て御硯を賜りて賜硯樓の號あり三州吉田藩主松平伊豆守の領地に生れ後ち儒を以て藩侯に事へ士籍に列す明治中興の初め徵士權辨事に拜し後ちに藩の權少參事に任じ藩學を督す廢藩後再び仕へず優遊風月に吟嘯す明治四十三年四月歿す年九十七

湖龍齋鈴木春信の號

湖窓英一舟の別號

湖風【畫】中野氏、越中の人、狩野派の畫家なり文政年中

雲室【畫】名は鴻漸、字は元儀、後ち名は了軌、字は公範、雲室は其號、又石窓の號あり江戸光明寺の住僧なり初め谷文晁に學び後ち一變して伊孚九の畫法を慕ひ特に山水人物に長す文政十年五月九日歿す年七十五

雲溪【畫】名は支山、俗姓山岐、名は岐の字を分てる也雪舟の門人にして山水人物花鳥を能くせり天文年中の人

雲石【畫】中村氏、狩野安信の門人にして初め三之丞と稱せり

雲門【書】増田有厚、字は子泉、雲門は其號、山縣周南に學び經史に通じまた書を善くす世々萩侯の儒臣なり

雲峰【畫】大岡氏、名は成寬、字は公栗、次兵衞と稱す畫を善くす幕府旗下の士天保頃

雲齋【書】正木孚、字は有顒、奥州の人學を紀平州に學び草書を善くす

雲溪【書】賴在滋、雲溪は其號、又遊龍と號す長崎の書家也

雲朝【畫】能登の人、山水を能くし殊に風致あり

雲甫【畫】名は良因、周若と號す、周文の風を學べり其畫けるもの多くは觀音の像なり

雲洞【書】野村思敬、雲洞は其號、別に舒嘯醉墨の號あり長崎の人、書を能くせり

雲川【畫】目賀田氏、法橋に叙せらる

雲川【畫】中山氏、文武の達人なりまた畫を森狙仙に從ひて學ぶ人物花鳥禽獸に巧みなり天保三年十一月二十日歿す

雲圃【畫】島崎輔吉字は黃裳、蝦蟇窟と號す上野の人なり性畫を好みて門人多し文政年中の人

雲竹【書】北向氏、名は觀、或は正實、雲竹、溪翁、太虛庵等の號あり通稱八郎右衞門平安の人、細楷を善くす書風空海に似たり俳人芭蕉書を此人に學ぶといふ元祿十六年五月十二日歿す享年七十二

雲巖【書畫】大燈國師に從ひ書畫を學びて能くす法橋に叙せらる

雲潭【畫】鏑木德胤、書及び詩賦煎茶を好みまた兼て月琴を能くす其流廣く世に行たる明治三年九月二十五日歿す年五十二

雲濱【書】梅田氏、名は定明、一の名は義質、源次郎と稱す、雲濱は其號、別に湖南と號す若州小濱の人、山崎闇齋の學統を繼ぐ嘉安以來海内多故國危き纍卵の如し雲濱慷慨憂憤時事を痛論して已まず諸國志士と共に盡瘁す終に幕吏に捕はれ安政六年九

月十四日獄中に病歿す年四十四

雲泉【書畫】釧雲泉、名は就、字は仲孺、通稱は文平、岱岳、六石、磊落居士等の別號あり肥前國島原の人、幼時父に隨て長崎に遊び清國人に就て書法を學ぶ尤も南宋畫風を喜び殊に山水に巧み也倪雲林、董北苑、王麓臺等の筆意を慕び氣韻の清高風神の超越を以て稱せらる畫を作るに心手相適するにあらざれば輕々しく筆を下さず故に巨幅も一氣にして成るありと雖も一紙月を經て寫さゞるあり或は半にして意興盡くる時は則ち筆を抛ち酒を呼び茶を點し閑談放逸數日に渉ることあり縉紳富豪の請ふあれば峻拒描かず却て村童野老の需に應じ喜で之を與ふ常に酒を愛し又茶を嗜む漫遊をなすに兩笈あり一は畫具文房器を收め一は茶器及び漁獵の具を收む一日畫を寫し一月漁獵をなす性孤峭にして潔癖あり故に製茶汲瀹皆手自から之を爲す嘗て東山道本莊驛に寓す本莊は利根川を隔ること十町斗り雲泉毎晨茲に到りて盥漱し且つ水を汲みて歸り茶料に充つ率ね此類なり漫遊中越後國出雲崎に終る時に文化八年十一月十六日年五十三、田野村竹田其鄕里肥前に至り追慕の意を述べて詩を作る曰く吹笛詠詩黃大痴、董北苑後眞畫師、維吾東方受衣鉢、雲川子外更爲誰、と時輩の爲めに重んせらるゝこと此くの如し

雲鳳【書畫】雲鳳女史は篠田氏、名は儀、伊豆下田の人、經學を朝川善菴に受け書を中井董齋に學ぶまた大沼枕山、小野湖山等名流の間に周旋し文才煥發世女儒を以て之を推す後王政復古に際し開拓使女學校教授に擧げらる後病に依りて職を辭し愛宕山麓に住し女兒を聚めて教授す或は厚俸を以て之を招くものありといへども辭して就かず明治十六年五月二十日歿す年七十四

雲樵【書畫】池田氏、名は政敬、字は公維、半仙と號す率雲樵夫は其別號なり初め畫を以て津藩に仕へ後京都に住す京都畫學校の建つや擢じられて教授となる南畫に巧みなり明治十九年歿す年六十二

雲處【書畫】蒔田氏、名は亮、字は公弼、越前の人、書畫を能くし又た詩に工み也初め高柳邑の代官となり後ち仕を致して江戸に來り諸名士と交る中年右手意の如くならず左手を以て書く慶應元年夏鄕里岩山に歿す年五十四

雲山【書畫】山崎氏、名は吉、字は元祥、雲山は其號、能登の人、畫を能くするを以て賴山陽、野呂介石等に推稱せらる天保七年九月十九日歿す年六十七

雲澤 長谷川等悅の號

雲旅 増山雪齋の別號

雲石【書畫】内海氏、京都の人、山水花卉を能くす天保年中

雲亭【書畫】大谷氏、通稱貞造、石見の人、畫を前田半田に學ぶ天保年中

雲亭【書畫】南蘋の畫法を學び法橋に叙せらる天明頃

雲仙【書】狩野氏、元仙方信の子、父業を繼て家法を守れり弱年にして歿す

雲洞【書畫】岡田氏、榮藏と稱す越後の人、文久年中

雲窓【書畫】佐久間氏、通稱利右衞門、信濃の人、安政年中

雲章 松田氏、奥州津輕の人書を能くす天保年中

雲烟【書畫】安西於菟雲烟と號す江戸の人なり畫事に

精しく且つ自ら畫技を能くす著す所近世名家書畫談尤も世に行はる嘉永年中

雲叢【畫】高橋氏、武藏の人、南宗畫家なり明治年中

雲岳【畫】飯島雲岳は出雲の人、狩野の畫法を學ぶ文化年中

雲晁【畫】寒川雲晁は養齋の養子なり畫を父及び大岡雲峰に學ぶ文政十一年生

雲岱【畫】三技氏、甲斐の人、南宗の畫法を學ぶ明治年中

雲林【畫】本多氏、正憲と稱す駿河の人、畫を僧鐵翁に學ぶ明治年中

雲鳳【畫】野村氏、雲鳳其號播摩の人、文久年中

雲溪【畫】稲川氏、名は春、下總佐倉の人石井潭香の書法を學び其筆意に入る

雲潭【畫】小山氏、名は環、雲潭は其號、別に雉橋逸民の號あり石井潭香、永井磐石に書を學ぶ

雲母溪 林羅山の別號

雲錦亭 加茂季鷹の別號

貫之【畫】紀氏、望行藏人の子なり書を能くし尤も和歌に長ず延喜中御書預となり越前權少掾内膳典膳少内記を歷大内記に轉じ從五位下に叙せられ加賀美濃介となる延長中大監物右京亮に拜せられ土佐守となる承平中任滿ちて京師に歸る天慶中玄蕃頭となり從五位上に進み木工權頭に遷り從四位下に叙せられ九年卒す嘗て姪友則及び凡河内躬恒、壬生忠岑も勅を奉じて古今和歌集を撰し貫之序を作る世其能く和歌の大體を論ずるを稱す書成りて之を上る朝廷特旨を以て貫之の歌一百首を採り以て撰に入る又た萬葉集鈔五卷を撰す後ち又た勅を奉じて新撰和歌集を撰す尋ぎて任に土佐に赴く既にして京に歸り書成りて未だ進めず帝崩ず貫之序を作りて時に奉御に及ばざるを憾む詞甚だ哀切なり著す所に紀行一卷あり名けて土佐日記といふ世人相傳ふ貫之嘗て紀伊に赴き夜和泉を過ぐ騎する所の馬地に伏して進まず貫之之を怪しむ人告げて曰く此地に蟻あり能く神に通ず今禮なくして過ぐ豈其怒りに觸るゝに非ざるを得む哉と貫之大に驚き急に馬より下りて盥嗽し和歌を詠じて謝して曰く「かき曇りあやめも知らぬ大空にありと星をば思ふべしやは」と馬即ち進むと集あり世に傳はる後人歌仙を撰するに貫之を推して右行第一となし以て柿本人麻呂に配し稱して和歌の祖宗となす世に重んぜらるゝこと此の如し

貫雄【畫】板橋氏、江戸の人畫法を住吉弘貫に學び山水人物花卉に長ず筆力超凡氣格高邁を以て稱せらる世或は土佐の古風ありと稱す明治初年病歿す年五十八

貫魚【畫】守住貫魚、字は士濟、通稱德次郎、回春齋、寄生軒等の號あり年十六畫を渡邊廣輝に學び技大に進む廣輝乃ち輝の一字を以て授く是れより輝義と稱す天保四年住吉内記廣定の門に入る廣定、定字を授く因りて定輝と改む後ち廣定名を弘貫と改めたるを以て貫字を授く乃ち改めて貫魚と稱す後ち弘貫盡く秘訣を傳ふ貫魚時に年五十繪畫共進會に出品すること兩回一は銅印を受け一は金印を賞賜せらる後帝室技藝員となる明治二十五年二月二十六日歿す年八十五男勇魚女周魚共に畫を能くす

貫義【畫】山名

氏、幼にして畫を好み住吉弘貫の門に遊ぶ技漸く熟せんとする頃戊辰の變ありて畫道も亦た衰頽す而かも堅く志を守りて精勵刻苦す明治六年六月始めて測量司に入りて僅に生計を助け十年內國勸業博覽會事務局の雇となる後ち二十一年寶物取調局の設置せらるゝや其委員となりて全國を巡回すること殆と三年に及ぶ二十七年八月東京美術學校繪畫科敎授に任じ又た帝室技藝員古社寺保存會委員となる明治三十五年六月十一日歿す年六十七

貫古【畫】佐香氏恒齋、と稱す嘉永年中

晩泰 金井烏洲の號

晩稼【書】吉田氏、香竹と號す長崎の人、東京に住す明治一新の後ち仕宦せしが幾ばくもなく辭して専ら書道を究む

晩成山房 高久靄崖の別號

晴川【畫】狩野氏、名は養信、玉川また會心齋と號す、通稱は庄三郞、榮信の長男、法印に叙せられ晴川院と稱す、畫法は父に學びて風格も亦相似たり弘化三年正月十九日歿す年五十一、木挽町狩野第七世

晴洲【畫】佐々木氏、初め中井藍江に學び後ち鎌田巖松に從ふ山水人物花鳥に巧みなり安政三年十日歿す年五十四

晴良【書】藤原氏、尹房の子、天文十七年十二月關白となり左大臣に至る能書の譽あり天正七年四月薨ず年五十四淨明珠院關白と稱す

晴湖【畫】奧原氏、古河藩士某の女、性繪畫を好み初め密畫を作る後淸人魏貽に就て其筆法を問ひ畫風一變す詩を能くし書に妙なり

晴翠【畫】奧原氏、通稱てる、陸前半田の人、安政四年四月生る奧原晴湖に就て南畫を學び其養女となる

棲谷【畫】佐久間氏、幕臣佐久間長宣の女、明治元年十月生る瀧和亭に就て南畫を學び女流の名手と稱せらる

棲鳳【畫】竹内氏、通稱恒吉、京都の人、畫法を土田英林に學ぶ元治元年生

景山【書】德川氏、名は齊昭、字は子信、景山又た潛龍閣と號す、水戸藩主、從三位權中納言となる義公の志を繼ぎ力を王事に竭す政餘文雅風流を愛し書畫共に妙に最も篆隷を能くす萬延元年八月十五日薨ず年六十一、文久二年朝廷從二位權大納を追贈し明治二年又た詔して從一位を加贈す

景山【書】渡邊氏、名は誠夫、字は信卿、景山は其の號、別に靑蘿庵と號す江戸の人、書法を蔦烏石に學びて草行を能くす晩に常陸に隱栖し風月を侶とし以て老を養ふ天明中

景山【書】堀氏、名は正超、字は君燕通稱は禎助、景山と號す南湖の從弟なり篤學精敏詩文に長じ又た書に妙なり寶曆七年九月十九日京師に病歿す

景蘇【畫】景蘇泉首座は相國寺の僧、墨竹を能くす延德四年五月寂す

景阿彌【畫】室町家の畫を作るといふ、永享年間の人

景種【畫】兵部と稱す、雪舟に學びて畫を善くす、甞て杜甫草堂の圖を畫く筆力老成と稱す姓氏詳ならず文安の頃

景文【畫】松村景文、字は子藻、華溪と號す、月溪の弟なり、畫法を兄に受け遂に妙手に至る殊に花鳥に長ず其墨色の美麗なる兄に

勝るものあり弘化元年四月二十六日歿す年六十五**景齋**【書】石見の人、雪舟の門に入りて學び草花を書くに巧みなり文安頃**景綱**【書】宇都宮氏、泰綱の子、從五位上下野守たり薙髮して法名を雲瑜と云ふ和歌並に書を能くせり永仁六年五月朔日卒す年六十四**景邑**【書】村尾文熙、石溪と號す讃岐の人、書を能くす文化の頃**景長**【書】長尾氏、良齋、輝香と號し但馬守と稱す圖書を善くす享祿元年正月十五日卒す**景弘**【書】中原氏、書を善くし左史生に任ぜらる大嘗會のとき勅命を奉じて主基の屛風を書けりといふ**景政**【書】小原氏、京師の人、長崎に住す書を好みて雜書を善くせり**景山**【書】小原氏、京師の人、長崎に住す好みて雜書を善くす天保年中**景則**【書】佐知氏、里見義弘の臣にして佛書を善くす**景山**【書】小柴氏、名は守典、景山と號す守道の門人にして幽探齋と號す大坂の人、家風を學びて書を善くす**景樹**【書】香川氏、桂園又た東塢亭の號あり臨池を善くし又頗る書に巧みなり因幡鳥取の人、荒井氏の子なり明和五年生る小字を銀之助といふ生れて三歲善く文を讀みまた善く書けり父母大に之れを鍾愛しのち姨婿奧村氏の養子となし名を純德、字を眞十郎と改む七歲にして和歌を詠ず清水貞固の門に入りて和歌を學び堀南湖に就いて儒學を修む年十五にして百人一首註釋を撰し之を名けて百首異見と稱す十八歲にして父母の許可を得京都に至りて某縉紳家に仕へ勤學練行終に香川景柄の養子となる寛政八年從六位下に叙せられ陸奥介に任ぜらる後ち長門介と改む天保十二年從五位下に叙せられ次いで肥後守に遷る同十四年三月二十七日卒す享年七十有六**景年**【書】今尾氏、名は永勸、字は子裕、景年は其の號別に聊自樂居と號す幼名猪三郎弘化二年八月京都に生る年十一畫を浮世繪師梅川東居に學び後鈴木百年の門に入り精勵刻苦諸流を參酌し遂に自ら一家の風を成す弘化二年生**景徐**釋宜竹の名**景金園**住吉廣行の號**景信**【書】狩野景信は友益氏信の子なり書を父に學ぶ寛永年中**景信**【書】狩野氏、宗元の子、正信の父なり藤原大職冠鎌足の後胤二階堂主計允行政源頼朝に仕て政所執事となる行政七世の孫を宗元といふ伊豆加茂郡狩野に居る因て狩野を氏とし景信は出羽次郎と稱し足利義政に仕へて近侍となり後ち薙髮して越前入道祐周と號す法眼に叙せらる曾て僧周文と共に東山殿の壁に書くといふ**景春**【書】南景春は南山の子なり父の祿を襲ぎて越中前田家に仕へ詩及書畫を能くす享保二年四月歿す年二十三**景叔**【書】石見の人なり雪舟に書法を學びて花卉を能くす文安頃の人**景鱗**【書】北島氏、京都の人、文政年中

越後法眼【書】雪舟に就いて學ぶ文明八年三月二十八日阪本田中村に於て雪舟より

君臺觀を受く其姓氏詳ならず

越山〔書〕芳川氏、名は顯正、越山と號す、德島藩士なり天保十二年十二月生る幕末王事に勤む維新後諸官を累進して國務大臣に任せらるゝこと數回なり詩文書を能くす

越水平林東岳の別號

屠龍酒井抱一の別號　**屠龍齋**高嵩谷の別號

陽信森永春齋の號

虛舟子近衞家熙の號　**虛舟**釋古澗の號　**虛庵**〔畫〕信州諏訪の人別に草龍子と號す能く鷹を畫く天明年中

傑峰〔畫〕源能和尙の法嗣書畫を能くす應永年中

復賴支峰の名　**復宜齋**草場佩川の號

堤雨〔畫〕野崎氏、通稱眞一、江戸の人、畫を鈴木其一に學ぶ

栗石〔畫〕飯塚氏、遠江の人、嘉永年中

硯田農夫田崎草雲の別號

溫甫〔畫〕新井氏、信州の人、畫を岡本俊彥に學ぶ安政年中

嵐溪〔畫〕五十嵐氏安政年中　**嵐溪**〔畫〕長谷川氏、通稱吉右衞門、京都の人、長嵐溪と稱す嘉永年中

偃武〔畫〕吉田氏、京都の人、初め市川君圭に從つて畫を學び後ち岸駒に從遊す天保年中

筌齋〔畫〕鈴木氏、南宗畫家文政年中

棣芳草場佩川の號

斐瞻〔畫〕眞村氏、通稱長之助、蘆江又た耕靄山人等の號あり畫法を熊斐に學びて能くし世に名あり天明年中

湘雲祇園南海の別號　**湘夢**江馬細香の號

補拙廬田能村竹田の別號

備溪齋雪舟備中に在りし時此號を用ふ

鄕止樓後脇嵩之の別號

茗菡居高芙蓉の別號

貴信森周峰の名　**貴信**池田涼岷の名　**貴榮**〔畫〕武田氏、四條派の畫を

能くす文政年中

萍流〔書〕小川氏、通稱は勇、初名は布淑、後ち薙髮して萍流と號す詠歌を善くす蘆門四天王の一人なり文政三年二月二十七日歿す年六十五

朝陽 岡田新川の別號

朝陽 藪孤山の別號

就庵 戴曼公の別號

衆芳軒 小野蘭山の別號

菜翁 建部巣兆の別號

都門賣菜翁 藤本鐵石の別號

日本書畫人名辭書中卷終